兵庫県文化財調査報告　第137冊

三木市所在

大池7号墳

── 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XI ──

1995年3月

兵庫県教育委員会

大池（おおいけ）7号墳

―― 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XI ――

1995年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は、兵庫県三木(みき)市久留美(くるみ)字田井野(たいの)181－4他に所在する大池(おおいけ)7号墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、山陽自動車道（神戸～三木）建設工事に伴い、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3．発掘調査は平成元年度に確認調査を実施し、全面調査は平成4年度に実施した。

4．本書に掲載した遺跡分布図と位置図は建設省国土地理院発行の5万分の1「高砂」と「神戸」を、また位置図には建設省国土地理院発行の20万分の1「姫路」と「京都及大阪」を使用した。

5．本書に使用した方位は国土座標第Ⅴ系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T. P.）を使用したものである。方位は座標北を指す。

6．本書の第9図と第10図に使用したブロックダイヤグラムは、Tak. OHI氏の作成した「BIRD'S–RYE」を使用した。

7．本書の執筆分担は目次に示したとおりである。

8．出土したガラス玉の分析を奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏に依頼し、玉稿を載いた。

9．遺物は、土器については数字番号のみ、金属製品をF、玉類をJと分類し、数字にて個体の識別を行っている。

10．本報告にかかる遺物・写真などの資料は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1－5）及び魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630－1）に保管している。

11．本書の編集は伴　悦子の補助を得て髙瀬一嘉が担当した。

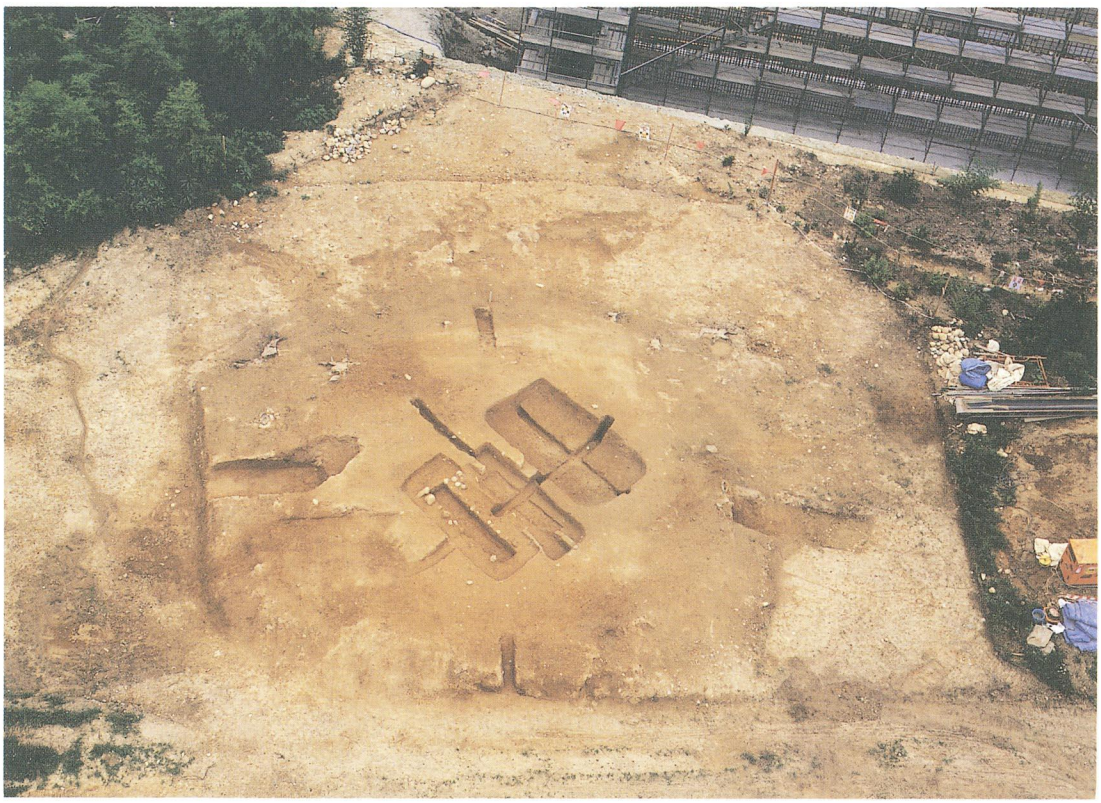
大池７号墳遠景（東から）

大池７号墳遠景（南から）

平井山より望む（南東から）

調査前全景（西から）

調査前全景（南西から）



第１～第３主体部（上空から）

第１主体部

第２主体部

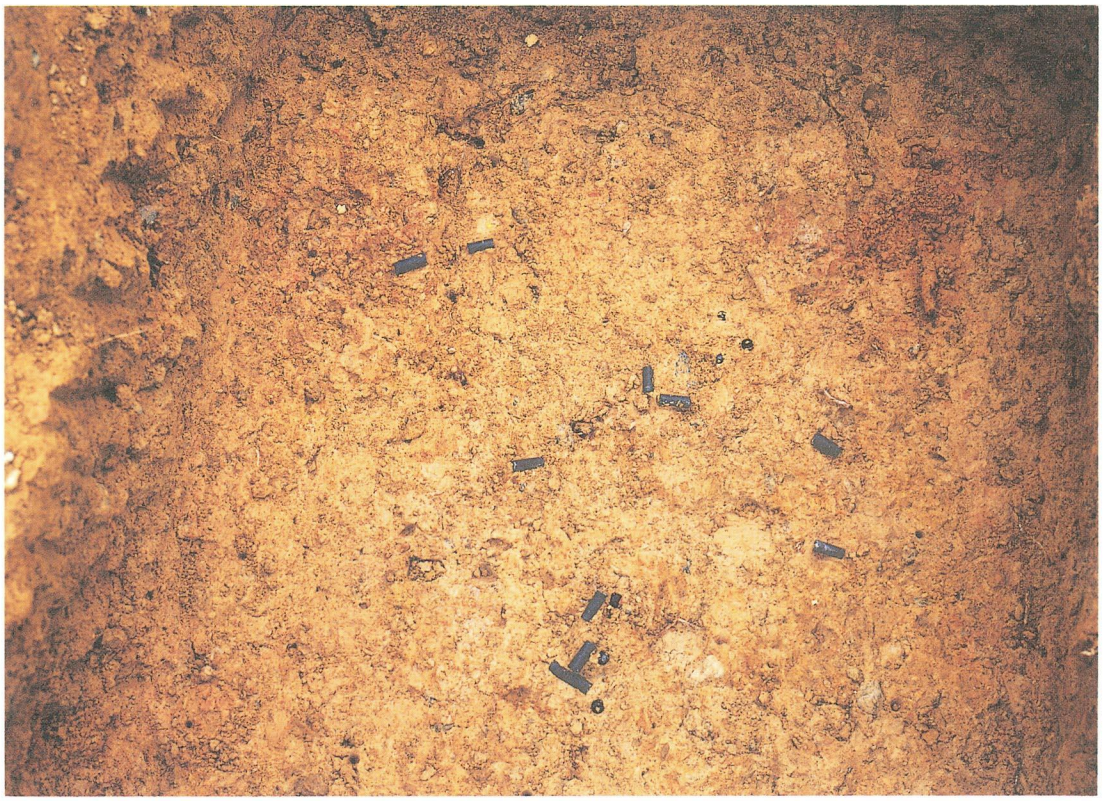
第３主体部

第４主体部と甕

第 5 主体部

第 6 主体部

第１主体部玉類出土状況



第３主体部玉類出土状況

本文目次

第１章　調査の経緯

１．調査に至る経過 …… 髙瀬一嘉（１）

２．発掘調査の経過

確認調査 …… 山上雅弘（１）

全面調査 …… 髙瀬一嘉（２）

３．整理作業の経過 …… 髙瀬一嘉（３）

第２章　遺跡の環境 …… 長浜誠司

１．地理的環境 ……（６）

２．歴史的環境 ……（６）

第３章　全面調査の結果 …… 髙瀬一嘉

第１節　立地と現状 ……（９）

第２節　調査の概要 ……（13）

第３節　墳丘 ……（17）

第４節　下層検出の主体部

１．第１主体部の調査 ……（20）

２．第２主体部の調査 ……（28）

３．第３主体部の調査 ……（32）

第５節　上層検出の主体部

１．第４主体部の調査 ……（40）

２．第５主体部の調査 ……（45）

３．第６主体部の調査 ……（47）

４．墳丘上面出土の遺物 ……（52）

第４章　まとめ …… 髙瀬一嘉（53）

付載　大池７号墳出土ガラスの分析 …… 肥塚隆保（67）

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　遺跡の位置(1) …… 4
第３図　遺跡の位置(2) …… 4
第４図　遺跡の位置(3) …… 5
第５図　遺跡の位置(4) …… 5
第６図　周辺の遺跡 …… 7
第７図　大池古墳群位置図 …… 10
第８図　大池７号墳周辺の等高線図 …… 11
第９図　大池７号墳周辺のブロックダイヤグラム …… 12
第10図　墳丘のブロックダイヤグラム …… 14
第11図　検出主体部位置図 …… 15
第12図　墳丘断面図 …… 18
第13図　下層検出の主体部 …… 19
第14図　第１主体部実測図 …… 21
第15図　第１主体部玉類出土状況 …… 23
第16図　第１主体部　東側土器出土状況 …… 27
第17図　第２主体部実測図 …… 29
第18図　第２主体部　土器出土状況 …… 30
第19図　第３主体部実測図 …… 33
第20図　第３主体部　土器出土状況 …… 35
第21図　上層検出の主体部 …… 39
第22図　第４主体部実測図 …… 41
第23図　第４主体部と甕出土状況 …… 42
第24図　第４主体部　土器出土状況 …… 43
第25図　第５主体部実測図 …… 46
第26図　第６主体部実測図 …… 48
第27図　第６主体部　土器出土状況 …… 50

表目次

第１表　各主体部概要表 …… 56
第２表　出土土器観察表(1) …… 57
第３表　出土土器観察表(2) …… 58
第４表　出土土器観察表(3) …… 59
第５表　出土土器観察表(4) …… 60
第６表　第１主体部出土　管玉計測表 …… 61
第７表　第１主体部出土　切子玉計測表 …… 61
第８表　第１主体部出土　小玉計測表 …… 61
第９表　第１主体部出土　粟玉計測表 …… 61
第10表　第２主体部出土　勾玉計測表 …… 62
第11表　第２主体部出土　小玉計測表 …… 62
第12表　第２主体部出土　粟玉計測表 …… 63
第13表　第３主体部出土　管玉計測表 …… 64
第14表　第３主体部出土　小玉計測表 …… 64
第15表　第３主体部出土　粟玉計測表 …… 64

巻頭目次

巻頭図版１　上・大池７号墳遠景（東から）　下・大池７号墳遠景（南から）
巻頭図版２　上・平井山より望む（南東から）　下・調査前全景（西から）
巻頭図版３　上・調査前全景（南西から）　下・第１～第３主体部（上空から）
巻頭図版４　上・第１主体部　下・第２主体部
巻頭図版５　上・第３主体部　下・第４主体部と甕
巻頭図版６　上・第５主体部　下・第６主体部
巻頭図版７　上・第１主体部玉類出土状況　下・第３主体部玉類出土状況

図版目次

図版１　第１主体部出土土器

図版２　第１主体部出土金属器(1)

図版３　第１主体部出土金属器(2)

図版４　第１主体部出土玉類

図版５　上・第２主体部出土土器　下・第２主体部出土金属器

図版６　第２主体部出土玉類(1)

図版７　第２主体部出土玉類(2)

図版８　上・第３主体部出土土器　下・第３主体部出土玉類

図版９　第３主体部出土金属器

図版10　上・第４主体部出土土器　下・第４・第５主体部出土金属器

図版11　第６主体部出土土器　図版12　第６主体部出土金属器

図版13　第４主体部西側出土の甕　図版14　墳丘上面出土の遺物

図版15　大池７号墳の位置

図版16　上・遺跡の遠景（北西から）　下・遺跡の遠景（南西から）

図版17　上・航空写真（北東から）　下・第１～第３主体部（南東から）

図版18　上・調査前（西から）　下・第６主体部検出時（西から）

図版19　上・第１・第２主体部検出時（北西から）　下・墳丘断ち割り状況（北西から）

図版20　上・第１主体部（南から）　下・第１主体部棺内（西から）

図版21　上・中・棺外東木口部土器出土状況　下・棺外西木口部土器出土状況

図版22　上・第１主体部棺内東半（南から）　下・第１主体部棺内西半（南から）

図版23　上・棺外東木口部遺物出土状況（西から）　下・棺外東木口部玉類出土状況

図版24　上・Ｆ３出土状況（南から）　中・Ｆ５～14出土状況（南から）

下左・Ｆ２出土状況（南から）　下右・Ｆ４出土状況（南から）

図版25　上・棺内土層堆積状況（東から）　下・墓壙内土層堆積状況（東から）

図版26　上・中・下・第１主体部断ち割り状況（南から）

図版27　上・第１～第３主体部（北から）　下・第１主体部墓壙（南から）

図版28　上・第２主体部（南から）　下・第２主体部（西から）

図版29　上・中・下・第２主体部棺外東木口部土器出土状況（西・北・東から）

図版30　上・Ｆ16出土状況　中・Ｆ15出土状況　下・墓壙内土層堆積状況（東から）

図版31　上・第２主体部断ち割り状況（北から）　下・第２主体部断ち割り状況(東から)

図版32　上・第３主体部（北から）　下・第３主体部（西から）
図版33　上・棺外土器出土状況（北から）　下・棺外土器出土状況（東から）
図版34　上・棺内鉄刀と棺外土器出土状況（東から）　下・棺外東木口部土器出土状況
図版35　上・棺内鉄器出土状況（西から）　下・鉄刀（Ｆ18）出土状況（北から）
図版36　上・棺内玉類出土状況（西から）　下・調査風景
図版37　上・第４主体部（南から）　下・第４主体部と甕（西から）
図版38　上・下・第４主体部棺外東木口部土器出土状況（南西から・西から）
図版39　上・東側木口部分（西から）　下・西側木口部分（東から）
図版40　上・棺内掘り下げ状況（東から）　下・棺内土層体積状況（東から）
図版41　上・縦断ち割り東側（南から）　下・縦断ち割り西側（南から）
図版42　上・第４主体部西側　甕出土状況（北から）　下・同左（東から）
図版43　上・第５主体部（南から）　下・第５主体部（西から）
図版44　上・第５主体部棺内（東から）　下・Ｆ29・30出土状況（北から）
図版45　上・第６主体部（北から）　下・第６主体部（西から）
図版46　上・第６主体部棺内（東から）　下・棺内東側鉄器出土状況（北から）
図版47　上・鉄刀（Ｆ34）出土状況（北から）
中左・Ｆ31、Ｆ35～39出土状況（東から）　中右・Ｆ32出土状況（南から）
下左・西木口付近鉄器出土状況（東から）　下右・Ｆ33出土状況（北から）
図版48　上・棺外東木口部土器出土状況（北から）　下・土器出土状況アップ（東から）
図版49　上・縦断ち割り東側（北から）　下・東側木口部・粘土（南から）
図版50　上・墓壙断ち割り状況（東から）　中・下・東側、西側木口石
図版51　上・墳丘断ち割り東側（南から）　下・墳丘断ち割り西側（南から）
図版52　第１主体部出土玉類（カラー）
図版53　第２主体部出土玉類（カラー）
図版54　第３主体部出土玉類（カラー）・第１・２・３主体部玉類復原
図版55　第１主体部出土土器(1)　図版56　第１主体部出土土器(2)
図版57　第１主体部出土土器(3)　図版58　第２主体部出土土器
図版59　第３主体部出土土器(1)　図版60　第３主体部出土土器(2)
図版61　第４主体部出土土器(1)　図版62　第４主体部出土土器(2)
図版63　第６主体部出土土器(1)　図版64　第６主体部出土土器(2)
図版65　墳丘上面出土の遺物　図版66　第１主体部出土金属器
図版67　第３主体部出土金属器　図版68　第２・４・５主体部出土金属器
図版69　第６主体部出土金属器　図版70　出土金属器拡大（Ｆ４・５・23・32）

第１章　調査の経緯

１．調査に至る経過

山陽道、正式には「高速自動車国道　山陽自動車道　吹田山口線」は、吹田市を起点にして瀬戸内沿岸の都市を結んで山口市に至る総延長約434kmの高速道路である。

このうち、神戸～三木間（28.6km）は第９次施工命令区間として、昭和57年に整備計画が決定した。その後、昭和59年11月30日に施工命令が出され、昭和60年３月25日に路線発表が行われた。

事業区域内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、日本道路公団と兵庫県教育委員会で協議を重ね、昭和61年４月と昭和62年３月の２回にわたって分布調査を実施した。その結果、52箇所について確認調査の必要が認められた。

この結果を受けて、兵庫県教育委員会では平成元年度より確認調査を実施した。三木市久留美から細川町にかけては、確認調査でのNo.35～41地点が存在している地区である。当該地区の確認調査はNo.35～38・40・41地点を平成元年度に、No.39地点を平成２年度に実施した。今回報告を行う大池７号墳はNo.39地点にあたる。

２．発掘調査の経過

確認調査（遺跡調査番号900082）

調査担当者　大平　茂・山上雅弘・三原慎吾

山陽自動車道（神戸～三木間）建設に伴って昭和61・62年度に分布調査が実施された。

この調査の際、大池７号墳周辺では直径約15ｍの隆起地形が認められ、古墳の墳丘である可能性が指摘された。このため、この時点で同墳をNo.39地点と仮称して確認調査を実施することとなった。

確認調査は平成２年度に山陽自動車道（神戸～三木間）関連で行った39地点のうちの１地点として実施した。平成２年度は平成２年７月３日～平成３年３月20日の期間、確認調査を行ったが、No.39地点はこのうち９月26・27日・10月１日の３日間調査を行っている。

尚、周辺地形が大きく改変されていたため「三木市遺跡分布地図」との照合が遅れたが、確認調査の現地作業に並行して照合を行ったところ、当古墳が同分布図掲載の大池７号墳であることが判明した。このため以後は同墳を大池７号墳とした。

調査は隆起地形を南北方向に直交する長さ15ｍ、幅１ｍのトレンチを設定し、人力掘削によって行った。その結果、表土下より須恵器多数が検出され、隆起地形は古墳の墳丘であることが判明した。また、主体部は木棺直葬であることが予想された。

この他、墳頂には疫病平癒を祈願した碑が建立され、その周囲には３体が１対となった石仏

が碑を囲むように配置されていた。また、墳丘南斜面には石祠が置かれ、前面に数珠が祀られていた。これらは江戸時代に当地区で疫病が流行した際に設けられたという伝承が、地元で語り継がれている。

全面調査（遺跡調査番号920086）

調査担当者　髙瀬一嘉・多賀茂治・長濱誠司

全面調査は日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査面積は506㎡である。調査期間は平成４年６月３日から開始し、平成４年７月23日に終了した。

なお、墳頂部にあった天明８年銘の一字一石供養塔と、墳丘南斜面の石祠については、慎重に除去作業を行い、路線外南側の地権者所有地に移設された。

調査は発掘範囲より広めに伐木作業を行い、調査前の写真撮影及び地形測量を行った。その後、人力により表土の除去・除根作業を行った。

表土・流土を除去したのちに、慎重に掘り下げながら埋葬主体部の検出を試みた。埋葬主体部検出後は写真撮影、図面での記録を採った。

全ての埋葬主体部を検出したのちに、ヘリコプターによる航空写真撮影を行った。最後に盛土部分を旧表土部分まで掘り下げる断ち割り作業を行い、記録を採って調査は終了した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の上記３名の職員が行い。現場補助員に高島知恵子、室内作業員に五百蔵道代が調査に参加した。

発掘調査日誌抄

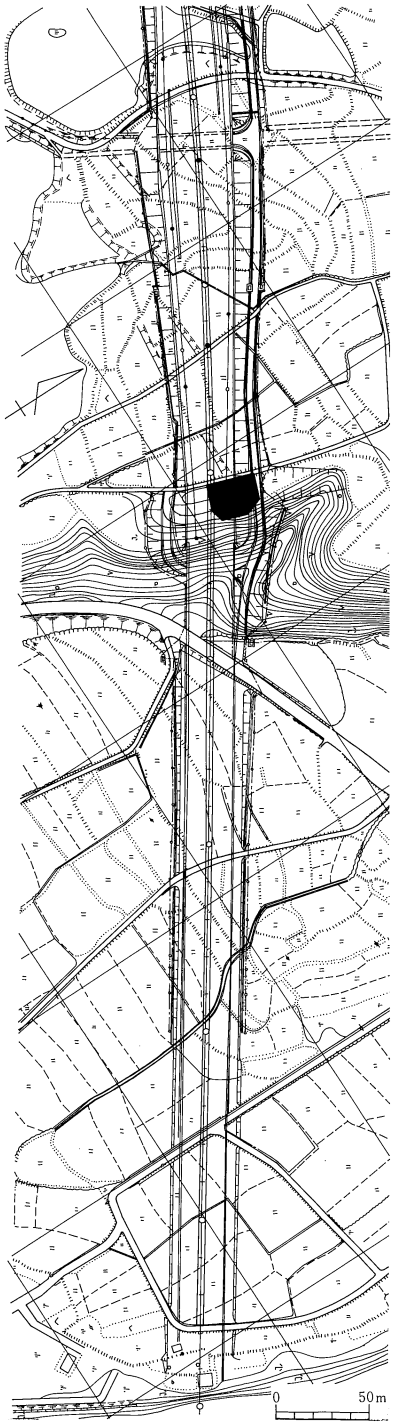
６月２日～６月９日　東西南北各方向に土層観察用の土手を残し墳丘の表土除去と除根作業を行う。

６月10日　墳頂部北側で主体部検出（第６主体部）。

６月11日　墳頂部南側で主体部検出（第４主体部）。墳裾部掘削。周溝は存在しない。

６月16・17日　第６主体部、棺内掘り下げ。

６月18・19日　第６主体部実測、写真撮影。



第１図　遺跡の位置

6月22～26日　第6主体部遺物取り上げ、断ち割り。第4主体部精査中にこれに切られた主体部検出（第5主体部）。さらに第4主体部に近接して墳頂部に大甕出土。

6月29～7月3日　第4主体部棺内掘り下げ。棺内に刀子あり。墓壙内東木口付近に土器出土。同主体部実測、写真撮影、レベリング、遺物の取り上げ、のち断ち割り。第5主体部掘削。棺内より鉄鏃2点出土。

7月6日～10日　第5主体部実測、写真撮影、レベリング、遺物の取り上げ、のち断ち割り。ここから約50㎝掘り下げて主体部の検出を行う。第4・5主体部の下より新たに主体部検出（第1主体部）棺内掘り下げ。棺内より玉類、鉄器出土。棺外木口部に土器出土。写真撮影、実測、遺物取り上げ、レベリング、断ち割り。7日に久留美地区の方々を対象とした現地説明会を行う。

7月13日～17日　第2主体部掘り下げ。棺内より玉類、鉄器出土。棺外木口部に土器出土。写真撮影、実測、遺物取り上げ、レベリング。第3主体部検出。

7月20日～23日　第2主体部断ち割り。第3主体部掘り下げ。棺内より玉類、鉄器出土。棺外南側頭部に土器出土。写真撮影、実測、遺物取り上げ、レベリング、断ち割り。20日にヘリコプターによる写真撮影実施。22日より墳丘断ち割り。写真撮影、実測を行い、23日で終了。

3．整理作業の経過

出土品整理作業は、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、平成6年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

大池7号墳の出土品は、土器が12箱、金属器が40点、玉類が230点であった。

出土した遺物の整理については、現地調査の期間内に水洗い・ネーミング作業が終了していたため、当事務所においては接合・補強、金属器の保存処理、遺物実測、復元、遺物写真撮影、写真整理、トレース、レイアウトの各作業を行い、発掘調査報告書を印刷刊行した。

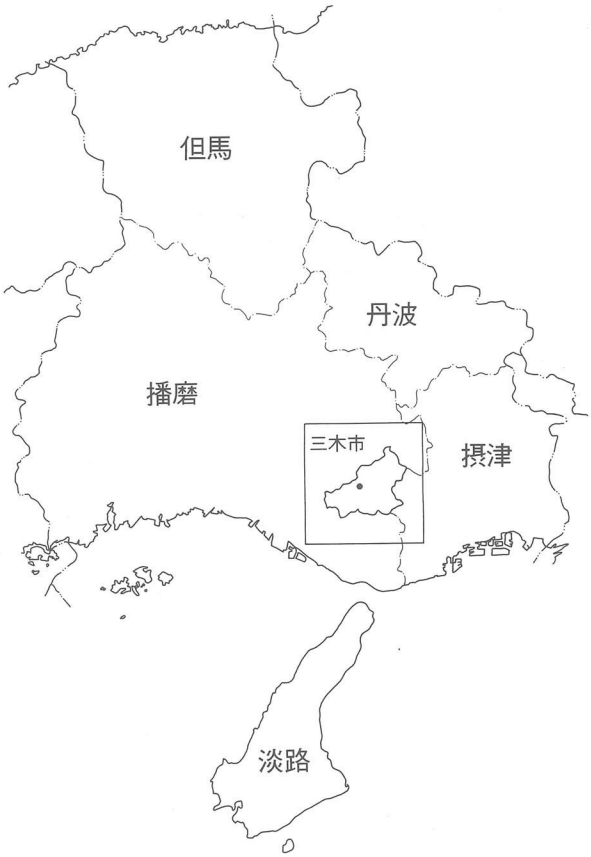
整理作業は髙瀬が主に担当し、当事務所非常勤嘱託員の伴　悦子、密谷美音、早川亜紀子、飯田章子、蔵　幾子、船木昌美、中西睦子、日々雇用職員の松下えりながあたった。

金属器の保存処理作業は加古千恵子が担当し、当事務所非常勤嘱託員の和田寿佐子、喜多山好子、村上京子、石塚宣子があたった。

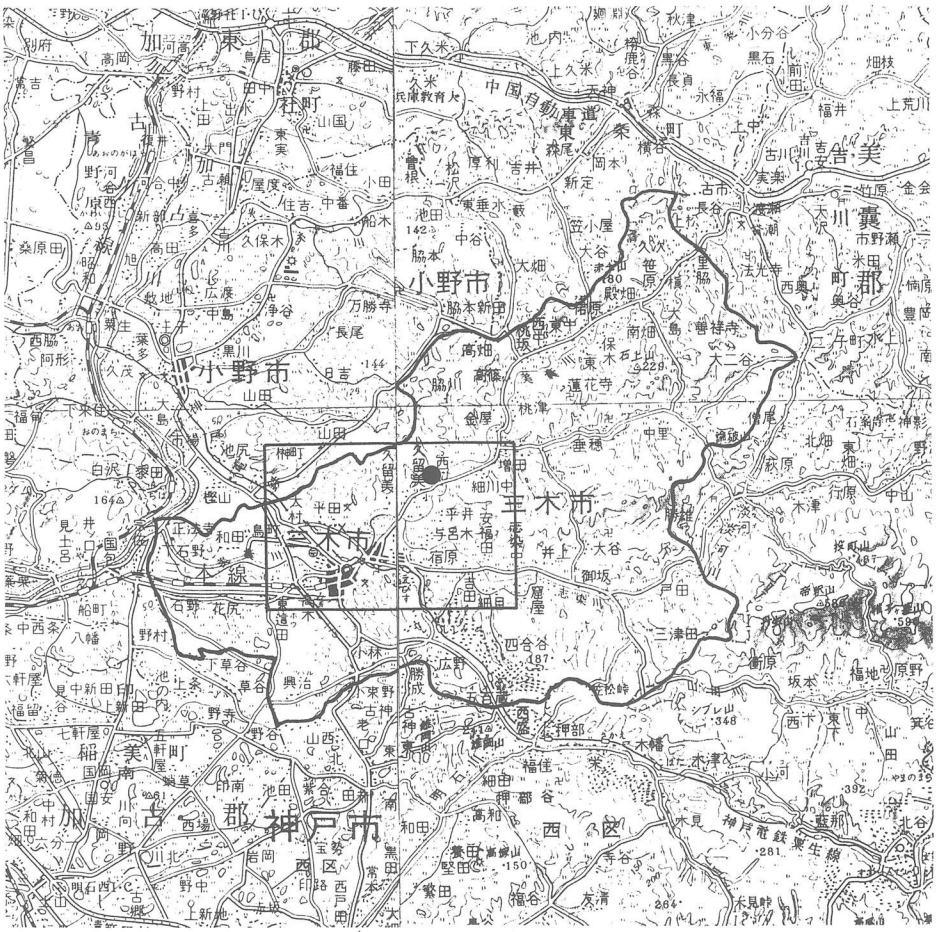
調査協力者

発掘調査と整理作業にあたっては以下の各氏に御教示・御指導をいただいた。

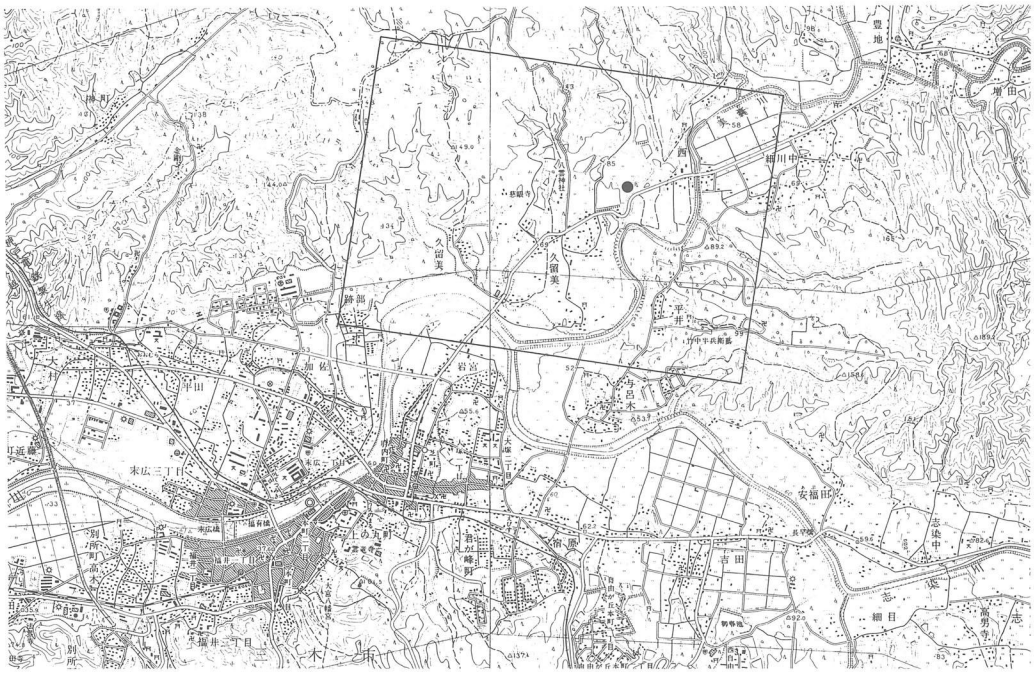
櫃本誠一、毛利哲夫、松村正和、小網　豊、高島信之（敬称略、同不順）



第２図　遺跡の位置(1)



第３図　遺跡の位置(2)



第４図　遺跡の位置(3)

第５図　遺跡の位置(4)

第２章　遺跡の環境

１．地理的環境

三木市は播磨の東縁部に位置し、面積120.04㎢、人口77,295人（平成５年８月１日現在）を数える。酒米を主とした農業と大工道具等の金物工業が広く知られた主要産業である。

市域は加古川支流の美嚢川及びその支流志染川沿いに広がっており、市東南部に標高300ｍを越す山地がある他は小野台地、いなみの台地等の標高100～200ｍのなだらかな台地に囲まれている。

市の中心部は美嚢川・志染川合流点の西側に位置し、中世以降の城下町・宿場町である。ここは播磨から有馬を経て摂津・京へ到る有馬街道、明石より丹波へ通じる丹波街道の交差点となっており古くから交通の要衝地であった。市街地を外れると純然たる農村地帯が広がっている。しかし、1970年代以降阪神間のベッドタウン化とゴルフ場の造成、1990年代の山陽自動車道建設によってのどかな田園風景は変貌を遂げつつある。

２．歴史的環境

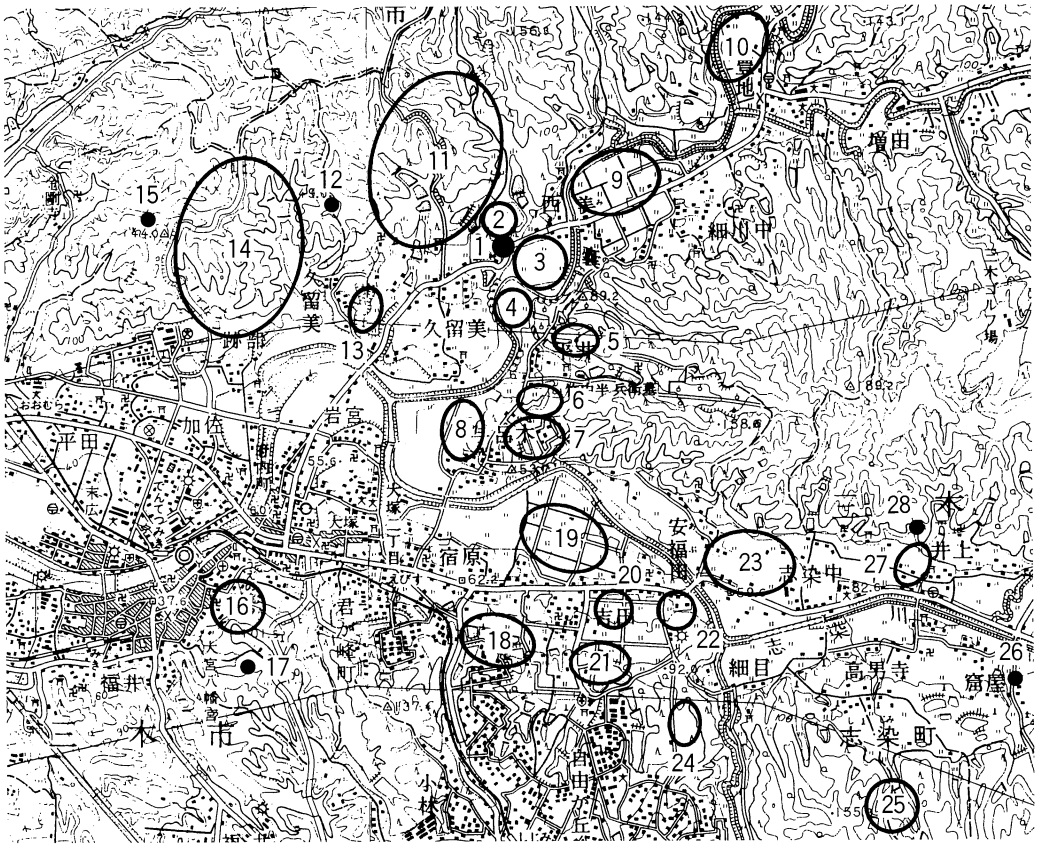
三木市付近では旧石器・縄文時代の遺跡は今のところ確認されていない。加古川中流域は石器散布地が濃密に分布している地域であるものの、三木市内ではこれまで与呂木で尖頭器、正法寺山でナイフ形石器が採集されているのみである。しかし、与呂木遺跡の調査ではチャート製石核等が出土しており、今後三木市域についてもこの時期の遺跡が明らかになるものとみられる。

三木市内で生活の痕跡が顕著に認められるのは弥生中期以降である。井上遺跡では中期の土器を包含する遺構が検出されている。中期後半の集落は細川女谷遺跡・与呂木遺跡で検出されている。このうち与呂木遺跡では径９ｍを越える住居址が検出され、内部から複数の鉄製品が出土している。

弥生後期から古墳時代の集落は志染町戸田遺跡・小戸田遺跡等で確認されている。戸田遺跡では弥生末から古墳時代の溝が検出され、弥生土器、古式土師器が出土している。この中には搬入土器と推定される壺型土器が含まれている。吉田遺跡では弥生時代末の壺棺墓が検出されている。弥生時代を特徴づける青銅器は正法寺山で細形銅剣が、高篠地区で小銅鐸が出土している。

古墳時代に入ると三木市内でも多くの古墳が築造される。市内には400基以上の古墳が確認されているが、その大半は後期の小型古墳である。

三木市内で前期まで遡りうる古墳は加古川・美嚢川合流点付近の丘陵上に築造された前方後円墳の愛宕山古墳のみである。後期古墳の多くは群集墳を形成している。中でも小野市にまた



1．大池古墳群
2．田井野遺跡
3．西ケ原遺跡
4．平井遺跡
5．平井窯跡群
6．与呂木窯跡群
7．与呂木群集跡
8．与呂木遺跡
9．細川中遺跡
10．豊地佐野遺跡
11．久留美窯跡群
12．慈眼寺山城
13．久留美門前遺跡
14．跡部窯跡群
15．加佐山城
16．三木城
17．三木山１号墳
18．宿原窯跡群
19．吉田遺跡
20．吉田南遺跡
21．吉田窯跡群
22．東吉田遺跡
23．中村遺跡
24．吉田群集跡
25．高男寺廃寺
26．窟屋扇坂遺跡
27．井上遺跡
28．井上経塚

第６図　周辺の遺跡

がって所在する樫山古墳群は150基以上の大規模な群集墳であり、数支群に分かれる。樫山古墳群と同一丘陵の三木側には正法寺山、和田愛宕山・妙界寺、才神等の古墳群が所在する。その他平田、加佐、跡部、久留美・毛谷、与呂木・平井、吉田、広野古墳群等が三木市域を取り巻く台地の縁辺部に所在している。これらの古墳群は内部主体は横穴式石室が少なく、木棺直葬や箱式石棺が大半を占める傾向にある。しかし、発掘調査の行われたものはごく僅かであり、破壊が進んでいるものが多く、不明な点が多い。発掘調査が行われた三木山１号墳は調査の結果１墳丘に５主体部を持つ木棺直葬墳であることが判明した。

古墳時代後期の集落は西ケ原遺跡・平井遺跡・細川女谷遺跡がある。西ケ原遺跡は発掘調査の結果住居址が30棟以上検出された。

加古川中下流域では奈良時代に入ると次々と寺院が建立される。三木市域ではこの時期の寺院跡は知られていない。しかし、小和田神社裏遺跡から白鳳期とみられる摶仏が出土しており、当地域にも仏教の受容があったことは間違いない。志染町志染中地区・戸田遺跡、細川町東中遺跡・細川中遺跡では律令期の集落が確認されている。

三木市域を取り巻く台地縁辺には、９世紀から13世紀の長期にわたり須恵器及び瓦を生産した窯跡群が所在する。北部の台地には跡部・久留美窯跡群、南部の台地には吉田・宿原窯跡群があり、ここで生産された瓦は平安京内の寺院に供給されていたことが指摘されている。

中世には東吉田遺跡・豊地佐野地区・豊地宮ノ前地区・西中遺跡・久留美門前遺跡等各地で集落が形成されている。戸田遺跡では鎌倉時代とみられる集石墓が検出されている。

三木市街南側の丘陵上には中世後期に別所氏築造の三木城が所在する。城内は部分的に発掘調査が行われ、西ノ丸跡と推定される場所からは貯蔵庫とみられる大甕群等が検出されている。三木城を遠望できる丘陵上には織田軍側が城攻めの際に築造した平井山本陣をはじめ加佐山・慈限寺山城等の陣城がある。

参考文献

・兵庫県三木市『三木市史』1970

・兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史』第１巻　1974

・神戸新聞出版センター『兵庫県大辞典』　1983

・三木市教育委員会『社会教育活動状況報告書』1985～1990

・三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財調査概報』－昭和50年度～昭和59年度－　1986

・毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会『久留美毛谷』－古窯跡群等の発掘調査報告書－1990

・兵庫県教育委員会『与呂木遺跡発掘調査報告書』　1993

第３章　全面調査の結果

第１節　立地と現状

大池７号墳は、三木市久留美字田井野に所在する。現在の三木市街の中心部から北東方向に約2.5kmに位置している。古墳は、北側の山並みからつづく段丘上の東側先端部に位置している。標高は80～82ｍを測る。

眼下には加古川の支流である美嚢川が形成した沖積地と、開析谷である毛谷から供給を受けた土砂で形成された扇状地形がひろがる。この段丘上の地区が字田井野であり、段丘下の地区が字西ケ原である。段丘下に位置する西ケ原地区との比高差は20～25ｍである。

段丘上・下ともに現在は水田として開発されている。

大池７号墳は大池古墳群として認知されている。この古墳群は合計７つの円墳からなる古墳群で、古墳時代後半の時期に築造されたものと考えられている。

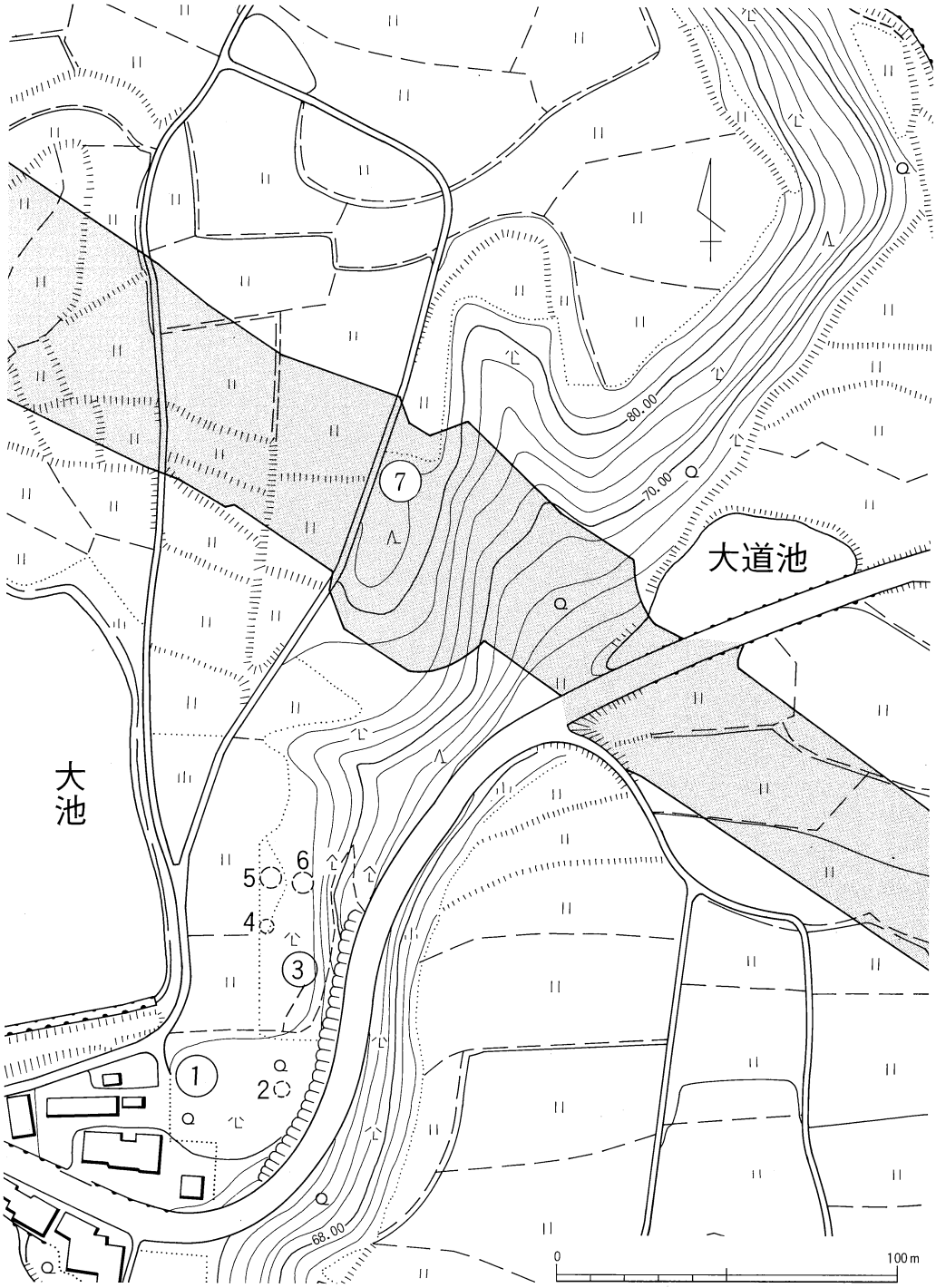
現状では、この古墳群は水田開発に代表される後世の地形の改変によって壊滅的な破壊を受け、４号墳・５号墳・６号墳は、すでに消滅し、正確な位置も不明確である。

残された１号墳・３号墳・７号墳のうち１号墳は上面の大半が削平され基底部のみ残存しているに過ぎない。古墳中央部に窪みがわずかに認められ、その形状から横穴式石室が存在していたものと考えられる。この窪みからは耳環が１点出土したと伝えられており、現物は久留美地区に所在する八雲神社に保管されている。中空耳環に分類されるもので、環表面は金色を呈することから金鍍金、あるいはなんらかの方法で金を用いた表面装飾が施されていたことが認められる。環内面は緑青色の錆に覆われ、中芯の痕跡は認められない。遺存状態は悪い。

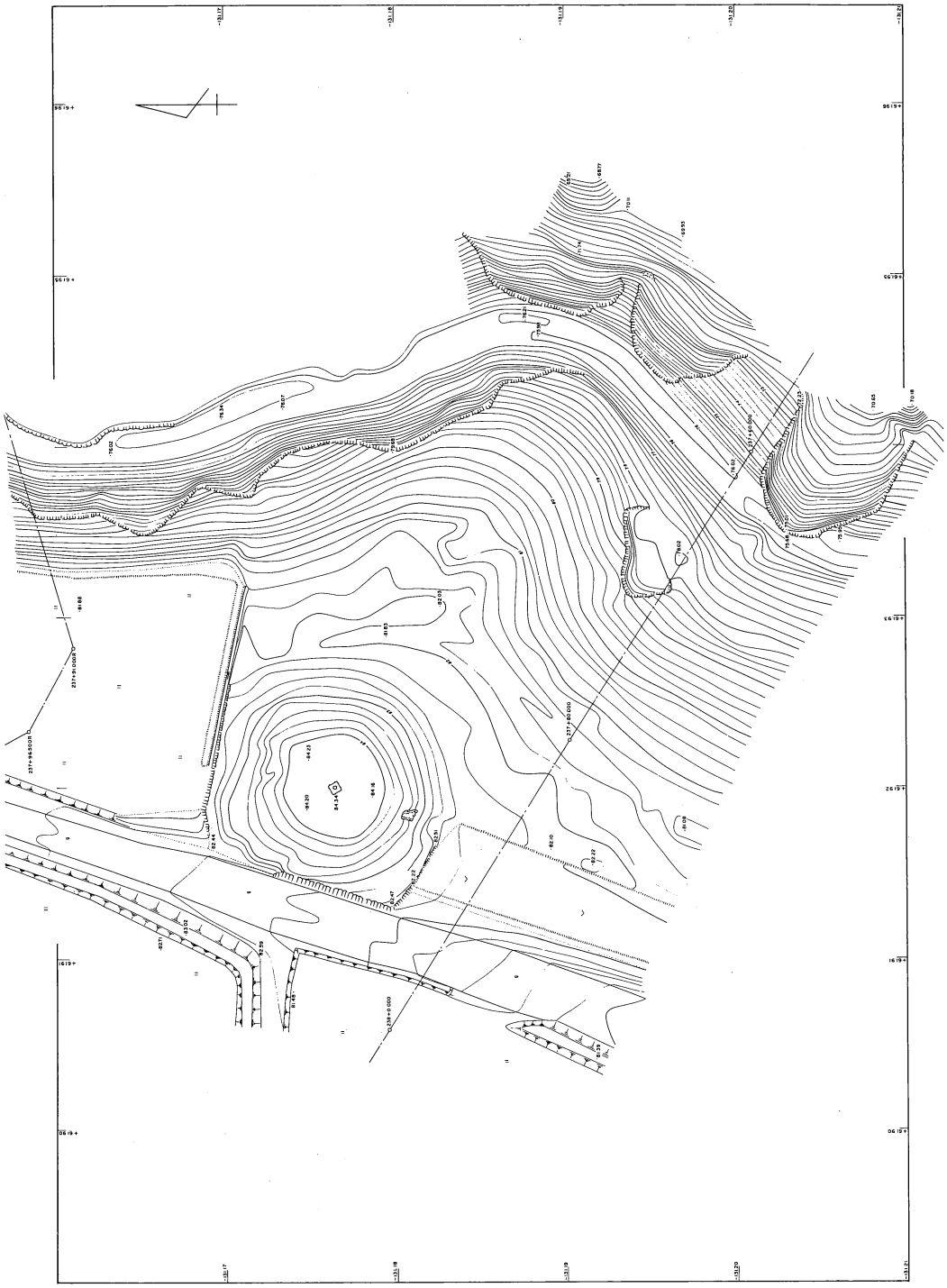
３号墳は墳丘を墓地として利用しているために大規模な破壊を免れているが、中央部は溝状の削平を受けている。この削平部の断面から須恵器が出土している。器種は坏身が３点と坏蓋が３点である。坏身の立ち上がりの端部は、まるくおさめる形態をとる。陶邑編年でいえばTK10の特徴にもっとも近い。これらの遺物も八雲神社に保管されている。遺物の出土状況から推測すると埋葬主体部は木棺直葬の形態をとるものと思われる。

７号墳は大池古墳群のなかでは最も北側に位置しており、１～６号墳とはやや離れて存在している。墳頂部に天明８年銘の供養塔が設置されていることもあり、保存状態は他のものと比べると良好である。ただし、北側は水田に、西側は農道に南側の一部は畑によって削平を受けており、円墳としての形状は損なわれている。

このたび、山陽自動車道を建設するにあたって、この大池７号墳が路線内に含まれることが判明した。協議の結果、工法変更等による現状保存の処置をとることが不可能であると判断され、発掘調査を行い記録保存とした。

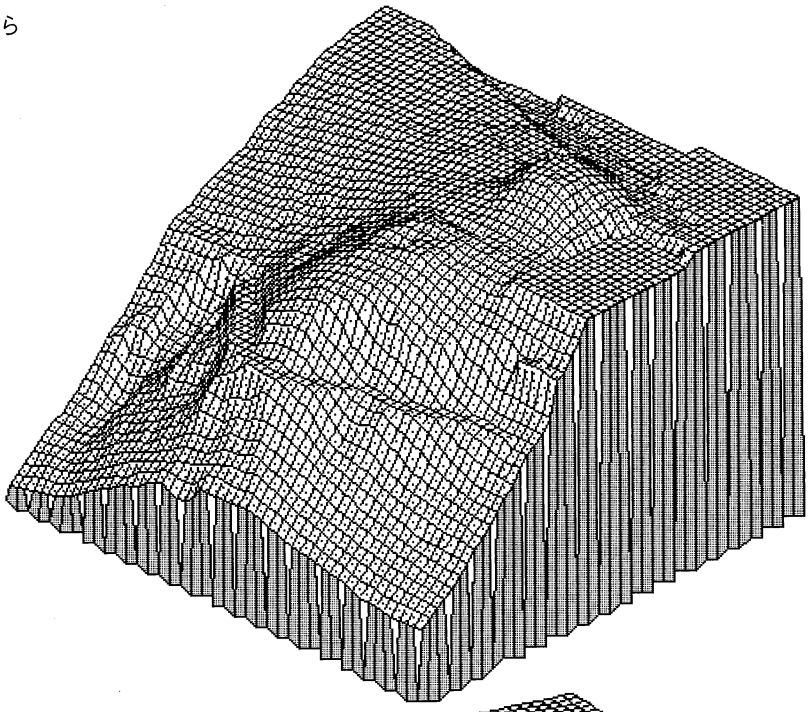


第７図　大池古墳群位置図

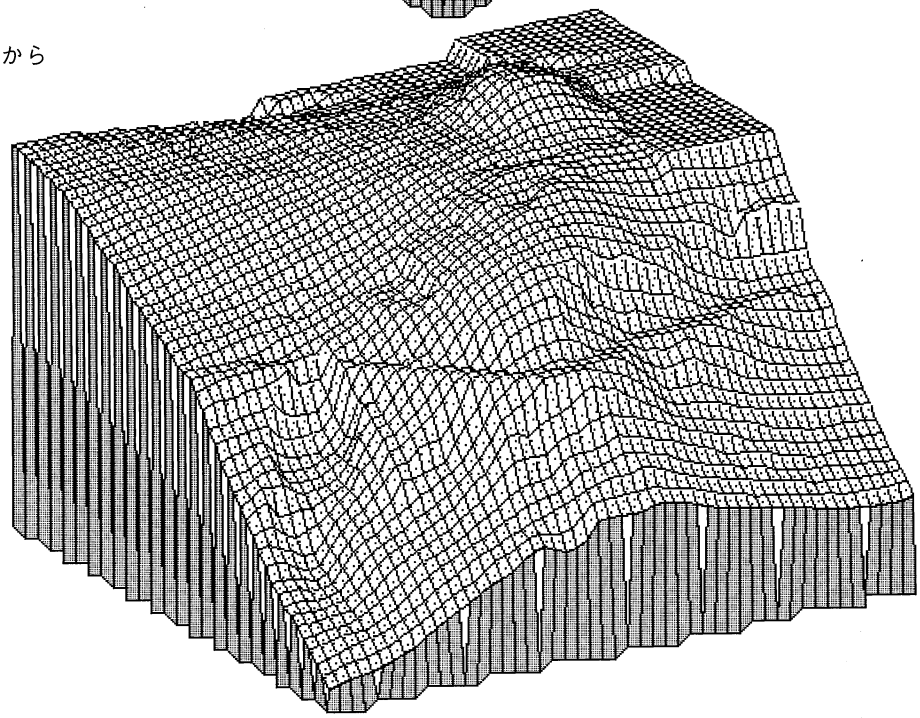


第８図　大池７号墳周辺の等高線図

北東から



南東から



第９図　大池７号墳周辺のブロックダイヤグラム

第２節　調査の概要

平成２年度に実施された確認調査で墳丘の北側より須恵器が出土し、主体部は木棺直葬の形態をとる古墳であることが想定された。

この結果を受けて、平成３年６月より全面調査に着手した。

調査は、掘削範囲より広範囲に周囲の立木の伐木を行い現状の地形測量を行った。墳丘の北・西・南側が削平されていたが、直径16ｍの円墳であることが判明した。この墳丘測量では、周溝の存在は確認できなかった。その後、掘削範囲を設定し、遺構確認の際に障害となる表土の除去を行った。墳頂部は約20㎡程度の平坦面が認められた。これは供養塔を設置する際に墳頂部を整地したためのものと考えられる。

確認調査で須恵器が出土した地点は、墳頂部平坦面の北側である。遺物の出土したレベルは表土下約20㎝と比較的浅いことから、かなり上面での主体部の確認が期待された。表土除去後は数センチずつ面精査を繰り返し、慎重に遺構確認調査を実施した。

調査の結果、上層面で３基、下層面で３基の合計６基の埋葬主体部（以下主体部と記述する）を検出した。主体部はいずれも木棺直葬の形態をとるものである。

上層面では表土下約10㎝の高さで３基の主体部を検出することができた。主体部は北に片寄って１基、南に片寄って２基検出した。この両者の間、墳丘中央部には約３ｍの幅で空白地帯が存在している。慎重に調査したが、主体部を確認することはできなかった。

検出した主体部のうち、北側のものを第６主体部、南側のものを第４主体部・第５主体部と命名した。第４と第５主体部は切り合っており、第４主体部が切っている。

第４主体部では、土器と鉄器が出土している。

棺内からは鉄器が出土している。刀子が１点と円錐形の鉄器１点である。墓壙内の東木口部分では土器が一括して出土している。すべて須恵器で、内訳は坏身が４点、坏蓋が４点、小型壺が１点、無蓋高坏が１点の合計10点である。

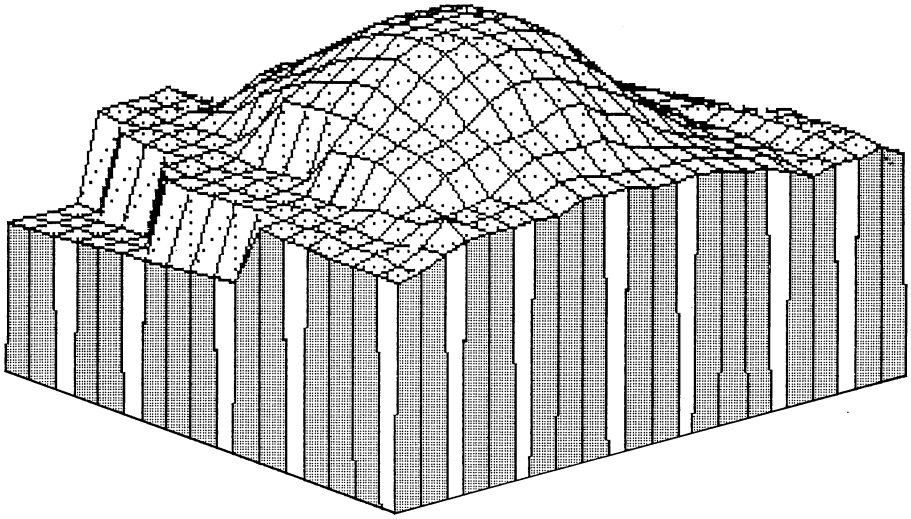
第５主体部では鉄器が出土している。

この主体部は第４主体部に切られているため、半分強が削平されている。このため、遺物の出土は少ない。棺内から鉄鏃が２点出土している。墓壙内では遺物は出土していない。

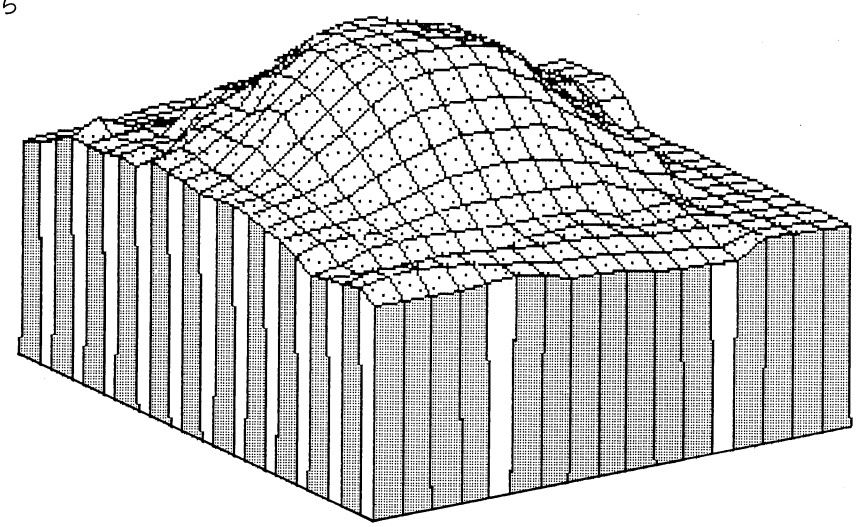
第６主体部では、土器と鉄器が出土している。

棺内からは鉄器が出土している。内訳は鉄刀が１点、刀子が１点、鑿状鉄器が１点、鉄斧が１点、環状鉄器が２点、鉄鏃が５点の合計11点である。墓壙内の東木口部分では土器が一括して出土している。確認調査で出土したものとほぼ同位置である。したがって、確認調査から出土した土器はこの第６主体部に帰属するものであると判断できる。土器はすべて須恵器で、内訳は確認調査のものも含めると坏身が６点、坏蓋が８点、短頸壺が１点、提瓶が１点の合計16

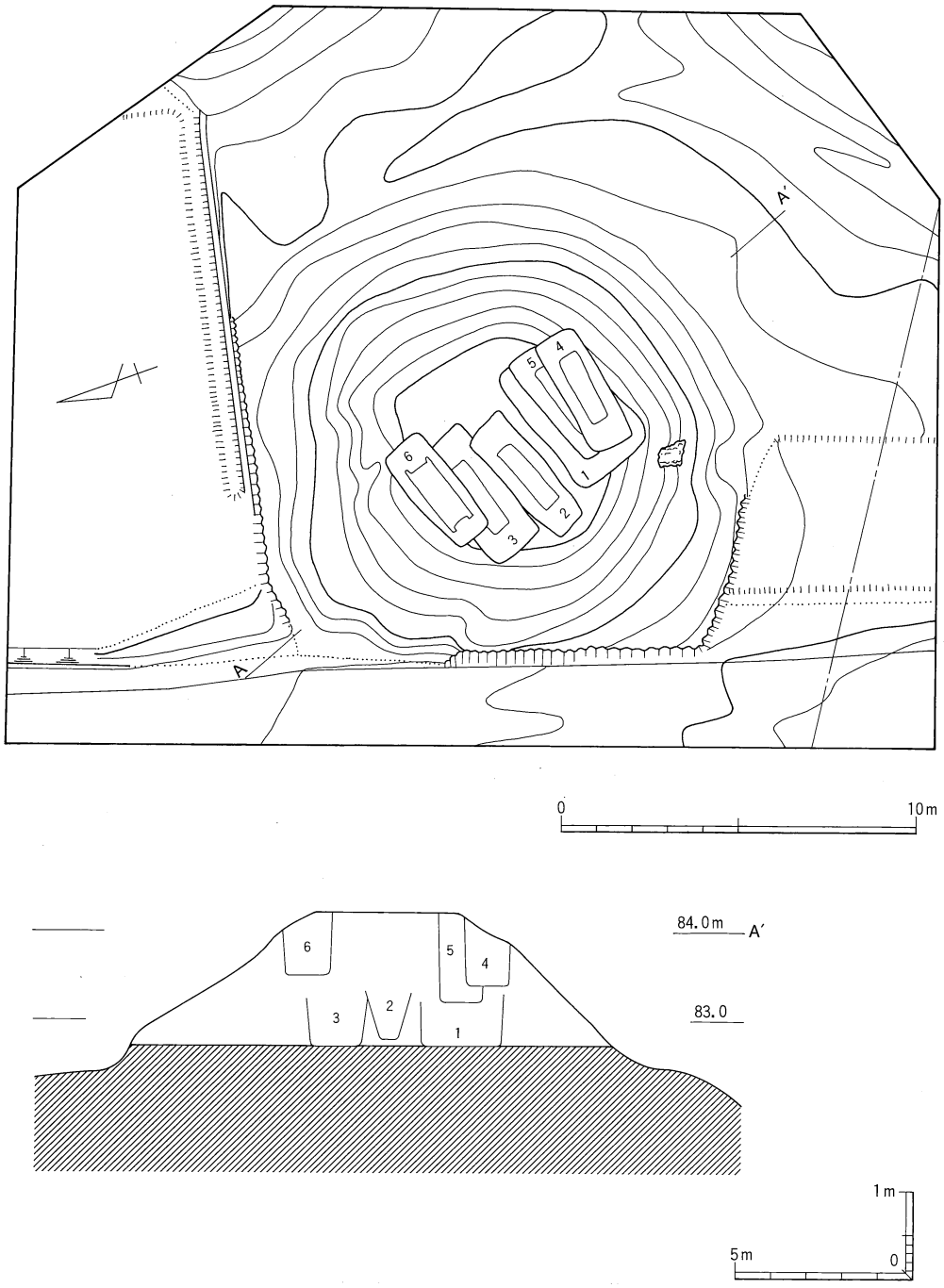
北東から



南東から



第10図　墳丘のブロックダイヤグラム



第11図　検出主体部位置図

点である。

上層面で３基の主体部の調査を終えたあと、慎重に遺構の確認を行ったところ、表土下約80㎝の高さでさらに３基の主体部を検出することができた。

検出した主体部のうち、南側のものを第１主体部、中央部のものを第２主体部、北側のものを第３主体部と命名した。

第１主体部では、土器と鉄器と玉類が出土している。

棺内からは鉄器と玉類が出土している。鉄器の内訳は鉄小刀が１点、刀子が２点、鉄鏃が12点の合計15点である。玉類は碧玉製の管玉が２点、水晶の切子玉が12点、ガラス製小玉が15点、ガラス製粟玉が19点の合計48点である。墓壙内の東木口部分と西木口部分で土器が出土している。土器は須恵器と土師器で、内訳は坏身が10点、坏蓋が９点、短頸壺が１点、有蓋壺が１点、壺の蓋が１点、土師器の坏が１点の合計23点である。

第２主体部では、土器と鉄器と玉類が出土している。

棺内からは鉄器と玉類が出土している。鉄器の内訳は、刀子が２点、鉄鏃が１点である。玉類はメノウ製の勾玉が１点、ガラス製小玉が62点、ガラス製粟玉が63点の合計126点である。墓壙内の東木口部分で土器が出土している。土器は須恵器と土師器で、内訳は坏身が４点、坏蓋が４点、土師器の坏が１点の合計９点である。

第３主体部では、土器と金属器と玉類が出土している。

棺内からは鉄器と銅製品と玉類が出土している。鉄器の内訳は、鉄刀が１点、刀子が２点、鉄鏃が４点、鑿状鉄製品が１点の合計８点である。銅製品は環状の製品が１点出土している。玉類は碧玉製の管玉が11点、ガラス製管玉が１点、ガラス製小玉が６点、ガラス粟玉が８点の合計26点である。墓壙内の東側板部分と東木口部分で土器が出土している。土器はすべて須恵器で、内訳は坏身が５点、坏蓋が５点、壺が１点の合計10点である。この他、墓壙内より管玉が１点出土している。

ヘリコプターによる空中写真撮影は、すべての主体部を検出した７月20日に実施した。

以上の主体部の調査を終えてから、墳丘を断ち割り、墳丘盛土の堆積状況を記録して調査は終了した。

なお、７月７日に地元久留美地区の方々を対象とした現地説明会を実施した。

第３節　墳丘

墳丘高

大池７号墳は段丘上に構築されている。古墳周辺の地形測量図からみたところ、古墳の墳頂高は約2.2ｍを測る。墳丘断ち割りの結果、旧地表面上の盛土部分の厚さを計測したところ、中央部で約1.6ｍであることが判明した。古墳の東側は段丘崖となっており、古墳が構築されている位置はそれに向かって序々に低くなる緩斜面である。同古墳は東側から見たときに、実際の盛土の高さ以上に実感できる。

周溝および墳形

周溝については、古墳の北側、西側はそれぞれ水田、農道によって削平されており当初から検出は困難であると予想していた。削平の影響の少ない南側と削平を受けていないと思われる東側について、痕跡を調査した。その結果、土壌化した表土は約20㎝の厚さで堆積しており、その直下は地山が検出された。地山を精査したが周溝の存在を確認することはできなかった。地形測量図では、古墳の東側で標高80ｍのラインで周溝状の窪みが認められるが、これは山道の窪みを表しているものと判明した。大池古墳群の他の古墳も周溝を持たなかったようで、以前三木市教育委員会で消滅した５号墳の周溝の確認調査が行われたが、ここでも検出されていない。現存する１号墳・３号墳にも周溝の存在を予想させる積極的な要因は認められない。

墳形は先に述べたように、墳裾部が半分以上削平されているが、残存している部分が比較的整った弧状を呈していることから円墳であると考える。

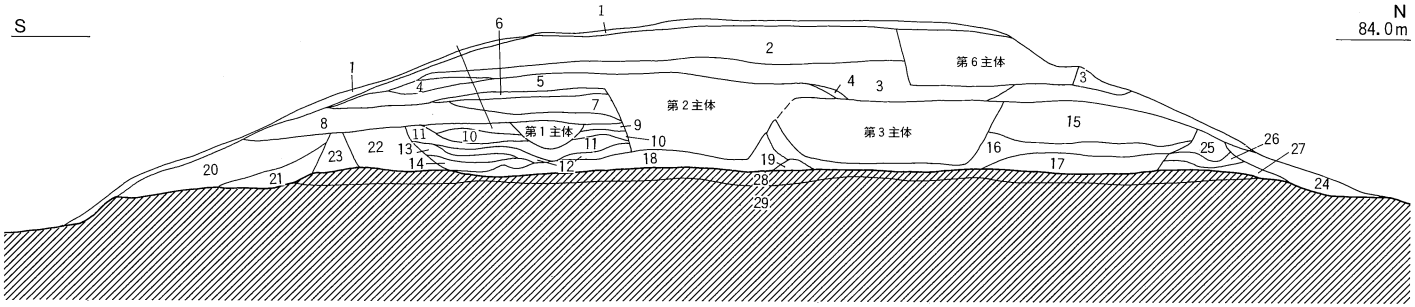
盛土

墳丘盛土はその中央部で、約1.6ｍの厚さが認められている。墳頂部に江戸時代の供養塔が設置されている。その際に墳頂部は整地されているようで、やや広い平坦面が認められた。本来の高さはこの時点で失われているものと思われる。

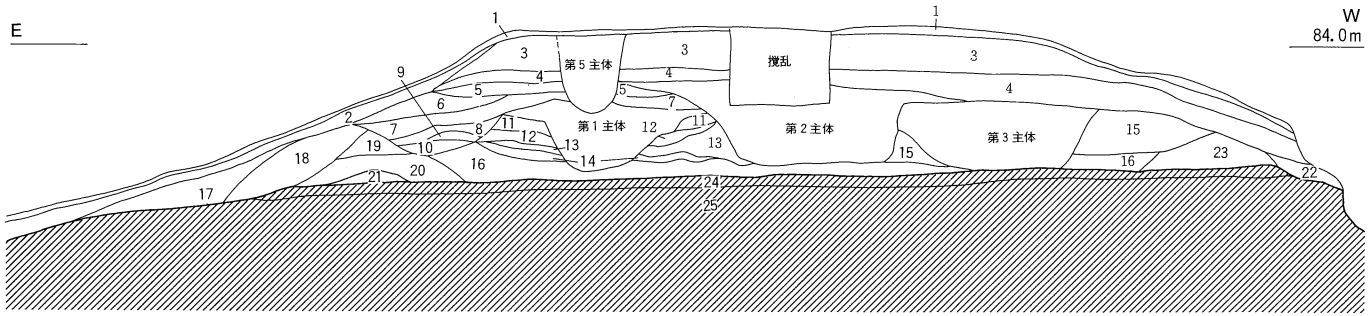
全面調査の結果では、主体部は上下２面で検出している。墳丘を断ち割った結果、下層で検出した主体部（第１～３主体部）の上に40㎝以上の土を新たに盛って上層の主体部（第４～６主体部）を構築していることが判明した。

下層部分の各土層は比較的薄く積み上げられている。最下層に古墳の基盤層としての地山と旧地表面の土壌化した土層が確認できた。この旧地表面がほぼ全面にわたって認められることから古墳を構築する際に地形の改変は行われなかったと考えられる。極細砂からシルト質極細砂を主体としたもので、よくしまっているものが多い。色調は大きく黄灰色系と褐色～暗褐色系に分けられる。これらは基盤層から由来するものと思われる。

これに対して、上層の主体部を構築する際に積み足した部分は１層のみである。灰黄色の極細砂で下層の部分に較べるとしまりがない。



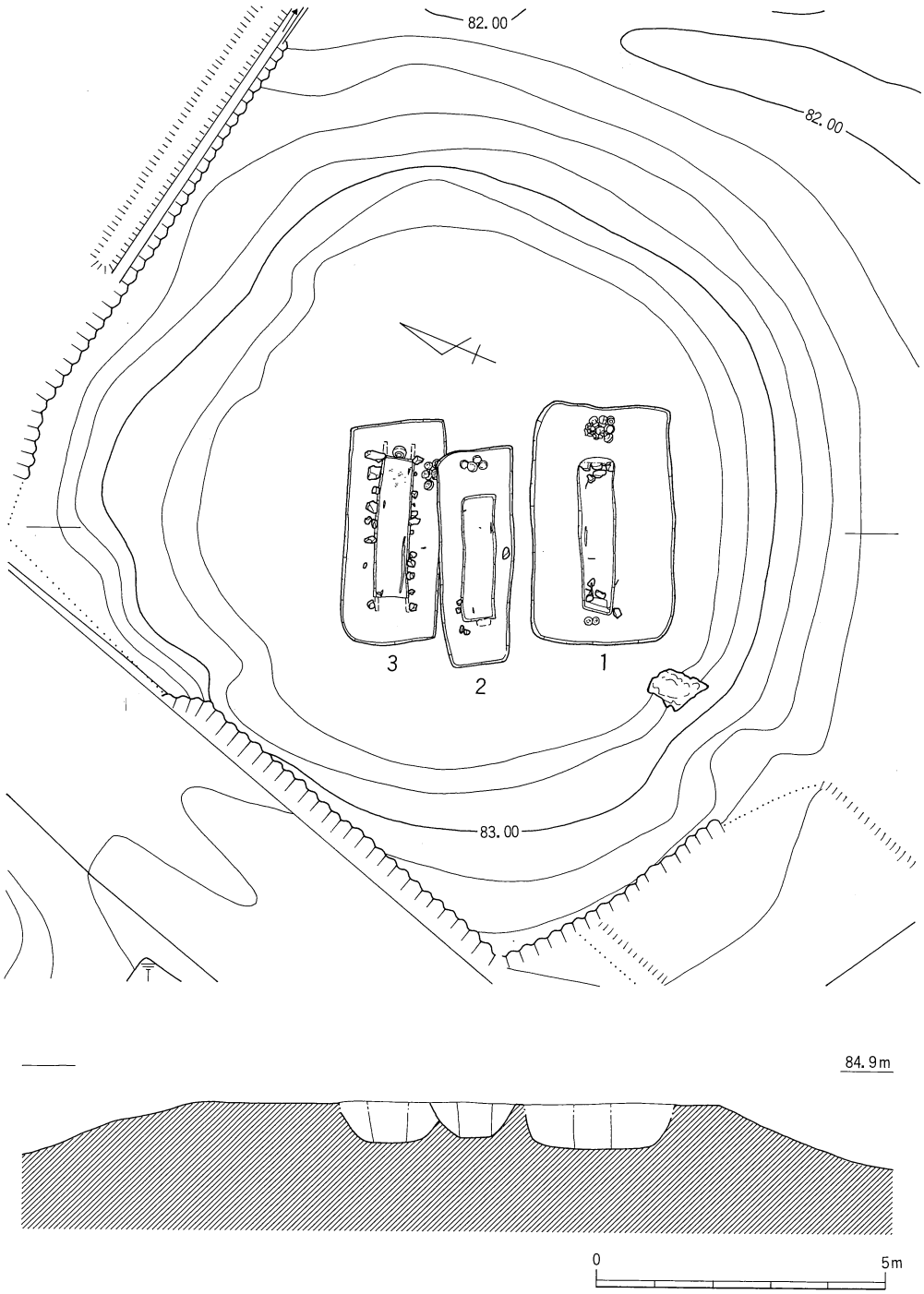
1．黒褐色　極細砂
2．淡灰黄色　極細砂
3．灰黄色　極細砂
4．褐色　礫混じり細砂
5．黄燈色　小礫混じりシルト質極細砂
6．淡灰白色　極細砂
7．黄燈色　シルト質極細砂
8．褐色～灰黄色　極細砂しまりなし
9．淡褐色　極細砂
10．灰黄色　細砂
11．褐色　細砂～極細砂
12．黄灰色　シルト質極細砂
13．淡褐色　極細砂
14．灰黄色　細砂～極細砂
15．黄灰色　中礫混じりシルト質極細砂　非常に固くしまる
16．明黄灰色　シルト質極細砂
17．黄灰色　極細砂
18．黄燈色　細砂
19．淡褐色　シルト質極細砂
20．灰褐色　細砂　しまりなし
21．暗褐色　細砂　しまりなし
22．暗褐色　極細砂　固くしまる
23．灰褐色　細砂　固くしまる
24．褐色　細砂～極細砂
25．淡褐色　極細砂
26．暗褐色　極細砂
27．褐色　極細砂
28．暗褐色　シルト質細砂　Soil　（旧表土）
29．褐色　シルト質細砂　（地山）



1．黒褐色　極細砂
2．黄灰色　極細砂
3．淡灰黄色　極細砂
4．灰黄色　極細砂
5．淡褐黄色　極細砂
6．黄灰色　極細砂
7．褐色　礫混じり極細砂
8．明褐色　極細砂
9．褐色　極細砂
10．黄灰色　シルト質極細砂
（8～10：固くしまる）
11．黄灰色　シルト質極細砂
12．灰色　シルト質極細砂
13．明褐色　極細砂
14．灰黄色　シルト質極細砂
（11～14：固くしまる）
15．黄灰色　シルト質極細砂
16．黄燈色　極細砂　固くしまる
17．明褐色　極細砂　礫多く含む　しまりなし
18．褐色　極細砂　しまりなし
19．黄燈色　シルト質極細砂　礫多い
20．黄褐色　極細砂　固くしまる
21．褐色　シルト質極細砂　固くしまる
22．淡灰色　細砂　しまりなし
23．暗褐色　極細砂
24．暗褐色　シルト質細砂　Soil　（旧表土）
25．褐色　シルト質細砂　（地山）

0　4m

第12図　墳丘断面図



第13図　下層検出の主体部

第４節　下層検出の主体部

１．第１主体部の調査

位置

第１主体部は第４～６主体部を調査したのちに、その下層で検出した遺構である。当初、大池７号墳は、上層で検出した３つの主体部（第４～６）のみで構成された古墳であると考えていた。ところが、第５主体部の断ち割り調査を行っている際に須恵器の坏が検出されたことを契機に、下層に新たな主体部が存在していることが想定された。

調査した結果、標高83.2ｍ付近で第１主体部を検出した。位置は墳丘南部に所在し、第２主体部から約30㎝南に離れている。

形状と規模

第１主体部は当古墳で検出した主体部のなかで最も大きな規模をもつものである。主体部は木棺直葬の形態をとる。主体部はN68°Ｅに主軸の方向をとっている。

墓壙は隅円の長方形を呈する。規模は長軸方向に410㎝、短軸方向に245㎝を測る。検出面から墓壙底までの深さは55㎝である。墓壙底は基盤層にまで達している。

木棺はそれ自体は残存していなかったが、埋土の状況からその痕跡をみることができた。これによると、木棺は墓壙のほぼ中央部に設置してあり、主軸は墓壙と同じ方向をとる。規模は長軸方向に255㎝、短軸方向に70㎝を測る。

棺内の両木口と側板の一部に赤色顔料の付着がみられた。木棺に塗られていたものと考えられる。さらに東側木口部分に、河原石が据え置かれている。平坦面を上に向けて、ほぼ水平を保っていることから、この石は枕として利用されていたものであろう。

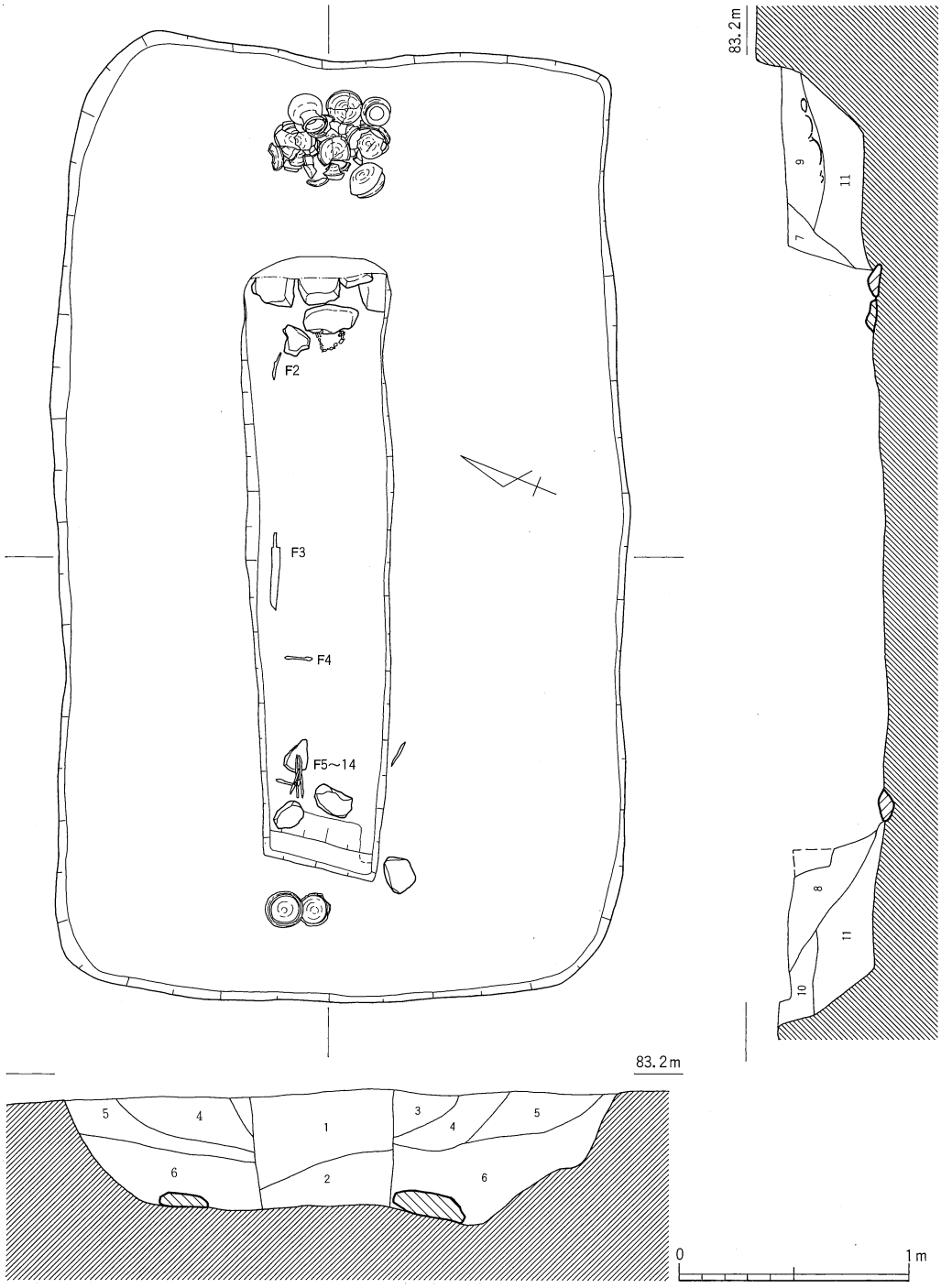
埋土

墓壙内に堆積している土層は９層である。横断面で４層、縦断面で５層が認められたが、両者の土層としてのつながりは明らかではない。

横断面で認められた土層の特徴を記載する。３は灰黄色の小礫～巨礫混じり極細砂、４は灰黄色の細砂～極細砂、５は淡褐色の細砂～極細砂でマンガンが混じる。６は最下層に堆積しているもので、黄褐色の細砂～極細砂である。墓壙底には巨礫が、木棺の側板に沿って数個並べて据えられているのが確認されたが、これは側板を固定するためのものであろう。

縦断面での５層は以下のとおりである。７は淡褐色の細砂～極細砂、礫混じりでしまりなし、８は淡褐色のシルト質極細砂、９は黄灰色の細砂～極細砂、10は灰黄色の細砂～極細砂、11は灰黄色の細砂～極細砂でしまりなし。この８層の上面と９層中から土器が出土している。

棺内の土層の堆積は２層が認められた。上層の１は黄褐色の小礫混じり極細砂、下層の２は淡褐色の極細砂でマンガンが混じっている。どちらもしまりは悪い。



第14図　第１主体部実測図

第１主体部を調査する際に、墓壙のラインを検出することが非常に困難であった。先に確認することができたのは木棺内に堆積していた１と２である。これは墓壙が掘削されたのち、埋め戻されるまでにが非常に短時間であったこと、埋土にその掘削した墳丘の土を使用していること、ある程度の締め固めを行っていたことなどが考えられる。反対に木棺の痕跡の確認が比較的容易であったことについては、人為的に埋められたものでないため、堆積している土層にまったくしまりが認められなかったことに由来するところが大きい。

遺物出土状況

遺物は木棺外と、木棺内から出土している。出土した遺物は、土器と鉄器と玉類である。

木棺外からは土器が出土している。（１～23）遺物は両木口の外側の２箇所からまとまって出土している。

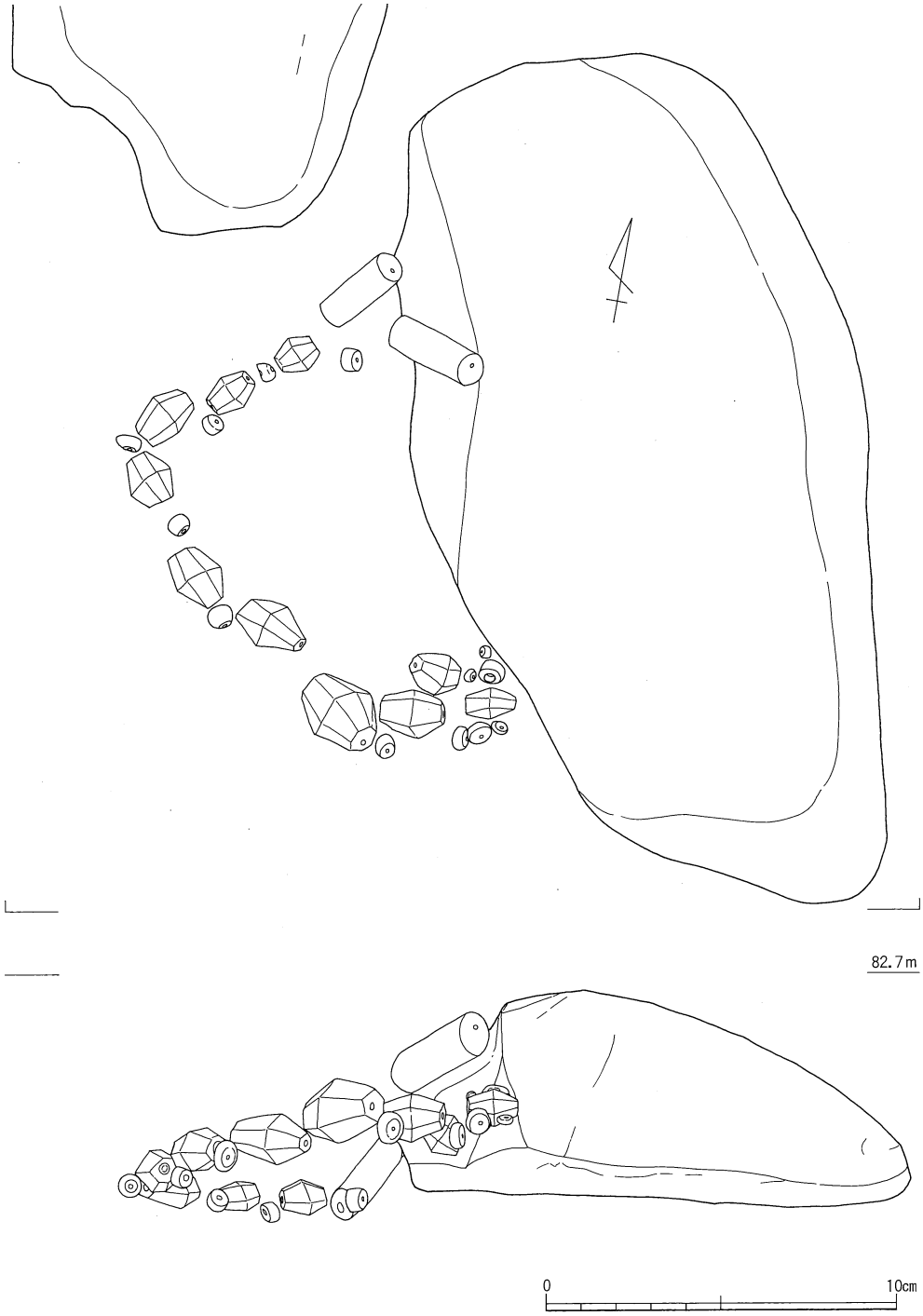
西側木口付近で検出したものは須恵器の坏身が２点と坏蓋が１点である。（１～３）このうち坏身の２点は口縁部を上に向けた正位の状態で出土したが、３はやや斜めに置かれ、その上に２が一部を重ねている。２にはさらに１の坏蓋が重ねられていたが、蓋をした状態ではなく、天井部を下に向けている。蓋としてではなく、身としての利用が想定できる。

東側木口付近で検出したものは須恵器の蓋坏が６セット、坏身が２点、坏蓋が２点、有蓋壺が１セット、壺が１点、土師器の坏が１点の合計20点である。（４～23）出土状況は、土圧のため蓋坏のセットのものが特に損傷を受けていたが、当初は整然と並べられていたようである。最も東側の第１列は10・11をセットとする蓋坏の両側に有蓋壺（20・21）と壺（22）を配置している。次の第２列には蓋坏が３セット並べられている。北側のものから順に８・９のセット、12・13のセット、６・７のセットである。第３列には蓋坏が２セット並べられていたようである。南側の４・５のセットは天地を逆にして置かれている。もう１セットは破損が激しく出土の状況は良くないが、14・15が置かれていたようである。第１列と第２列の間には土師器の坏が置かれていた。これらの土器のほかに、東側からは坏蓋２点（16・18）と坏身２点（17・19）が出土している。本来これらは蓋坏としてセット関係にあった可能性が予想されるが、出土状況からは明らかではない。

木棺内からは鉄器（Ｆ１～14）と玉類（Ｊ１～48）が出土している。

鉄器は、大きくは棺内の東側（頭部付近）、中央部、西側（足部付近）より出土している。頭部付近では、左側（北側）でＦ２の刀子が切先を足側に刃部を北側板に向けて出土した。中央部からはＦ３の小刀とＦ４の鉄鏃が出土した。Ｆ３は北側板に沿って切先を足側に刃部を北側板に向けて出土した。Ｆ４は刺突部を南側に向けて出土している。足部付近からは残りの鉄鏃（Ｆ５～14）が出土しているが、Ｆ５のみが刺突部を南側に向けて出土している以外はすべて刺突部を西側に向けている。

玉類は棺内の東側より出土した。長さ24㎝、幅13㎝の自然石を利用した石枕から床面にかけ



第15図　第１主体部玉類出土状況

て装着状態で出土した。この玉類の出土により、遺体は頭を東側に向けていたことが確認された。玉の種類は、碧玉製の管玉が２点、水晶製の切子玉が12点、ガラス製の小玉が15点、ガラス製の粟玉が19点である。管玉、切子玉の間にはガラス製の小玉あるいは粟玉を配している。小玉と粟玉の名称の違いはその大きさで分類した。

遺物

須恵器

第１主体部から出土した土器は、１点を除いて全て須恵器である。この須恵器のなかでも、器種構成は坏身と坏蓋が主を成している。

蓋坏

坏身は10点出土している。いずれのものも、口縁部の立ち上がりは内傾して、口縁端部は丸くおさめて面をなさない。底部は４が比較的丸味をもった器形をとるが、他のものは平坦な面をもっている。底部のヘラ削りは、底部の器高の½～⅓以下に施されている。ロクロの回転方向は２を除いて右回りである。

坏蓋は９点出土している。器形としては１・16・18が天井部が丸く、他のものは比較的偏平である。天井部と体部を分ける稜線は全体としてにぶいが、両者を分ける意識は残っている。１は稜線は失われ、かわって弱い凹線が１条みられるのみである。ただし、口縁端部内面には内傾する面が残っている。天井部に施されているヘラ削りは、坏身と同様にその範囲は天井部高の½以下である。

壺

20と21は一対になる有蓋壺である。蓋の20は口縁部径が9.1㎝と小ぶりであ。体部から天井部にかけて丸みを帯びて、その境は明瞭ではない。口縁端部の内面には内傾する面がみられ、天井部には狭い範囲に回転ヘラ削りが施されている。ロクロの回転方向は蓋坏の一般的な方向とは逆で左回転である。21は底部に右→左方向に板状の工具による削りが施されている。外面は全体に回転ナデで仕上げている。内面の頸部と体部の境には回転ナデの後、指おさえがみられる。

22の壺は口縁部を玉縁状におさめ、底部には回転ヘラ削りを施している。ロクロの回転方向は左回転である。外面の調整は、頸部から体部上半にかけてカキ目がみられ、体部下半はその後、ナデで消している。内面は全体にナデで仕上げている。

土師器

坏

23は坏としているが、体部が深く、内湾している。調整は磨滅のため観察は困難であが、内面にごく一部ハケ目を残している。

以上の土器の観察を通して、その時期を考えるならば、陶邑編年のMT15～TK10の時期に

あたると考えているが、その形態的特徴は坏身がTK10のものに近い一方、坏蓋は天井部と体部の境には依然として稜線をもつなどMT15に近いものが多い。

鉄器

刀子

Ｆ１とＦ２は刀子である。Ｆ１は両関造りのものであるが、切先部を大きく欠損している。刀身部と茎部には木質が遺存している。鞘と柄が装着されていたことが認められる。残存長は6.8cmで茎部長は3.8cmである。

Ｆ２は両関造りのものである。茎部には木質が遺存しているが、刀身部にはみられない。長さは、11.2cmで茎部長は4.3cmである。

短刀

Ｆ３は遺体の右側に置かれていた短刀である。切先の一部を欠失しているが、他の部分はほぼ完存しており、全長は32.8cmである。両関造りのもので、直角に切り込んでいる。茎部の茎尻の部分は、刃側に反っているが、これは土圧の影響かと思われる。茎部の上部、関付近に一部木質が遺存している。柄の一部であると思われる。木質は片面のみの遺存で、棺床に接していた側である。茎部の長さは6.7cmである。刀身部は平造りで棟は直線的であるが関部にいくにしたがって幅広になっている。刃側も同じ様相を示す。

鉄鏃

出土した鉄器のうち残りの12点は鉄鏃である。Ｆ４を除いてすべて棺内西側で一括して出土している。形態としては、すべて長頸鏃に属するものである。鏃身部は長三角形を呈する細身の鉄鏃である。

Ｆ４は鏃身部長1.8cm、頸部長7.6cm、茎部残存長4.7cmを測る。鏃身部には、表裏両面ともに木質が遺存している。特筆すべきは、茎部が明らかに人為的に曲げられて環状を呈していることである。この形状からすると矢柄の装着は叶わず、結果として矢としての副葬の意味を示すものとは考え難い。

Ｆ５は鏃身部長1.8cm、頸部長7.5cm、茎部残存長4.7cmを測り、Ｆ４のものとほぼ同じ数値を示す。鏃身部には、同様に表裏両面に木質が遺存している。さらに、茎部もＦ４と同じく環状を呈している。Ｆ４とＦ５は残りの鉄鏃とは出土状況において、直交した方向で検出されており、この意味でも違った意図をもって副葬されていたことは明らかである。

Ｆ６は鏃身部長2.4cm、頸部長7.6cm、茎部残存長1.0cmを測る。茎部は大半が欠失しているが、残存部に木質が遺存しており矢柄の装着が認められる。

Ｆ７は鏃身部長2.4cm、頸部長7.5cm、茎部残存長1.4cmを測る。茎部には木質が遺存している。Ｆ６と形態的に近似している。

Ｆ８は鏃身部長2.0cm、頸部長7.8cm、茎部残存長4.0cmを測り、茎部が比較的良く残っている。

茎部には木質が遺存しており、関付近では一部矢柄の表面部分も観察される。

Ｆ９は鏃身部長2.3㎝、頸部長7.6㎝、茎部残存長2.0㎝を測る。茎部には木質が遺存しており、関付近では一部矢柄の表面部分も観察される。鏃身部の一面には木質が遺存しているが、これは棺床が付着しているものと考えている。このＦ９とＦ６とＦ７は他のものと比べて鏃身部が長い。

Ｆ10は鏃身部長1.9㎝、頸部長7.8㎝、茎部残存長2.1㎝を測る。茎部には矢柄の表面部分が遺存している。矢柄に巻いて固定していた繊維が横方向に付着しているのが観察できる。

Ｆ11は鏃身部長2.0㎝、頸部長7.6㎝、茎部残存長2.4㎝を測る。茎部には木質と一緒に一部矢柄の表面部分が遺存している。矢柄に巻いて固定していた繊維が横方向に付着しているのが観察できる。

Ｆ12は鏃身部長2.1㎝、頸部長7.1㎝、茎部残存長1.0㎝を測る。茎部には木質が遺存している。頸部の一面には木質が付着している。棺床の付着であろう。

Ｆ13は鏃身部長1.8㎝、頸部長7.7㎝、茎部残存長1.8㎝を測る。茎部には木質が遺存しており、上部には矢柄の表面部分が遺存している。矢柄に巻いて固定していた繊維が横方向に付着しているのが観察できる。鏃身部から頸部にかけては木質が付着している。

Ｆ14は鏃身部長1.9㎝、頸部長7.2㎝、茎部残存長1.7㎝を測る。茎部には木質が遺存している。

鉄鏃のうち、鏃身部の断面の形状がカマボコ型の片丸造りのものであることが確認できたものはＦ４・Ｆ５・Ｆ11・Ｆ13である。その他のものは錆による形状の変化が激しく、確認はできていない。

玉類

管玉

管玉の２点はいわゆる碧玉製のものである。全長・直径ともに不揃いである。色調はともに暗緑色を呈しているが、Ｊ１のもののほうが色調としては深い。Ｊ２は縞状の模様が観察される。穿孔は一方向から穿っている。管玉の上下両面には整形時の擦痕がみとめられる。首飾りとして連結されていた時は両者の間におそらく小玉が配されていたようで、接触面にあたる部分が直径７㎜程度の範囲で平滑な面が認められる。

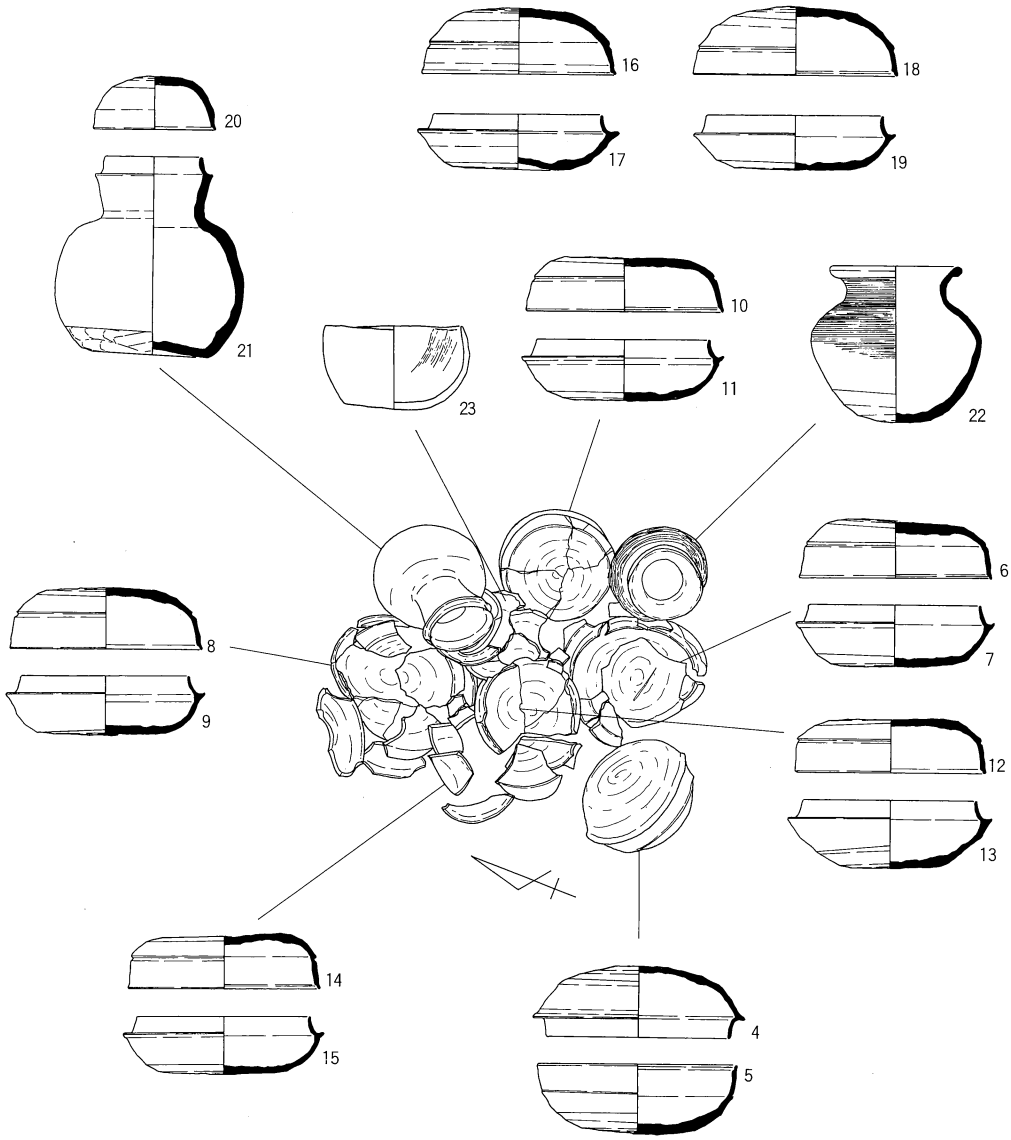
切子玉

12点が出土しているが、すべて水晶製である。大きさは不揃いで、最大のものはＪ９で全長2.34㎝で約9.9g、最小のものはＪ４で全長1.44㎝で約2.3gで重量比で約4.3倍の違いがある。断面形状は大半のものが六角形であるが、Ｊ10が七角形、Ｊ９は八角形である。穿孔は一方向からを基本としている。

小玉・粟玉

この両者は基本的には小玉として分類されているものであるが、ここでは直径で７㎜程度、

重量で0.25g程度を一応の基準として小玉と粟玉に分けている。素材はすべてガラス製である。その色調は基本的には青色系統のもので、大まかには、小玉は群青色などのやや明るめのものが多く、粟玉は濃藍色の濃いめの色調のものが多い。



第16図　第１主体部　東側土器出土状況

2．第2主体部の調査

位置

第1主体部から約30㎝北に離れて検出したものが第2主体部である。検出したレベルは第1主体部より約10㎝程度高い位置で、標高は83.3ｍである。

当主体部は、第1主体部とは切り合い関係は認められないが、第3主体部とは一部重複している。調査時に第2主体部が切っていることで検出したが、重複部分がごく一部であったため逆であった可能性も捨てきれない。

形状と規模

第2主体部はその南側で検出した第1主体部、北側で検出した第3主体部と比較しても小規模なものである。主体部は木棺直葬の形態をとる。主体部はN68°Eに主軸の方向をとっており、第1主体部と全く同じ方向を示す。

墓壙は隅円の長方形を呈する。規模は長軸方向に370㎝、短軸方向に中心部で130㎝を測るが、この幅を保っているのはここまでで、西側では狭まり100㎝の幅となる。検出面から墓壙底までの深さは54㎝である。墓壙底は第1・第3主体部とは違って基盤層にまでは達していない。

木棺はそれ自体は残存していなかったが、埋土の状況からその痕跡をみることができた。これによると、木棺は墓壙のほぼ中央部に設置してあり、主軸は墓壙と同じ方向をとる。規模は長軸方向に210㎝、短軸方向に57㎝を測る。

棺内の床面に赤色顔料の付着がみられた。木棺に塗られていたものと考えられる。

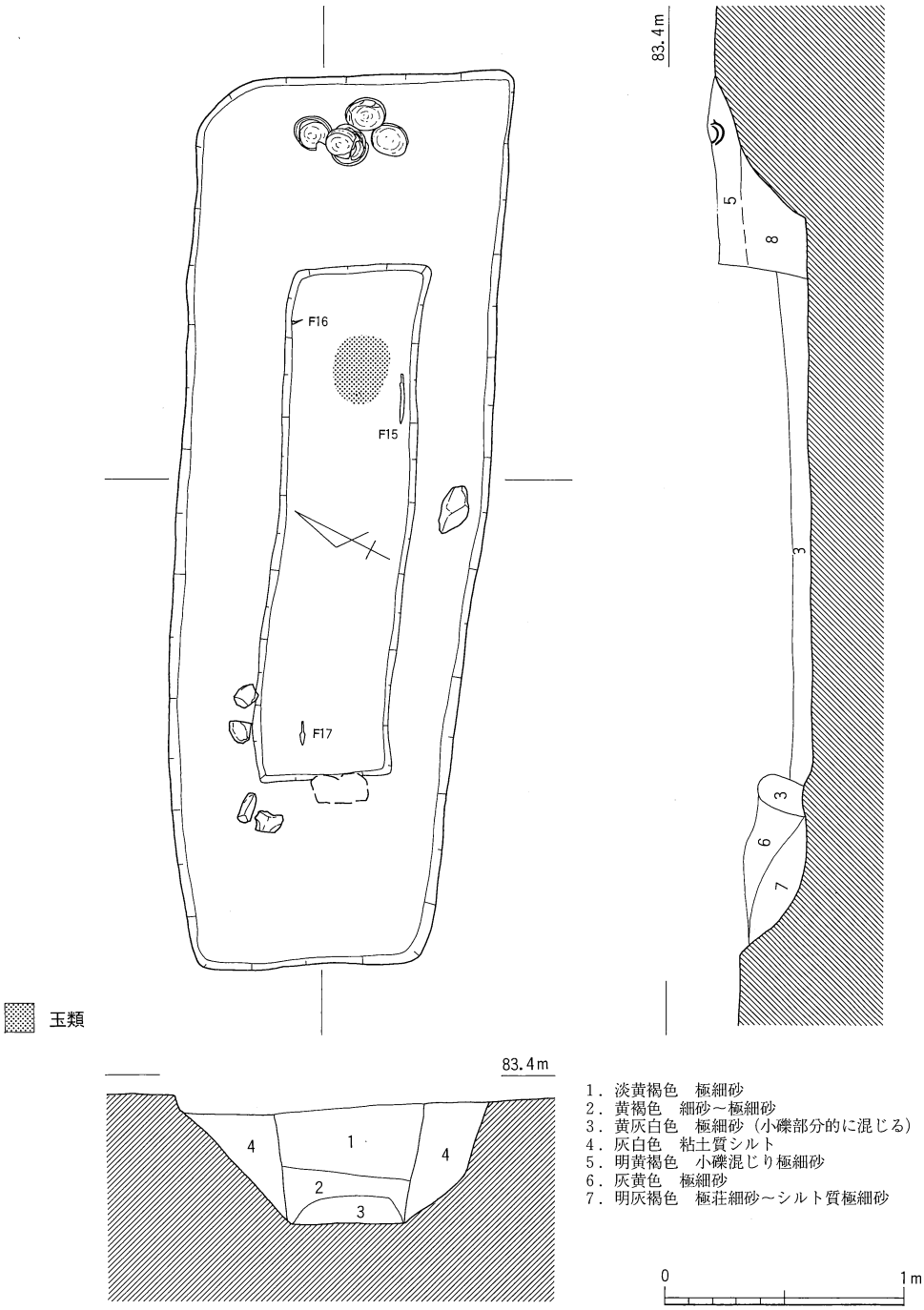
西側木口付近では粘土塊を検出した。これは、上層で検出した第4・第5主体部でみられた木口石を固定していた粘土塊と同じ目的を持ったものと考えられる。

床面直上で約12㎝程度、黄灰色の粘土が堆積していた。これを取り除いたところ、下から遺物の出土がみられたことから、この粘土は埋葬後に堆積したものであることが明らかである。おそらく、木棺の蓋になる板材の上を覆っていたものが、板材の腐食にともなって落下し、床に堆積したものであろう。

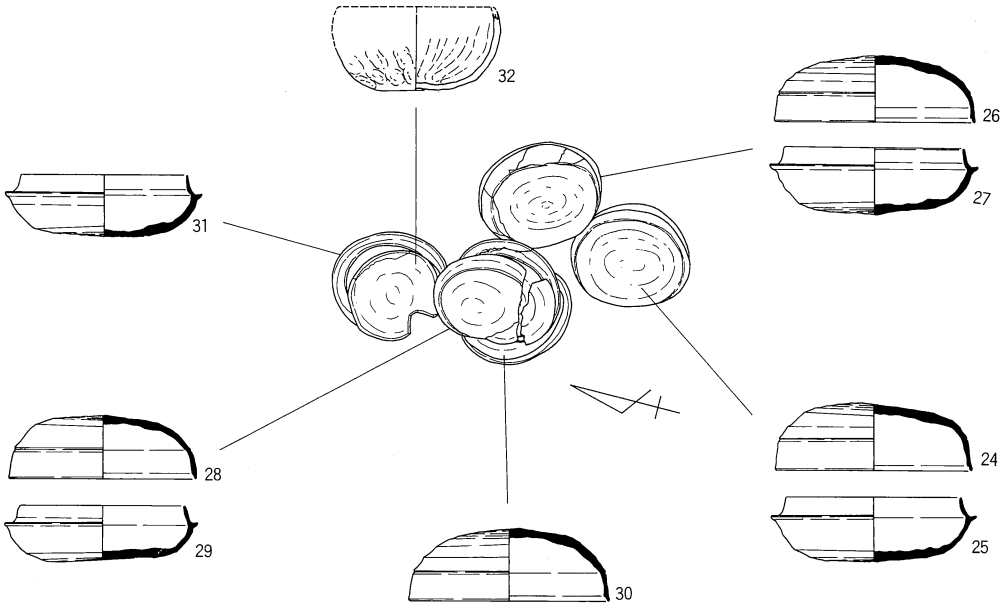
埋土

墓壙内に堆積している土層は8層である。横断面で4層、縦断面で5層が認められたが、両者の土層としてのつながりは3を除いては明らかではない。

横断面で認められた土層の特徴を記載する。1～3は木棺内の埋土である。1は灰黄色の細礫混じりの細砂～極細砂、2は淡褐色の極細砂、3は床上に堆積している黄灰色の粘土である。この3は非常に固くしまっている。4は墓壙内に堆積しているもので、灰黄色の3～5㎝程度の礫が混じる細砂～極細砂である。



第17図　第２主体部実測図



第18図　第２主体部　土器出土状況

縦断面での５層は以下のとおりである。５は灰黄色の細礫混じり細砂～極細砂、６は灰黄色の細砂～極細砂、７は褐黄色の中砂～粗砂混じり細砂～極細砂、８は黄灰色のしまりのない細砂～極細砂である。３は横断面でみられる３と同一層である。床面に堆積しているものと、西側木口の裏側に充填されているものは、同じ特徴をもったものである。このうち、５の上面で土器が出土している。

遺物出土状況

遺物は木棺外と、木棺内から出土している。出土した遺物は、土器と鉄器と玉類である。

木棺外からは土器が出土している。(24～32) 遺物は東側木口の外側墓壙内からまとまって出土している。

木口付近で検出した土器は須恵器の蓋坏が３セット、坏身が１点、坏蓋が１点、土師器の坏が１点である。出土状況は北側で坏身（31）が口縁を上に向けて置かれ、その上に（32）の土師器を重ねている。その南側では、坏蓋（30）が天井部を下にして、その上に28・29をセットとする蓋坏を重ねる。さらに、南側では24・25をセットとする蓋坏が配置されている。これらと接して東側では26・27をセットとする蓋坏を配置している。30の坏蓋は天井部をしたにしており、身として使用していると想定できる。

木棺内からは鉄器（Ｆ15～17）と玉類（Ｊ49～174）が出土している。

鉄器は、棺内の東側（頭部付近）で刀子（Ｆ16）頭部付近の南側で刀子（Ｆ15)、西側（足

部付近）で鉄鏃（Ｆ17）が出土している。

Ｆ16は切先を南側（内側）に向けて出土し、Ｆ15は切先を足側に刃部を遺体側に向けて出土している。Ｆ17は刺突部を西側に向けている。

玉類は棺内の東側より出土した。玉の種類は、メノウ製の勾玉が１点で、残りの125点のうち62点は小玉、63点が粟玉である。勾玉は東側木口より約55cm内側の位置で出土しており、このあたりが頸部と想定できる。ガラス玉はかなり散乱した状況で出土しており、装着状況は復元できる状態ではなかった。小玉と粟玉が同数に近いことから、勾玉を中心として、小玉と粟玉を交互に配していたものと考えている。

遺物

須恵器

第１主体部から出土した土器は、１点を除いて全て須恵器である。須恵器の器種構成は坏身と坏蓋のみである。

蓋坏

坏身は４点出土している。いずれのものも、口縁部の立ち上がりは内傾して、口縁端部は丸くおさめて面をなさない。底部は29が比較的平坦な面をもっているが他のものは尖りぎみである。底部のヘラ削りは、底部の器高の½～⅓以下に施されている。ロクロの回転方向は29以外は右回りである。

坏蓋は４点出土している。器形としては30は天井部が丸い。天井部と体部をわける稜線は全体としてにぶい。口縁端部内面には、いずれのものも内傾する面が残っている。天井部に施されているヘラ削りは、坏身と同様にその範囲は天井部高の½以下のものが多いが、30には比較的広い範囲に施されている。

土師器

32は坏であるが、やや深く、この意味ではこの名称は適切ではないかもしれない。口縁部は失われているが、端部に近いと思われる。内面にはユビナデ、外面の底部にユビナデ、体部下半にユビオサエの調整を加えている。

鉄器

刀子

Ｆ15とＦ16は刀子である。Ｆ15は両関造りのものであるが、刃部を一部欠損している。茎部には木質が遺存している。Ｆ16も両関造りのものである。切先部を欠損している。刀身部と茎部には木質が遺存しているが、このうち刀身部のものは棺底に接していた部分にのみ残っており、木棺の底板が付着したものと考えられる。長さについては、両者には大きな隔たりが認められる。Ｆ15は刀身部長13.6cmで、茎部長は5.7cmで、刀子としては比較的大型のものであるのに対し、Ｆ16は刀身部残6.9cmで、茎部長は4.0cmで小ぶりのものである。

鉄鏃

Ｆ17は遺体の足元の北側に置かれていた鉄鏃である。形態としては、短頸鏃に属するものである。鏃身部は逆刺をもつものである。一方の逆刺の先端部と茎部は欠損している。鏃身部長5.6㎝、頸部長2.6㎝、茎部残存長3.2㎝を測る。茎部には木質が遺存しており、矢柄の装着が認められる。

玉類

勾玉

勾玉は１点のみが出土している。メノウ製で、色調は半透明の淡い浅黄色を基本として、一部に乳白色と黄褐色の縞状模様がみられる。穿孔は一方向から行っている。

小玉・粟玉

小玉が62点、粟玉が63点が出土している。色調は小玉が群青色、濃藍色と比較的似通った色調を呈しているのに対して、粟玉は群青色を基本としながらも薄青緑色、青色などの明るめの色調を呈するものが含まれている。なかでも、黄色の２点のものが色調的に際立っている。

小玉で分類しているもののうち最大のものは直径9.4㎜、平均の直径は約7.7㎜である。粟玉で分類しているもののうち最大のものは直径5.6㎜、平均の直径は約4.3㎜である。

３．第３主体部の調査

位置

下層で検出した主体部のうちで、最も北側に位置しているのが第３主体部である。検出したレベルは第１主体部とほぼ同じ高さで、標高は83.2ｍである。

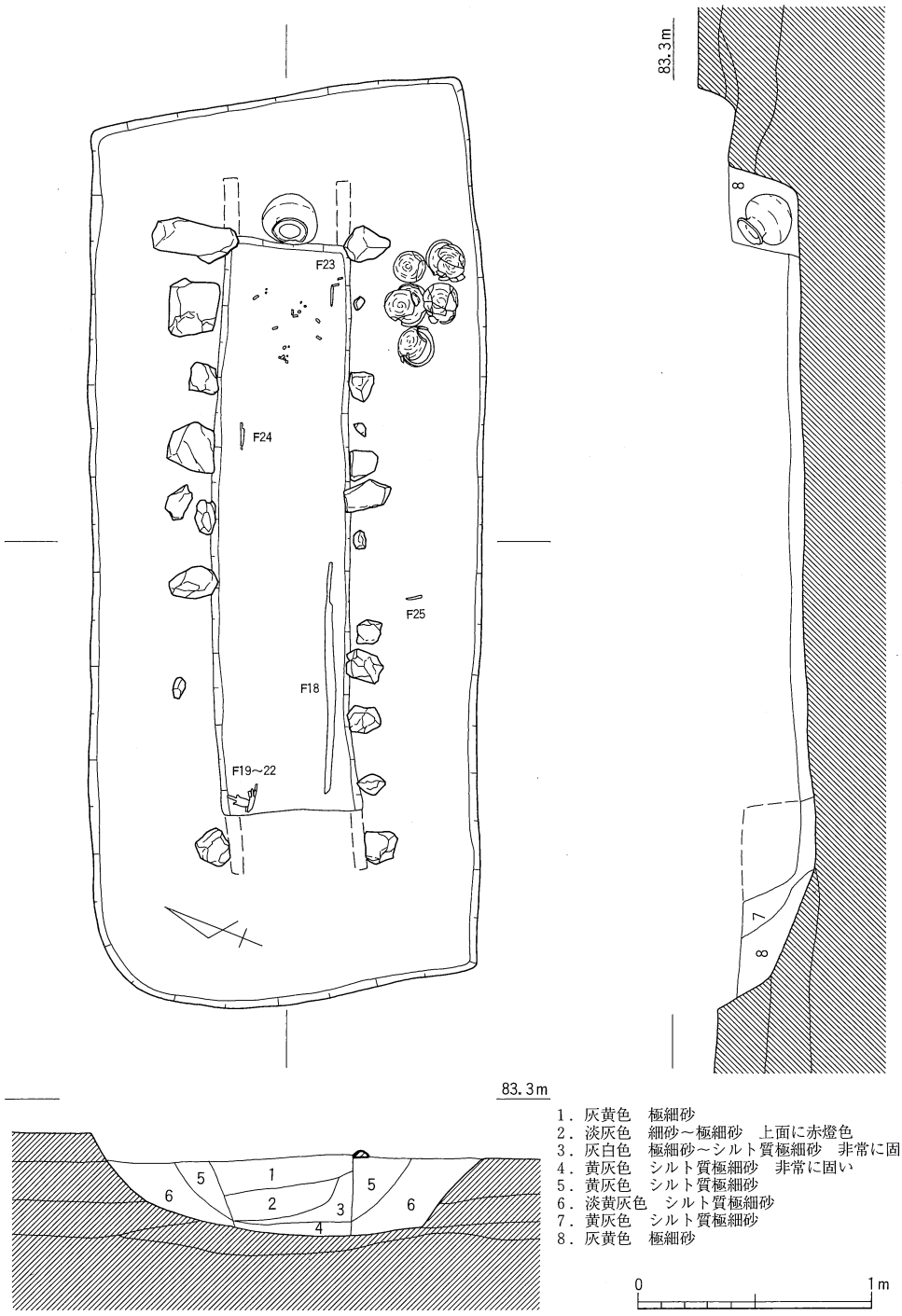
当主体部は、第２主体部と切り合い関係が認められている。第２主体部に墓壙の南側を一部切られている。

形状と規模

主体部は木棺直葬の形態をもつものである。墓壙の形状は長方形を呈する。北西側のコーナー部分は他のコーナー部分と比べてやや膨らみを持たせた形状を示す。主体部はN67°Ｅに主軸の方向をとっており、第１・第２主体部とほぼ同じ方向を示す。

規模は長軸方向に386㎝、短軸方向に167㎝を測る。検出面から墓壙底までの深さは58㎝である。墓壙底は基盤層にまで達している。

木棺はそれ自体は残存していなかったが、埋土の状況からその痕跡をみることができた。これによると、木棺は墓壙のほぼ中央部に設置してあり、主軸は墓壙と同じ方向をとる。規模は長軸方向に243㎝、短軸方向に57㎝を測る。木棺の痕跡を顕著に示すものとして、側板に沿って検出された礫の存在があげられる。これは、拳大から人頭大の礫が２列に直線的に並んで検出されたもので、南側で12個、北側で８個が検出された。検出された高さは墓壙の確認レベル



1．灰黄色　極細砂
2．淡灰色　細砂～極細砂　上面に赤燈色
3．灰白色　極細砂～シルト質極細砂　非常に固い
4．黄灰色　シルト質極細砂　非常に固い
5．黄灰色　シルト質極細砂
6．淡黄灰色　シルト質極細砂
7．黄灰色　シルト質極細砂
8．灰黄色　極細砂

第19図　第３主体部実測図

とほぼ同じ高さである。これは木棺の側板を安定させる目的で設置されたものと考えられ、この意味では設置された高さに違いはあるものの、第１主体部の墓壙底に並んでいた礫と同じものと考えている。

棺内の床面に赤色顔料の付着がみられた。木棺の内面に塗られていたものと考えられる。木棺の棺床は、この赤色顔料の範囲内で確定されるが、西側木口部では赤色顔料が残存していない。さらに西側で前記の礫が１個づつ検出されている。少なくとも、この位置までは側板が存在していたことは明らかである。このことから、木口部の木棺の組み合わせはＨ型を呈していたと考えられる。

埋土

墓壙内に堆積している土層は８層である。横断面で６層、縦断面で３層が認められたが、両者の土層としてのつながりは４を除いては明らかではない。

横断面で認められた土層の特徴を記載する。１～４は木棺内の埋土である。１は黄灰色の極細砂、２は淡灰色の極細砂、３は灰白色の極細砂～シルト質極細砂で非常によくしまっている。４は黄灰色のシルト質極細砂でこれも非常によくしまっている。このうち、３と４は粘土ではないが、第２主体部で棺床上に堆積していた３と同じ性格のものと考えられ、木棺の蓋の上面を覆っていたものが落下したものと思われる。５と６は墓壙内に堆積しているもので、５は黄灰色のシルト質極細砂、６は淡黄灰色のシルト質極細砂である。

縦断面での３層は以下のとおりである。７は黄灰色のシルト質極細砂、８は灰黄色の極細砂である。４は横断面でみられる４と同一層である。

遺物出土状況

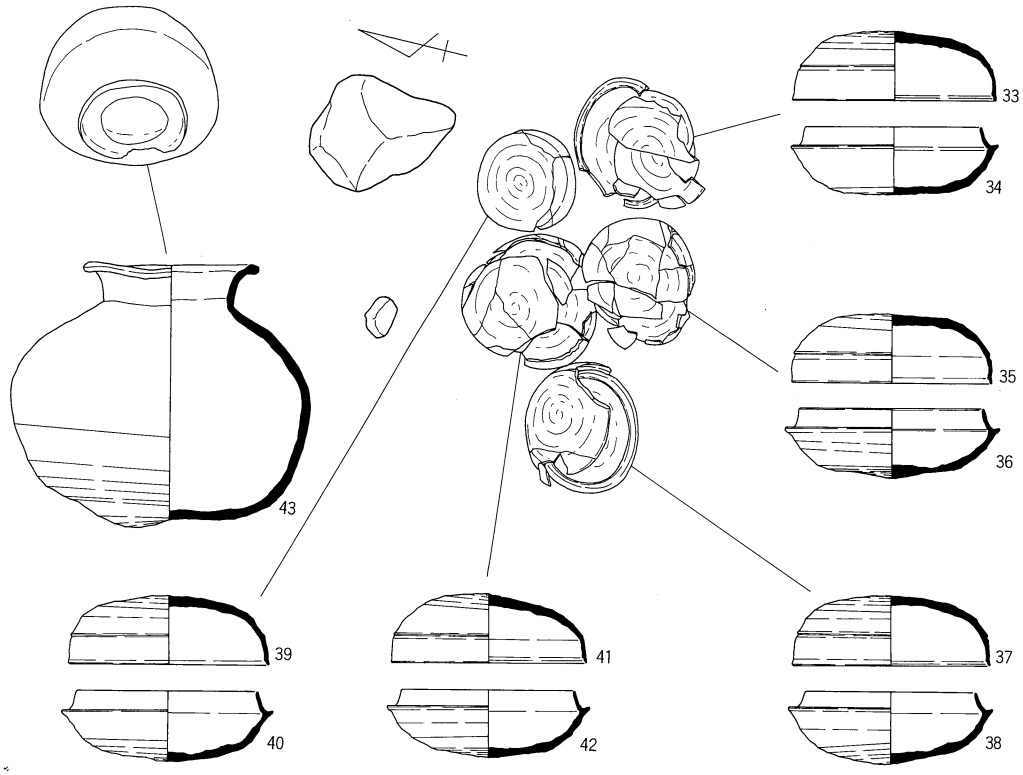
遺物は木棺外と、木棺内から出土している。出土した遺物は土器と金属器と玉類である。

木棺外からは土器が出土している（33～43）。遺物は棺側東部の墓壙内からまとまって出土している一群（33～42）と東側木口部の墓壙内から出土しているもの（43）がある。

棺側東部で検出した土器は須恵器の蓋坏が５セットである。出土状況は南側で２セットが１列に、北側で３セットが１列に並んで出土した。このうち南側で出土したものは、東側に33と34のセットが、西側で35と36のセットである。北側では、西側で37と38のセットが、東側で39と40のセットが出土し、その間に41と42のセットが位置する。各々のセットは土圧で特に蓋が破砕されていたが、蓋をした状態で、坏を下にした正位の状態で置かれていた。ただし、これらは平坦な面に置かれてはいなかったようで、全体として南側の列のほうが北側のものよりも高い位置で、なおかつ木棺側に傾斜して出土している。

東側木口部の墓壙内から出土しているものは43の壺の１点である。口縁部を上にむけ、やや木棺側に傾けて出土している。

金属器（Ｆ18～26）は木棺内と木棺外から出土している。木棺内から出土したものには、鉄



第20図　第３主体部　土器出土状況

刀・刀子・鉄鏃・環状銅製品がある。

鉄刀（Ｆ18）は棺内南側で出土した。切先を西側（足側）に、刃部を外側に向けている。

鉄鏃の４点（Ｆ19～22）は棺内の西側の北隅で、まとまって出土している。このうち、Ｆ20～22は刺突部を西側に向けているが、Ｆ19のみが刺突部を南側（棺中心部側）に向けて出土している。

Ｆ26の環状銅製品は東側木口から約43㎝内側で出土している。破損が著しく原形を留めていなかった。耳環と考えられ、このあたりが頭位と想定できる。

刀子は棺内の東側でみられる。Ｆ24は玉類の出土状況からみると胸部付近かと思われる。切先を西側に、刃部を遺体側に向けて出土している。Ｆ23は南東隅で出土している。刺突部を西側に向けている。

木棺外で出土しているものに、Ｆ25の鏨がある。墓壙の南側中央やや西寄りで木棺の南側板から約25㎝離れた位置で出土した。出土高さは墓壙検出のレベルから約５㎝下である。出土位置周辺には赤色顔料がみられる。

玉類は木棺内と木棺外から出土している。管玉の１点（Ｊ187）を除いて、すべて木棺内か

らのものである。玉の種類は、木棺内出土のものは碧玉製の管玉が11点、ガラス製の管玉が1点、ガラス製の小玉が6点、ガラス製の粟玉が8点である。木棺外出土の管玉は風化の著しい碧玉製のものである。木棺内での玉類の出土は東側木口から20～50cmのあたりに散布している。かなり散乱した状況で出土しており、装着状況は復元できる状態ではなかった。

遺物

須恵器

第3主体部から出土した土器は、須恵器である。器種構成は坏身と坏蓋と壺である。

蓋坏

坏身は5点出土している。いずれのものも、口縁部の立ち上がりは内傾して、口縁端部は丸くおさめて面をなさない。底部は34が比較的平坦な面をもっているが、他のものは尖りぎみである。36の底部内面には同心円叩き目が残り、40と42には一方向の仕上げナデを施している。底部のヘラ削りは、底部の器高の⅓以下に限定されている。ロクロの回転方向はすべて右回りである。

坏蓋は5点出土している。天井部と体部を分ける稜線は退化して全体としてにぶい。口縁端部内面には、内傾する面が残っている。41の天井部内面には一方向の仕上げナデを施している。天井部に施されているヘラ削りは、坏身と同様にその範囲は天井部高の⅓以下のものが多い。

壺

32は口縁部を一部打ち欠いているがほぼ完形の壺である。頸部は短く外反し、口縁部は玉縁状を呈する。体部下半は回転ケズリを施している。ロクロの回転方向は右回転である。体部上半から内面にかけては回転ナデで仕上げているが、自然釉が広範囲に付着しており、観察は困難である。

鉄器

鉄刀

F18は木棺内南側で出土したものである。切先部は腐食して失われている。平造りの片関のものである。関部は腐食しており、その形態は直角・斜角・撫角のいずれのものをとるか必ずしも明確ではないが、残存している茎部の形状から撫角であった可能性が高い。茎胴部は先細の形態をとり茎尻は隅切尻であったと思われる。茎部には2ヶ所に目釘孔が認められる。刀身部長は残存で80.0cm、茎部長は18.6cmを測る。これは大刀の部類に入るものである。

鉄鏃

F19は短頸鏃に属するものである。鏃身部は逆刺をもつものである。一方の逆刺の先端部と茎部の大半は欠損している。鏃身部は錆が浮いているため明確ではないが、片丸造りと思われる。鏃身部長4.6cm、頸部長4.5cm、茎部残存長1.7cmを測る。茎部には木質が遺存しており、矢柄の装着が認められる。

F 20は短頸鏃に属するものである。鏃身部は逆刺をもつものである。一方の逆刺の先端部と茎部は欠損している。鏃身部は錆が浮いているため明確ではないが、片丸造りと思われる。鏃身部長5.5㎝、頸部残存長3.2㎝を測る。F 19のものと比較して刺突部に丸みをもち、鏃身長が長く、逆刺は短い。

F 21は短頸鏃に属するものである。鏃身部は逆刺をもたない形態のものである。茎部の大半は欠損している。鏃身部は錆が浮いているため明確ではないが、片丸造りと思われる。鏃身部長6.0㎝、頸部長2.9㎝、茎部残存長1.3㎝を測る。茎部には木質が遺存しており、関部付近は横方向に矢柄を固定していた繊維が巻き付けられている。

F 22は短頸鏃に属するものである。鏃身部は逆刺をもたない形態のものである。刺突部は両端が欠失しているが、バチ状に広がり、方頭鏃と呼ばれているものである。鏃身部の断面形は方形を呈する。鏃身部長7.4㎝、茎部残存長5.1㎝を測る。茎部には木質が遺存しており、矢柄の装着が認められる。

刀子

F 23とF 24は刀子である。F 23は両関造りのものである。茎部には木質が遺存している。茎部はその上に布を巻いていたようで、茎胴部に布片が遺存している。刀身部長7.2㎝で、茎部長は4.6㎝を測る。F 16も両関造りのものである。切先部を欠損している。茎部には木質が遺存しているが、関部と茎部付近は錆が多く、観察は困難である。茎部は尻に向かってやや湾曲している。刀身部残6.6㎝で、茎部長は3.5㎝を測る。

鑿

F 25は木棺外から出土した唯一の鉄器である。緩やかにバチ状にひらく刃部をもっているが一部を欠失している。鑿としたのは上部の打撃痕を根拠にしている。かなり固いもので打撃を加えられており、潰れて変形している。一部に木質が付着している。

環状同製品

F 26は折れて細片となって出土していたが、つなぎ合わせると環状を呈することが判明した。直径1.8㎜の針金状のものを環状にしているもので、環の直径は1.6㎝内外である。青錆がみられることから、銅製品と考えられる。また、その形状と出土した位置から耳環と思われるが鍍金の痕跡はみられない。

玉類

管玉

管玉は13点が出土しているが、すでに述べたように木棺内からのものが12点、木棺外墓壙内のものが１点である。木棺内出土の12点のうち、１点がガラス製で、残りのものはすべて碧玉製である。

碧玉製の管玉（J 175～185）はいずれも暗緑色を呈していおり、第１主体部で出土したもの

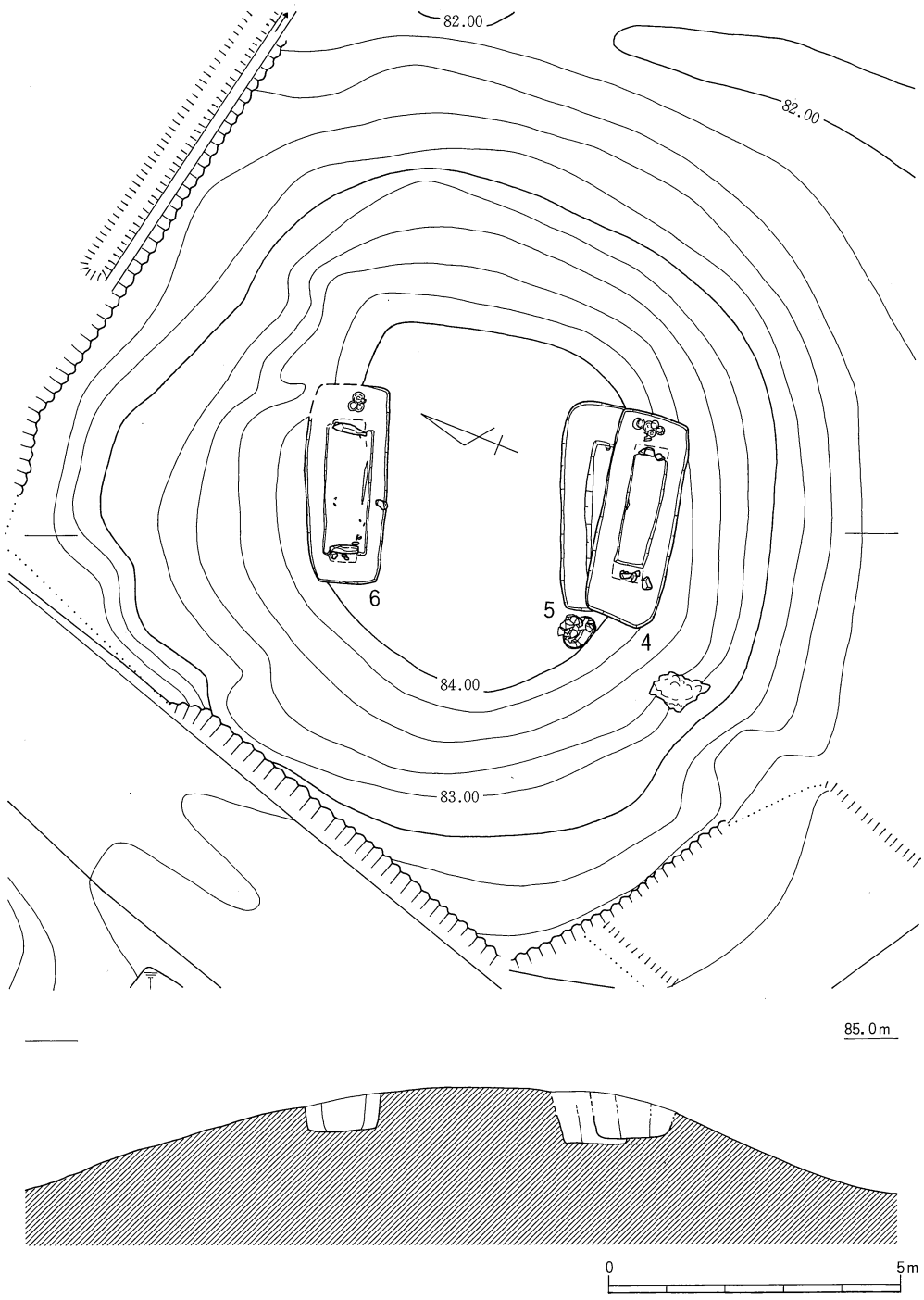
と同一の母岩から作られたのものと推測される。全長は短いもので17.4㎜、長いもので28.1㎜である。平均の全長は20.6㎜となるが、7点が全長20㎜以下のものである。直径の平均は7.4㎜、重量の平均は2.24ｇである。第1主体部から出土しているものが5ｇを越えていることからすれば、全体に小さく、細身である。穿孔はすべて一方向から行っている。

ガラス製のもの（Ｊ186）は淡青緑色を呈し、全長は12.4㎜と短いものである。碧玉製のものと比べて穿孔の径が大きい。穿孔はいずれの方向から行われたか不明である。

Ｊ187は木棺外出土のものである。碧玉製のものと考えられるが、風化が著しい。

小玉・粟玉

小玉（Ｊ188～193）・粟玉（Ｊ194～201）はすべてガラス製のものである。特に小玉・粟玉については、下層検出の3つの主体部で共通の組成の特徴を示しおり、各主体部ごとの特徴といったものは認められない。同じ時期に入手したものを、各個人が所有していたものと考えられる。



第21図　上層検出の主体部

第５節　上層検出の主体部

１．第４主体部の調査

位置

第４主体部は、ほぼ同一の高さで検出した第５・第６主体部と同じく、墳丘の表土直下で検出した主体部である。

位置は、墳丘南側に位置している。北側で検出した第６主体部とは対極の位置にある。この第４主体部と第５主体部には切り合い関係が認められ、第４主体部が切っている。なお検出した標高は83.6ｍである。

形状と規模

主体部は木棺直葬の形態をとり、N77°Ｅに主軸の方向をとっている。墓壙は長方形を呈するがコーナー部分はやや隅円ぎみである。規模は長軸方向に360㎝、短軸方向に130㎝を測る。検出面から墓壙底までの深さは36㎝である。

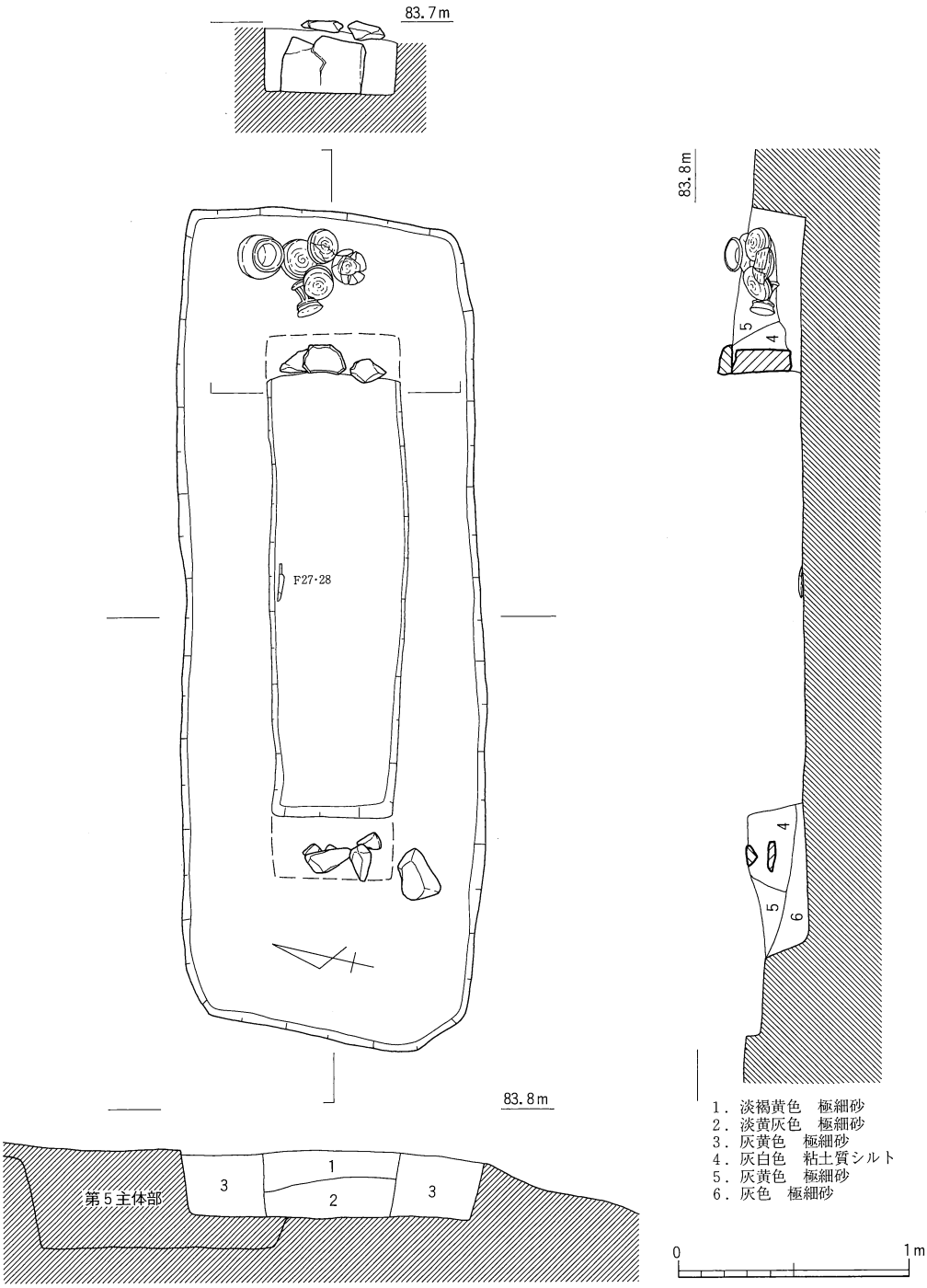
木棺はそれ自体は残存していなかったが、埋土の状況からその痕跡をみることができた。これによると、木棺は墓壙のほぼ中央部に設置してあり、主軸は墓壙と同じ方向をとる。規模は長軸方向に193㎝、短軸方向に59㎝を測る。

内部の施設としては、東側木口に板石がみられる。これは後述する第６主体部にみられるものと同じ用途のものである。この板石の外側には粘土質シルトが充填されており、板石を固定していたものと考えられる。西側木口では、この板石は検出しなかった。しかし、このことをもって東西の木口の形態が違っていたとは考えられない。理由としては西側墓壙内埋土に粘土質シルトがみられることがあげられる。これは東側木口付近でみられたものと同じ性格のものであり、本来は西側木口にも板石が据えられていたものと考えられる。この木口石は後世に抜き取られ現存しないと解釈するのが自然である。

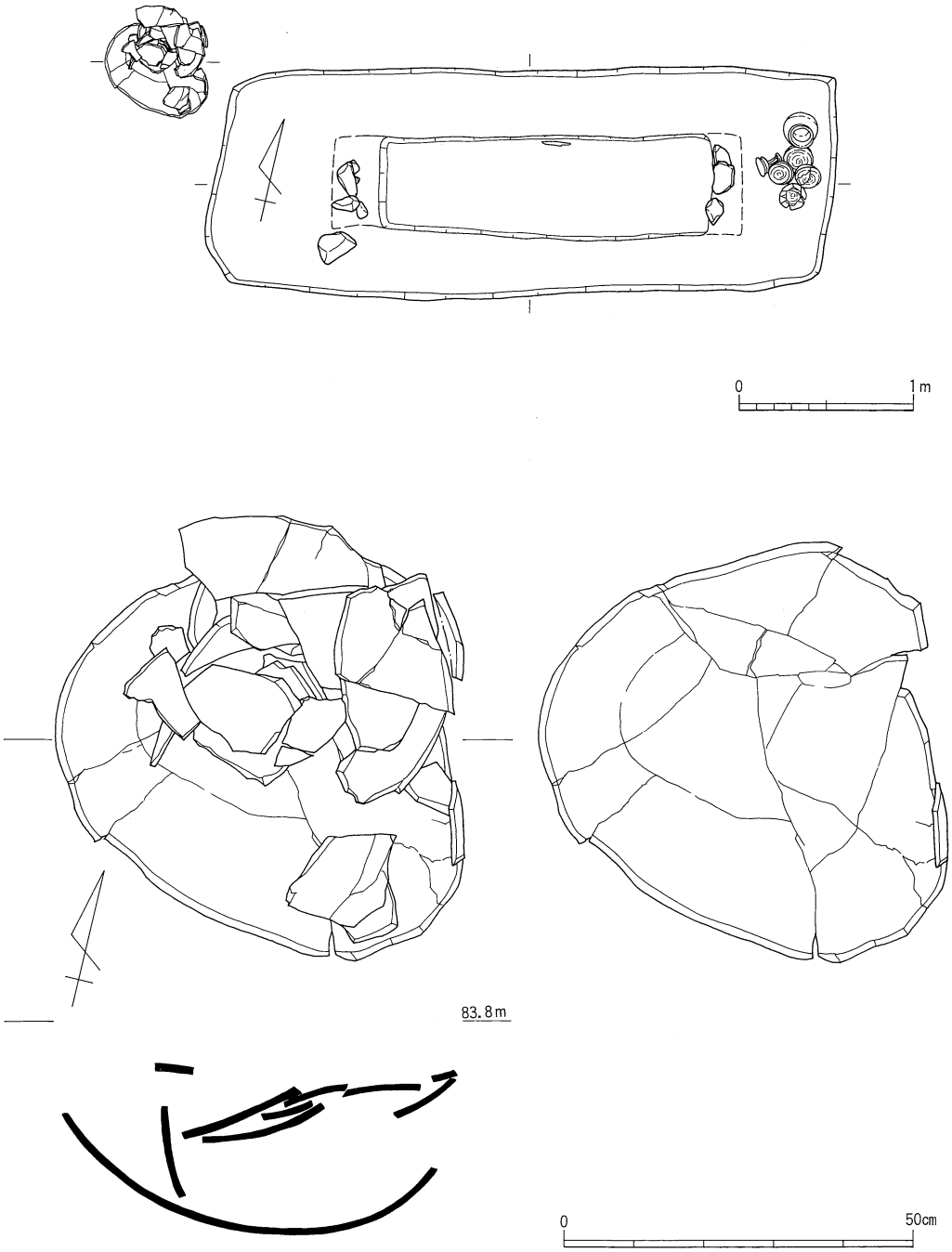
下層で検出した３つの主体部（第１～３）に普遍的にみられた、木棺内の赤色顔料は第４主体部ではみることができない。この特徴は上層で検出された３つの主体部（第４～６）に共通のものであり、上層と下層を特徴づけるものである。

当主体部の西側で、墓壙ラインに接するように大型の甕（70）が出土した。第４主体部に伴うものかどうかは明らかではないが、この項で報告を行うこととする。

この甕は墓壙の北西コーナーから約10㎝離れて検出されたものである。墳丘をやや掘りくぼめて横向きに据えられていたようである。口縁部は北西方向を指していたようであるが、欠失している。破砕された状況で出土しているが、残存している底の部分と破砕されて落下した破片との間には相当量の土層の堆積がみられることから、この甕はある程度の期間は原形を保って据え置かれていたようである。墳丘上で行われた墓上祭祀に使用されたものとしても、その



第22図　第4主体部実測図



第23図　第４主体部と甕出土状況

場で破壊されたとする積極的な理由はみられない。

埋土

墓壙内に堆積している土層は6層である。横断面で3層、縦断面で3層が認められたが、両者の土層としてのつながりは明らかではない。

横断面で認められた土層の特徴を記載する。1・2は木棺内に堆積している土層で、1は淡褐黄色の極細砂、2は淡黄灰色の極細砂である。どちらもしまりは悪い。3は墓壙内に堆積しているもので、灰黄色の極細砂である。

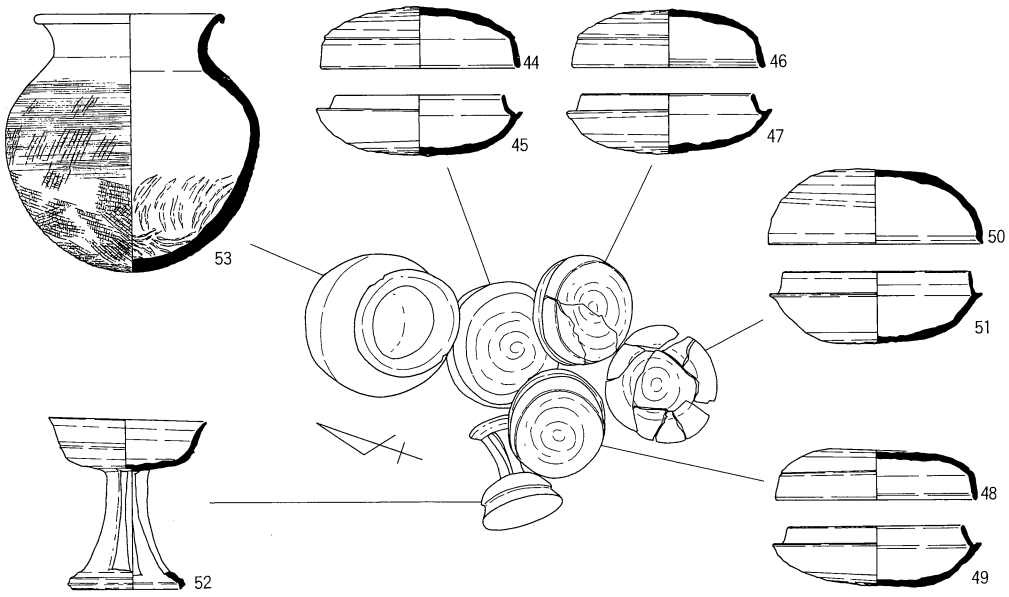
縦断面での3層は以下のとおりである。4は東西の木口の裏側に充填されていたもので、灰白色の粘土質シルト、5は灰黄色の極細砂、6は灰色の極細砂である。東側木口付近に堆積している5層中から土器が出土している。

遺物出土状況

遺物は木棺外と、木棺内から出土している。出土した遺物は、土器と鉄器である。

木棺外からは土器が出土している。(44～53) 遺物は東側木口の外側から、まとまって出土している。

検出した土器は全て須恵器である。器種は蓋坏が4セット、無蓋高坏が1点、壺が1点である。出土状況は、蓋坏の44・45のセットと50・51のセットを南北に並べ、その間に46・47のセットと48・49のセットを東西方向に並べている。壺はこの一群の北側に置かれ、高坏は44・45のセットの西側に置かれていた。蓋坏はすべて、蓋を上にした正位に据えられ、壺も口縁部を上



第24図　第4主体部　土器出土状況

にしている。出土状況では高坏は横倒しになっているが、本来は立てられていたものであろう。この一括で出土している土器群の下には赤色顔料がみられる。一部は坏蓋にも付着している。

木棺内からは鉄器（F 27・28）が出土している。

鉄器は棺内中央部の北側板に沿って出土している。F 27は切先を足側に刃部を遺体側に向けて出土した。F 28はF 27の東側に近接して出土している。

遺物

須恵器

第4主体部から出土した土器は全て須恵器である。器種は坏身と坏蓋を主体としており、他に無蓋高坏1点と壺1点で構成されている。

蓋坏

坏身は4点出土している。いずれのものも、口縁部の立ち上がりは内傾して、口縁端部は丸くおさめて面をなさない。45・47・49は下層で検出した主体部から出土したものと比較すると、全体として口縁部の立ち上がりにおいて内傾度が増し、高さを減じている。坏身のなかで、51のものは他の3点とやや特徴を異にしている。口縁部は比較的直立気味で、坏部は深くやや丸みを持つ。内面底部に仕上げナデがみられるものは、45・47・49の3点で、45・49は二方向から、47は一方向からのナデである。51には仕上げナデはみられない。底部に施されるヘラ削りは、底部の器高の½～⅓以下に限定されている。ロクロの回転方向はすべて右回りである。

坏蓋は4点出土している。44・46・48のものと比べて50はやや丸みをもち、器高が高い。天井部と体部を分ける稜線はほとんど失われ、かわって弱い凹線が1条みられるのみである。50にいたってはその凹線もみられず口縁部と天井部の境界は明瞭ではない。44・46・48は口縁内面に内傾する面はすでにみることができないが、50にはその特徴を残している。天井部に施されているヘラ削りは、坏身と同様にその範囲は天井部高の½以下である。ロクロの回転方向は50のみが左回りで、残りのものは右回りである。このほか、50の天井部外面には「十」のヘラ記号が記されている。

高坏

52は無蓋高坏である。小型のものである。口縁部と坏部との境には弱い稜線がみられ、以下に回転ケズリ、口縁部には回転ナデが施されている。脚部には4方向に長方形の透しを穿っている。ロクロの回転方向は右回りである。

壺

53も壺としては小型のものである。口縁端部は折り返して丸みをもっている。調整は外面が口縁部に回転ナデを施し、体部は平行叩きを施した後、上半にはカキ目がみられる。内面は口縁部～体部上半は回転ナデ、体部下半には同心円叩き目がみられる。

鉄器

刀子

Ｆ27は刀子である。両関造りのものであるが、切先部を一部欠失している。茎部には木質が遺存している。刀身部と、茎部の一部には褐色で半透明の松脂状のものが付着しているが、性格は明らかではない。茎端部は一部欠失していると思われるが、木質に被われているため不明瞭である。刀身部残存長は10.3㎝で茎部残存長は5.6㎝である。

円錐形鉄製品

Ｆ28は円錐形鉄製品としているが、用途は明らかではない。Ｆ27の茎部の端部に接するように出土しており、これとの関連が想定できる。形状は円錐形を呈しており、上下両端ともに開口している。全長は34㎝、上部の直径は15㎝、下部の直径は2.4㎝である。厚さは0.5～1.0㎝を測る。内部は空洞になっており、錆による腐食が激しく観察は困難である。Ｘ線撮影から判断すると、刀子あるいは鏃の茎部の端部を曲げたような形状のものがみられる。ただ、この内部の製品がＦ27の茎部の端部に連続するものかどうかは明らかではない。

２．第５主体部の調査

位置

第５主体部は、墳丘の表土直下で検出した主体部である。

位置は、墳丘南側に位置している。この第５主体部と第４主体部には切り合い関係が認められ、第４主体部に切られている。なお検出した標高は83.6ｍである。

形状と規模

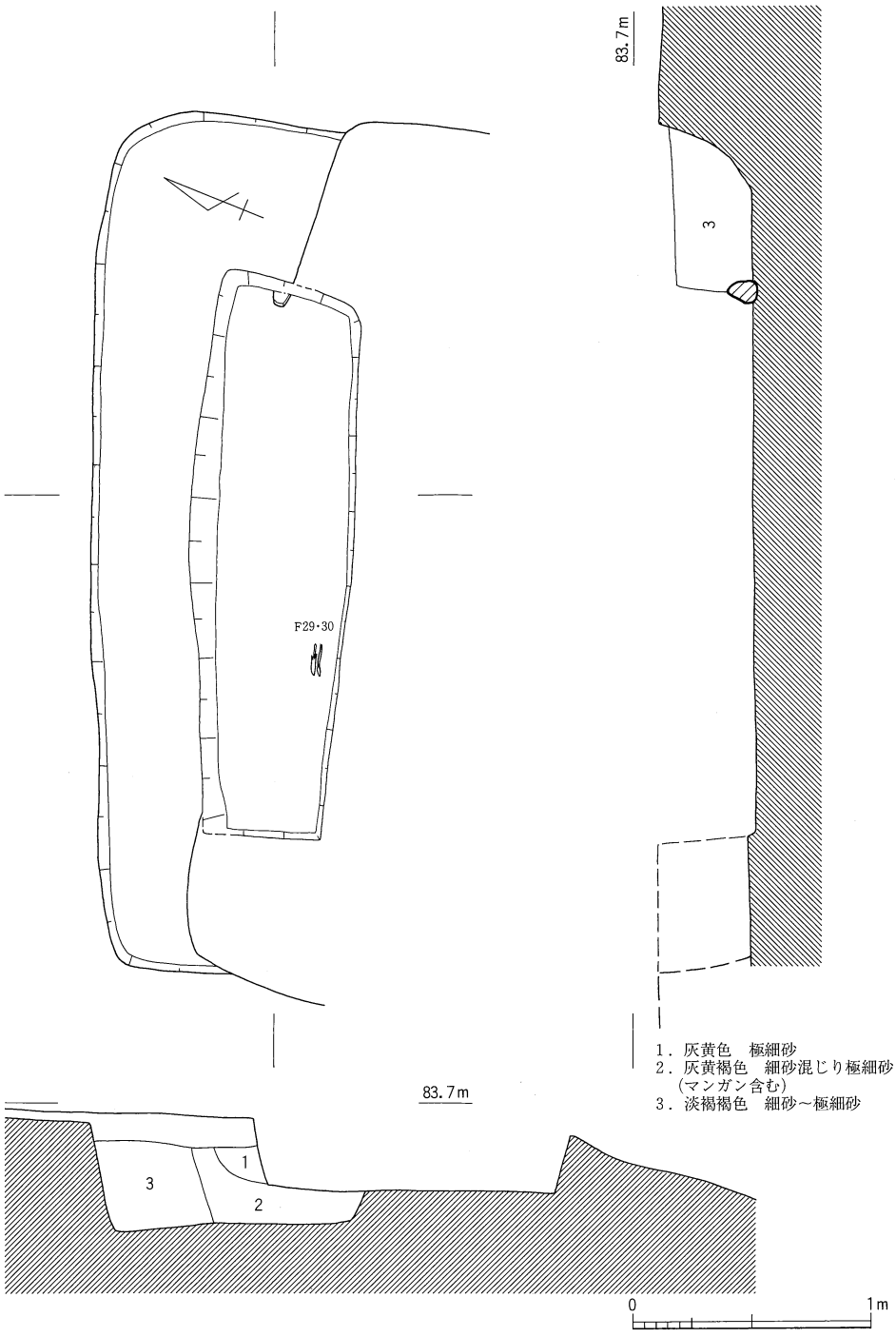
主体部は木棺直葬の形態をとり、N68°Ｅに主軸の方向をとっている。墓壙は第４主体部に切られているが、長方形を呈すると思われる。規模は長軸方向に360㎝、短軸方向は残存している最大の値で90㎝を測る。検出面から墓壙底までの深さは48㎝である。

木棺はそれ自体は残存していなかったが、埋土の状況からその痕跡をみることができた。これによると、木棺は墓壙のほぼ中央部に設置してあり、主軸は墓壙と同じ方向をとる。規模は長軸方向に234㎝、短軸方向に69㎝を測る。

埋土

墓壙内に堆積している土層は３層である。横断面で３層、縦断面で１層が認められた。横断面の３と縦断面の３は同一の土層である。

横断面で認められた土層の特徴を記載する。１・２は木棺内に堆積している土層で、１は灰黄色の極細砂、２は灰黄褐色のマンガンを含む極細砂である。３は墓壙内に堆積しているもので、淡褐色の細砂～極細砂である。１・２についてはしまりは悪い。



第25図　第５主体部実測図

縦断面ではその西側が第４主体部に切られているために東側のみで図示している。３は横断面の３と同一の土層で淡褐色の細砂～極細砂である。

遺物出土状況

出土した遺物は第４主体部に切られていたためか、非常に少ない。墓壙内から出土したものはなく、木棺内から鉄器が出土しているのみである。土器・玉類は出土していない。

木棺内からは出土した鉄器は２点で、どちらも鉄鏃（Ｆ29・30）である。この２者は木棺内の南側板に沿って、刺突部を西側木口に向けて、並んだ状態で出土した。

遺物

Ｆ29は短頸鏃に属するものである。鏃身部は逆刺をもつものである。一方の逆刺の先端部は欠損している。茎部には木質が残存している。鏃身部長6.0㎝、頸部長3.1㎝、茎部部残存長3.7㎝を測る。

Ｆ30は長頸鏃に属する細身の鏃である。鏃身部は片丸造りと思われる。鏃身部長2.1㎝、頸部長6.7㎝、茎部部残存長3.7㎝を測る。

３．第６主体部の調査

位置

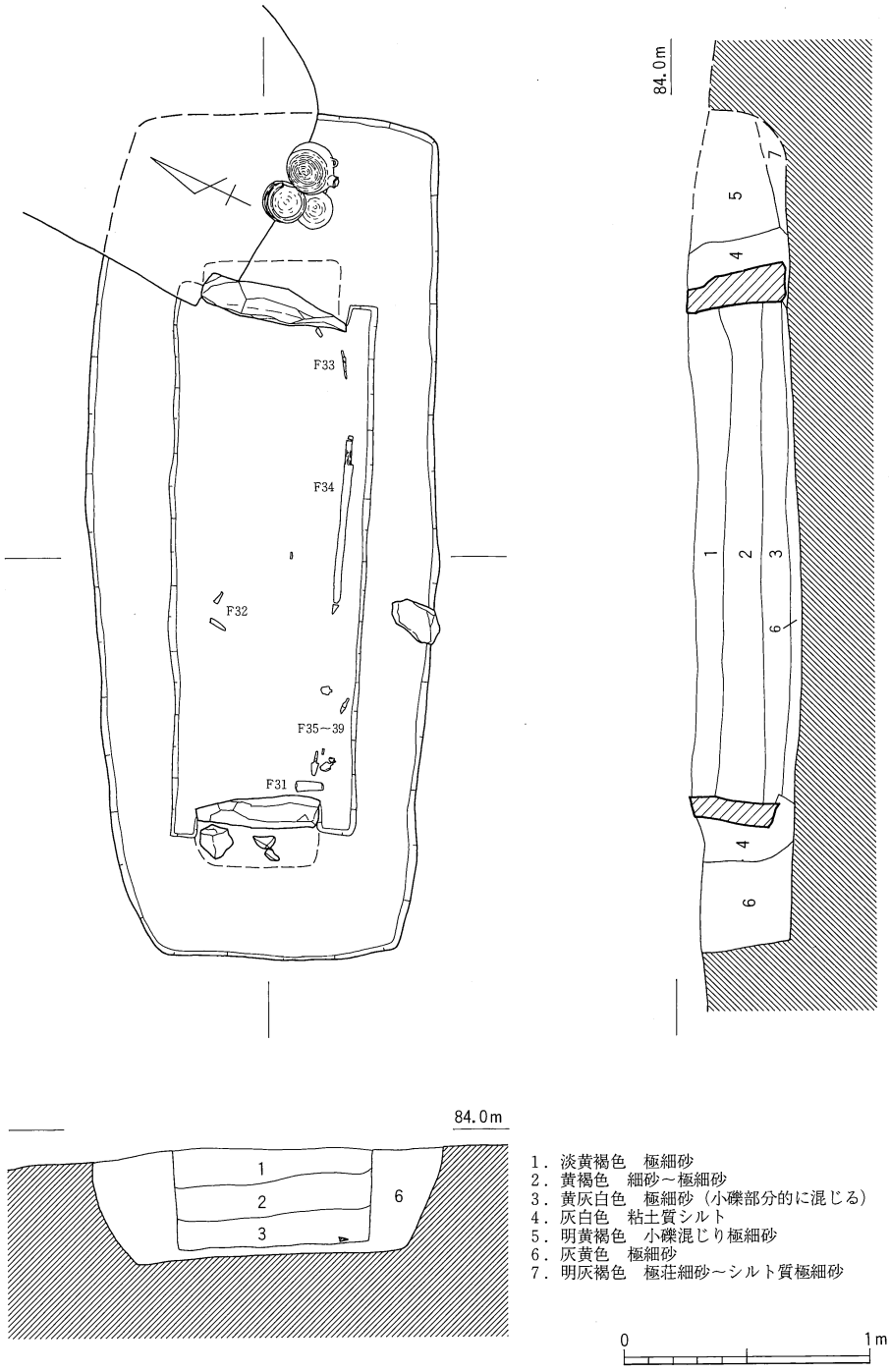
第６主体部は、平成２年度に実施した確認調査でその存在が確認された主体部である。この確認調査では、第６主体部の東側の墓壙と、その墓壙内から土器を検出している。この調査の結果で、当古墳は木棺直葬の埋葬主体部をもつ古墳と判明した。第６主体部は墳丘の表土直下で検出した主体部である。

位置は、墳丘北側に位置している。南側で検出した第４・第５主体部とは対極の位置にある。検出した標高は83.9ｍである。

形状と規模

主体部は木棺直葬の形態をとり、N64°Ｅに主軸の方向をとっている。この方向は下層で検出した３つの主体部と基本的には同じ方向と考えてよいであろう。墓壙の形状は、確認調査のトレンチで北東部のコーナーが定かではないが、長方形を呈するものと考えられる。規模は長軸方向に344㎝、短軸方向に142㎝を測る。検出面から墓壙底までの深さは、最も深いところで43㎝を測る。

木棺はそれ自体は残存していなかったが、東西の両木口に板石がみられることから、その位置は比較的容易に確定することができ、埋土の状況からその痕跡をみることができた。これによると、木棺は墓壙のほぼ中央部やや西よりに設置してあり、主軸は墓壙と同じ方向をとる。規模は長軸方向に222㎝、短軸方向に80㎝を測る。



第26図　第６主体部実測図

内部の施設としては、東西両木口に板石がみられる。東側木口で検出されたものは、横幅が58㎝、高さが40㎝、厚さは18㎝を測る。西側木口で検出されたものは、横幅が48㎝、高さが36㎝、厚さは11㎝と東側のものより小さい。板石は底面、両側面ともに整形されており、平滑な面をもつ。石材は砂岩でもろく、板状に剝離する性質をもつものである。当古墳は段丘上に構築されているが、すぐ東側は段丘崖になっている。この崖に露呈しているものに、当主体部の木口に立てられている板石とまったく同じものが見られた。この石材は古墳の周辺から供給されていたことが確認された。第５主体部にみられなかったが、第４主体部にはこれと同様の板石が東側木口にみられ、上層で検出した主体部のひとつの形態的特徴として下層検出の主体部との違いが指摘できる。

埋土

墓壙内に堆積している土層は７層である。横断面で４層、縦断面で７層が認められている。横断面で認められた土層の特徴を記載する。１～３は木棺内に堆積している土層で、１は灰黄褐色の極細砂、２は黄褐色の細砂～極細砂、３は灰黄色の小礫が部分的に混じる極細砂である。いずれも、しまりは悪い。６は墓壙内に堆積しているもので、灰黄色の極細砂である。

縦断面での７層は以下のとおりである。１～３と６は横断面のもと対応するものである。４は木口部に立てられている板石の裏側に充填されているものである。黄灰色の粘土質シルトで、板石の下側にも回り込んでいる。５は東側木口部付近のもので、明黄褐色の小礫混じり極細砂である。この土層中から一括して土器が検出された。６は西側木口付近のもので、灰黄色の極細砂である。７は５の下にみられるもので、明灰褐色の極細砂～シルト質極細砂である。

遺物出土状況

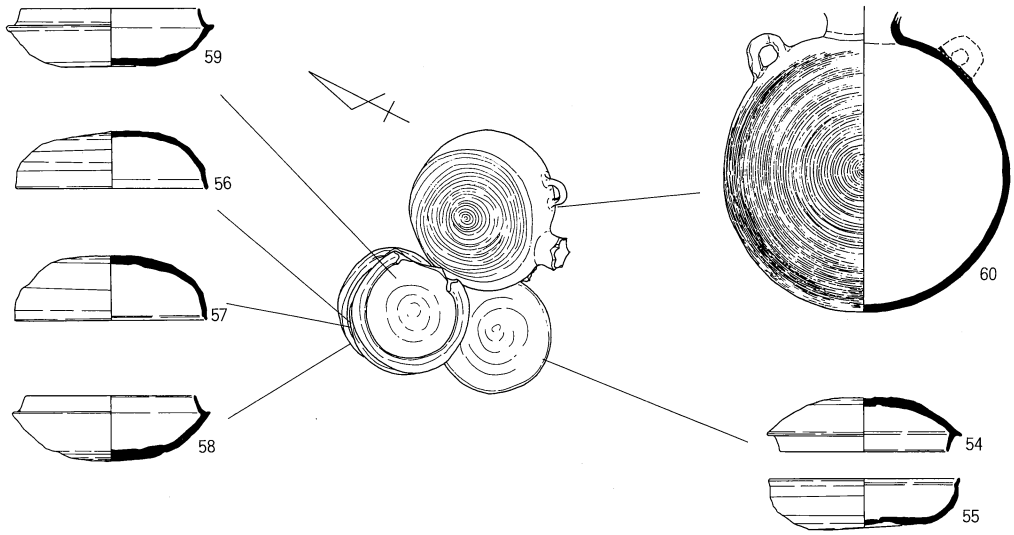
遺物は木棺外と、木棺内から出土している。出土した遺物は、土器と鉄器である。

木棺外からは土器と鉄器が出土している。土器（54～68）は東側木口の外側から、まとまって出土しており、鉄器（Ｆ40・41）は西側木口の外側から出土した。

出土した土器は全て須恵器である。このうち、全面調査で出土したもの（54～60）は出土状況が明確であるが、確認調査で出土したもの（61～69）は明確ではない。ただし、全面調査で出土した一群とほぼ同じ位置で出土しているということについては確かである。器種は基本的には坏を主体としている。ただし蓋坏としてセット関係が確認されているものは１セット（54・55）のみである。このセットの他には坏身が５点、坏蓋が７点、提瓶が１点、壺が１点である。確認調査で出土した坏蓋のうち１点は壺の蓋として使用されていた可能性が高い。

出土状況は東側木口の板石から約25㎝離れてまとまって出土している。

54・55のセットは、身と蓋の天地を逆にして出土し、56～59は、その北側で下から順に58→57→56→59と重ねられていた。坏身は口縁部を上にしているが、坏蓋は天井部を下にして出土している。提瓶は坏の東側に口縁部を南に向けている。確認調査で出土したもの（61～69）は、



第27図　第６主体部　土器出土状況

確認トレンチの南端から出土している。詳細な出土状況は不明な点があるが、位置的には全面調査で出土した一群と同じ位置と考えている。

鉄器は西側木口部付近の墓壙内から出土した。層位としては６層中からの出土である。どちらも土層観察のための土手内から出土しており、正確な位置は不明な点がある。

木棺内からは鉄器（Ｆ31～39）が出土している。器種は鉄鏃が５点、鉄刀が１点、鉄斧が１点、刀子が１点、鑿が１点の９点である。

鉄器の出土は大別して４つに分けられる。最も多くの鉄器が出土しているのは、西側木口部の南側である。ここからは、鉄斧（Ｆ31）１点、鉄鏃（Ｆ35～39）５点の合計６点が出土している。棺中央部南側では、側板に沿って鉄刀（Ｆ34）が出土している。切先を西側に、刃部を南側にむけている。棺中央部北側では刀子（Ｆ32）が出土している。関の部分で折れており、刀身部と茎部は約10㎝離れている。出土した高さは他の鉄器に比べて約７～10㎝程度高い位置から出土しており、棺床直上の遺物とは考えられない。棺の蓋の上に置かれていたものが、蓋の腐食に伴って落下したものと思われる。東側木口部の南側からは鑿（Ｆ33）が先端部を東側にむけて出土した。

遺物

須恵器

第４主体部から出土した土器は全て須恵器である。器種は坏身と坏蓋を主体としており、他に提瓶１点と壺１点で構成されている。

蓋坏

坏身は6点出土している。いずれのものも、口縁部の立ち上がりは内傾して、口縁端部は丸くおさめて面をなさない。内面底部に仕上げナデがみられるものは、54・58の3点で、54は一方向から、58は二方向からのナデである。66には仕上げナデはみられない。底部に同心円叩き目を残すものは59・67・68の3点である。底部に施されるヘラ削りは、底部の器高の½～⅓以下に限定されていおり、特に、54・58・59はその範囲は非常に狭い。ロクロの回転方向は54・58が左回りで残りのものは右回りである。

坏蓋は8点出土している。天井部と体部をわける稜線が失われて両者の区別のほとんどないものは、55～57・63～65の6点である。かわって弱い凹線が1条みられるものは62、弱いながらも稜線がみられるものは61であ。口縁内面に内傾する面は残っているが、55・56・64のものは貧弱で、57・61～63・65は比較的明瞭である。天井部に施されているヘラ削りは、坏身と同様にその範囲は天井部高の½以下である。ロクロの回転方向は57・63・65が左回りで、55；56・61・62・64は右回りである。このほか、65の天井部外面には「－」のヘラ記号が記されていおり赤色顔料の付着も認められる。

提瓶

60は提瓶である。口縁部は打ち欠いている。肩部には環状の耳が2箇所設けられていたようであるが、片方を欠失している。調整は、口縁部に横ナデ、体部は背部には回転ケズリを施し、腹部にはカキ目がみられる。

壺

69は直口壺である。完形のもので、外面の調整は口縁部～体部上半に回転ナデ、体部中位にカキ目、体部下半～底部には平行叩きを施している。内面は、底部に同心円叩き目を残しているが以上は回転ナデで仕上げている。肩部には蓋の重ね焼き痕がみられるが、当主体部から出土したものには、この重ね焼き痕と合致するものは見当たらなかった。

鉄器

鉄刀

Ｆ34は鉄刀である。平造りの両関のものである。関部は刃・背両面ともに浅く切れ込む、いわゆる均等の形態を示し、茎胴部は中細で、茎尻は栗尻である。茎部には目釘孔はみられない。部分的にではあるが、刀身部に木質が遺存しており、鞘の装着が確かめられた。茎部にも鞘の木質が遺存している。刀身部長は58.3㎝、茎部長は10.7㎝を測り、下層で検出した第3主体部出土のＦ18よりは小振りであるが、大刀の部類に入るものである。

鉄斧

Ｆ31は鉄斧である。形態的には有袋の無肩鉄斧である。全長は11.4㎝、刃部幅4.9㎝、厚さ1.2㎝を測る。刃部は両刃で弧状をなす。

刀子

F 32は両関造りのものである。切先部を腐食のため欠失している。刀身部に一部木質が遺存している。茎部には、巻き付けられている木皮状のものが遺存していた。残存長は13.2cmで、刀身部残存長は7.9cm、茎部長が5.3cmを測る。

鑿

F 33は形態的には茎式の無肩鑿と呼ばれるものである。穂先は両刃である。全長は14.3cm、茎部長4.1cm刃部幅0.56cm、厚さ0.54cmと断面はほぼ方形を呈する。茎部には木質が遺存しており、関部付近の状況の観察が困難である。

鉄鏃

鉄鏃は5点出土し、すべて木棺内の南西隅から出土している。5点とも形態的には同じ特徴をもっている。逆刺をもつ短頸鏃に属するものである。

F 35は鏃身長3.9cm、頸部長4.3cm、茎部残存長3.7cmを測る。逆刺の部分は腐食して丸みを帯びている。茎部には木質が遺存し矢柄の装着をうかがわせる。鏃身部は錆による腐食があり所々錆瘤が浮き上がっているが、断面の厚みはほぼ均等で平造りと思われる。

F 36は鏃身長3.7cm、頸部残存長3.8cmを測る。茎部以下は欠失している。鏃身部平造りと思われる。

F 37は鏃身長4.0cm、頸部残存長3.5cmを測る。頸部はかなり湾曲しており、一部に樹脂状の付着がみられる。茎部以下は欠失している。鏃身部は平造りと思われる。

F 38は鏃身長4.0cm、頸部残存長2.6cmを測り、以下は欠失している。鏃身部は平造りと思われる。

F 39は鏃身長3.5cm、頸部残存長0.5cmを測り、頸部以下のほとんどは欠失している。鏃身部は平造りと思われる。

環状鉄製品

F 40とF 41は西側の墓壙内から出土しているものである。両者ともに破損しており、全体の形状は明らかではない。どちらも断面形は方形を呈して、環状の形態をとるが、両者には若干の違いがみられ、F 41には直線部分がみられる。

4．墳丘上面出土の遺物

主体部から出土した遺物以外に、墳丘上からも遺物が出土している。これらは70と72を除いては表土掘削中に出土したものであり、基本的にはどの主体部に伴う遺物であるかは明らかではない。70の甕は第4主体部の墓壙のすぐ西側で、72の高坏は第6主体部の南側約40cmの位置で出土している。全体の出土の傾向としては、墳丘の南側で出土しているものが多い。S 1は粘板岩製のもので上部を欠いている。中央に穿孔があり裏表面ともに擦痕が顕著である。左右両端は刃部状に両面から研ぎ出しており、欠損部は先端を尖らせていたものと想定される。

第４章　まとめ

１．古墳築造の時期について

大池７号墳が築造された時期について考える場合、もっとも端的に示しているものは土器である。そのなかでも須恵器の蓋坏に絞って考えてみたい。この器種は第５主体部を除く全ての主体部から出土しており比較検討するのに最も適していると考える。

当古墳は６基の主体部を備えた古墳であるが、下層で検出した主体部（第１～３）と上層で検出した主体部（第４～６）にから出土したものには時期差が認められる。

蓋坏については、下層出土のものには口縁部と天井部を分ける稜線が弱いながらも残っているものが多いのに対して、上層出土の蓋坏にはこれがみられず、凹線を巡らせるにとどまる。さらに、第４主体部出土の50、第６主体部出土の55～57・62～65のように口縁部と天井部を分けることが困難なものも多数存在する。口縁部内面の内傾する面は両者に観察できるが、下層出土のものが比較的明瞭であるのに対して、上層出土のものは明瞭さが失われている。

坏身については、いずれも口縁端部は、丸くおさめる形態を示す。両者の違いは、坏部の深さと、立ち上がりにみられる。坏部の深さについては全体として下層出土のもののほうが、上層のものに比べて深いものが多い。立ち上がりに関しては下層出土のものが、比較的直立気味なのに対して、上層出土のものは内傾する度合いが高い。

各主体部ともに出土している土器に時期差がみられるが、そのなかで新しいものを築造の時期と考えれば、下層出土の主体部は陶邑編年の TK10の古い時期が与えられ、上層出土の主体部は TK10の新しい時期が与えられる。ただし、下層出土のものはその前段階の MT15の特徴を示す土器が多数を占める。

２．土器の埋納形態について

大池７号墳の各主体部から出土した土器は、いずれのものも棺内に持ち込まれることはなく棺外に埋納されている。位置は基本的には頭位側に配置されている。例外として第１主体部では足側の木口部にも土器が配置されている。頭位側の土器は第３主体部からのものは、木口部に壺を南側板に沿って５つの蓋坏のセットが置かれているのが例外で、他のものはすべて木口部に土器を埋納している。器種は須恵器が大半を占め、そなかでも蓋坏の数が多い。その他のものとしては壺、高坏、提瓶、土師器などがあるが、数は少ない。出土の状態は、坏についてはセットとして蓋をした状態の出土のほかには、身のみあるいは蓋のみで出土しているものもある。それらは伏せられた状態のものは１点もなく、蓋については身として使用しているものと解釈される。身の中に食物が入れられていたとする証拠はみつからなかったが、土器に食物を入れることが不可能な状態のものがないことは、逆説的に食物の存在を想定させる。ものを入れる器としての土器が、ある意思のもとに並べられているという状態においては、なんらか

の内容物があると考えたほうが自然であろう。

これらの土器の埋納される意味を出土状況から想定することは困難なことである。現在の考古資料を以て6世紀の人々の行った葬送儀礼を解明するのは不可能に近い。観念的ではあるが、これらは、亀田博氏が述べられている「後期古墳に埋納された土器『考古学研究23巻4号』1977」ように被葬者のために捧げられた土器で「枕飲」とよばれる祭りに由来するとする説に基本的に同意する。

土器が埋納される位置が墳丘の裾部から墓壙上、そして墓壙内と時代を経るに従って変化していることは周知のことである。

このような事実からはどのような変化が読み取れるのであろうか。従来「枕飲」の行われた殯の場は、古墳の墳裾にあったのではないだろうか。これはその残骸である土器類が墳裾に残されていることによる。古墳は本来単葬であることが基本であり、埋葬されるべき死者のための殯の場はそ古墳の墳域内に設置されていたものと思われる。土器類が墓壙内に埋納されていることは、埋葬される場と殯の場が離れていることを意味していると考えられる。これは、古墳が家族墓的色彩を強め、複数埋葬を行うことに伴って、もはや埋葬と祭礼を同時に行う場所ではなくなり、単に墓としての機能をもつのみに至ったのであろう。殯の場は古墳とは離れた場所に設置され、必要が生じた時にその一定の場所で行ったのではないだろうか。古墳は、死者が出るたびに造営されることはなくなり、墳丘上の空いたスペースに主体部を設置している。被葬者に与えられた空間は墓壙の範囲内のみで、古墳は個人のためのものではなくなっている。この傾向はその後木棺直葬に変わって採用される横穴式石室に至ってさらに顕著にみられる。個人に与えられた空間は、もはや棺内にしか残されておらず、木棺直葬の墓壙に比定される横穴石室内部の空間は各被葬者の共有である。

3．棺内の遺物から

主体部から出土した遺物のうち、土器は棺外、金属器・玉類は棺内で出土している。

棺内から出土した遺物には金属器・玉類があるが、なかでも鉄器はすべての主体部から出土している。玉類は下層検出の3つの主体部からの出土である。これらの遺物を概観すれば、生前、被葬者が使用した、或いは身につけていたものであることを予想させる。棺内に納められている遺物は個人の所有物と考えてよい。

このことから考えるならば、墓壙に埋納されている土器類は棺内に納められることを拒絶されており、これは決して個人所有物としての扱いとは考えられない。やはりこれらの土器類はすでに述べたように、「枕飲」なる祭りに使用され、死者に供せられた遺物ではあるが、葬送儀礼のためのものであろう。

遺物として特徴的なものは、F4・5の鉄鏃である。両者ともに第1主体部から出土したものであるが、その出土状況は他の鉄鏃と異なる。他のものは棺内の北西隅に先端部を西木口に

向けて一括して出土しているが、この両者はそれらとは直交して出土している。形態的には、茎部が折り曲げられて環状を呈しており、当然ながら矢柄の痕跡は認められない。これは明らかに矢としての使用は考えられない。用途を考える際に、鏃身部に残存している木質に注目したい。当古墳から出土している鉄器には木質の残存しているものが少なからず存在している。柄などの装着されている部分以外はすべて棺床に接した片面にのみ残存しており、これらは棺床の痕跡と考えられる。しかし、Ｆ４・５の鏃身部に残存している木質は両面に認められる。このことから考えられるのは、棺釘として使用されていた可能性である。木棺の北長側板に鏃身部を打ち込み、それにＦ６～14の９本の矢を渡していた状況を想定したい。

４．大池古墳群について

大池古墳群は７基の円墳から構成されている古墳群である。消滅しているものが４基あり、内部主体の形態も明確さを欠くが、１号墳のみが横穴式石室を採用している。他の６基は木棺直葬の形態をとるものと考えられる。時期的には陶邑編年のMT15～TK10以降に構築されたものと考えられる。東播磨地域での古墳の変遷については、渡辺伸行氏の研究「木棺直葬墳の終焉『神戸の歴史』1986」によると、木棺直葬墳はTK23期に始まりTK47の時期にピークを迎え、MT15～TK10期に序々に減少することが明らかにされている。横穴式石室墳はこれに代わって、MT15期に始まり、TK43期頃にピークを迎えるとされる。大池古墳群は木棺直葬から横穴式石室に代わる時期の古墳群である。ただし、当古墳群が横穴式石室を採用するのはTK10期以降のことである。

横穴式石室の採用について従来から言われていることは、大和政権がこれに介在し、墓制のイデオロギー的な側面を備えているという意味から政治的に大きな画期であるということである。

いっぽう、木棺直葬墳の単葬墓から複葬墓への変化は、古墳が被葬物個人（家父長）のためのものから、それを造営した集団（家父長制家族共同体）のためのものに移ったことを意味しており、これは集団の自律的発展の画期の現れとみることができる。

この観点からいえば、複数の主体部をもつ木棺直葬墳も、横穴式石室墳もその構造以外には変化は認められない。古墳に葬られる被葬者の性格が変化したのは、複葬墓が造営された時であり横穴式石室の採用はその延長線上にあるに過ぎない。古墳時代の地域集団の内的変化はこの時期にみることができる。東播磨地方ではMT15の時期であろう。

ただし、この変化は政治的な画期とは別の問題であり、横穴式石室の採用を大和政権との関係において考えるには至っていない。

この大池古墳群を造営した母集団を求めるとすれば、この古墳群の段丘下に展開する西ケ原遺跡がこれにあたると思われる。６世紀初めから後半にかけての住居跡が36棟検出された。地理的にも近く時期的にも合致することから、この西ケ原の集落が母集団であると考える。

第１表　各主体部概要表

主体部	墓 壙 規 模	木 棺 規 模	出　土　遺　物						備　考
			土　器		金　属　器		玉　類		
1	4.10×2.45	2.55×0.70	坏10、蓋９、壺１ 有蓋壺１対、土師器１	23	短刀１、刀子２、鏃11	14	管玉２、切子玉12 小玉15、粟玉19	48	棺内に赤色顔料 側板裏に石の支え
2	3.70×1.30	2.10×0.57	坏４、蓋４、土師器１	9	刀子２、鏃１	3	勾玉１ 小玉62、粟玉63	126	棺内に赤色顔料
3	3.86×1.67	2.43×0.57	坏５、蓋５、壺１	11	大刀１、刀子２、鏃４ 鑿１、環状銅製品１	9	管玉13、小玉６ 粟玉８	27	棺内に赤色顔料 側板裏に石の支え
4	3.60×1.30	1.93×0.59	坏４、蓋４、壺１ 無蓋高坏１	10	刀子１ 円錐形鉄製品１	2	――		東木口に板状の石 土器に赤色顔料
5	3.60×(0.90)	2.34×(0.69)	――		鏃２	2	――		第４主体部に切られる
6	3.44×1.42	2.22×0.80	坏６、蓋８、壺１ 提瓶１	16	大刀１、刀子１、鏃５ 鑿１、斧１、環状鉄製品２	11	――		両木口に板状の石

第２表　出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	腹径	ロクロ回転	調整		備考
1	蓋	14.00	4.85	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	第１主体部 西側出土
							内	回転ナデ	
2	坏	13.80	4.70	―	―	左	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	第１主体部　西側出土
							内	回転ナデ	
3	坏	13.60	4.90	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	自然釉付着、 第１主体部　西側出土
							内	回転ナデ、仕上げナデ、同心円叩き目残	
4	坏	13.60	5.40	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	蓋として使用、５とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
5	蓋	14.95	5.30	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	天井部外面に「×」のヘラ記号 身として使用。４とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ、雑な一方ナデ	
6	蓋	14.40	4.50	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	天井部外面板状による「―」記号、７とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
7	坏	12.80	4.65	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	蓋６と同様の記号が底部内面に有り、６とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
8	蓋	14.40	4.70	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	自然釉内面に付着、９とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
9	坏	12.60	4.50	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	自然釉付着、８とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
10	蓋	14.75	4.10	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	火だすき痕有り、11とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
11	坏	12.90	4.70	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	10とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
12	蓋	14.15	4.10	―	―	右	外	回転ケズリ、回転ナデ	13とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
13	坏	12.95	5.15	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	12とセット 第１主体部　東側出土
							内	仕上げナデ（一方）、回転ナデ	
14	蓋	14.40	4.20	―	―	右	外	回転ケズリ（天井部中心ヘラ切り後簡単なナデのみ）、回転ナデ	天井部内面に板状による「―」の記号有り　15とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
15	坏	13.00	4.40	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	14とセット 第１主体部　東側出土
							内	仕上げナデ（一方）、回転ナデ	
16	蓋	14.50	5.00	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
17	坏	12.55	4.20	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	自然釉付着 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
18	蓋	15.30	5.30	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
19	坏	13.20	4.10	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
20	壺の蓋	9.10	3.90	―	―	左	外	回転ケズリ、回転ナデ	自然釉付着、21とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	

第３表　出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	腹径	ロクロ回転		調整	備考
21	有蓋壺	7.10	15.10	14.10	9.50		外	全体的に回転ナデ、底部付近のみ板状の粗いケズリ	自然釉付着、20とセット 第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
22	壺	9.40	11.75	—	12.80	左	外	回転ケズリ、カキ目のち一部ナデ残す	第１主体部　東側出土
							内	回転ナデ	
23	坏	10.20	6.40	—	—	—	外	磨滅のため調整不明	土師器 第１主体部　東側出土
							内	磨滅のため調整不明	
24	蓋	14.80	5.10	—	—	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	25とセット 第２主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
25	坏	13.20	4.85	—	—	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	自然釉付着、24とセット 第２主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
26	蓋	15.10	5.05	—	—	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	27とセット 第２主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
27	坏	13.50	4.15	—	—	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	26とセット 第２主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
28	蓋	14.10	4.80	—	—	左	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	自然釉付着、29とセット 第２主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
29	坏	12.40	4.30	—	—	左	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	自然釉付着、28とセット 第２主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
30	蓋	15.50	5.40	—	—	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	天井部外面に「X」のヘラ記号 第２主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
31	坏	12.50	4.60	—	—	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	自然釉付着 第２主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
32	坏	(12.2)	(5.95)	—	—	—	外	体部　ユビオサエ、底部　雑なユビナデ	土師器 第２主体部
							内	ユビナデ	
33	蓋	15.30	5.20	—	—	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	34とセット 第３主体部
							内	回転ナデ	
34	坏	13.20	5.10	—	—	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	33とセット 第３主体部
							内	回転ナデ	
35	蓋	15.10	5.15	—	—	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	36とセット 第３主体部
							内	回転ナデ	
36	坏	13.90	5.30	—	—	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	35とセット 第３主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
37	蓋	14.95	5.25	—	—	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	38とセット 第３主体部
							内	回転ナデ	
38	坏	12.80	5.50	—	—	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	37とセット 第３主体部
							内	回転ナデ	
39	蓋	15.10	5.10	—	—	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	40とセット 第３主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
40	坏	13.55	5.40	—	—	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	底部外面に「メ」のヘラ記号有り、39とセット 第３主体部
							内	仕上げナデ（一方）、回転ナデ	

第４表　出土土器観察表(3)

番号	器種	口径	器高	底径	腹径	ロクロ回転	調整		備考
41	蓋	14.80	5.65	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	自然釉付着、42とセット 第３主体部
							内	仕上げナデ（一方）、回転ナデ	
42	坏	(13.0)	5.10	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	41とセット 第３主体部
							内	仕上げナデ、回転ナデ	
43	壺	12.25	19.80	―	22.65	右	外	口縁部～体部上半－回転ナデ、体部下半～底部－回転ケズリ	自然釉濃く付着 第３主体部
							内	回転ナデ	
44	蓋	14.85	4.65	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	45とセット 第４主体部
							内	仕上げナデ、回転ナデ	
45	坏	12.65	4.60	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	44とセット 第４主体部
							内	仕上げナデ（二方）、回転ナデ	
46	蓋	14.30	4.45	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	内面にφ２～８㎜の焼コブ有り 47とセット 第４主体部
							内	仕上げナデ、回転ナデ	
47	坏	12.90	4.50	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	46とセット 第４主体部
							内	仕上げナデ、回転ナデ	
48	蓋	14.90	3.90	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	49とセット 第４主体部
							内	ナデ、回転ナデ	
49	坏	13.10	4.60	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	48とセット 第４主体部
							内	仕上げナデ（二方）、回転ナデ	
50	蓋	16.00	5.65	―	―	左	外	回転ケズリ（但し中央部はケズリ後ナデ）、回転ナデ	天井部外面に「＋」のヘラ記号有り 第４主体部
							内	仕上げナデ（一方）、回転ナデ	
51	坏	13.95	5.40	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	第４主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
52	高坏	11.80	12.90	8.20	―	右	外	坏部－回転ケズリ、回転ナデ？、脚部－回転ナデ	脚部は４方に長方形透しを穿つ無蓋 第４主体部
							内	坏部－回転ナデ、脚部－回転ナデ	
53	壺	13.40	19.25	―	19.30		外	口縁部－回転ナデ、体部～底部－平行タタキ→上半カキ目	第４主体部
							内	口縁部～体部上半－回転ナデ、体部下半～底部－同心円叩き目	
54	坏	12.60	4.10	―	―	左	外	回転ケズリ(1/2)、回転ナデ	蓋として使用、55とセット 第６主体部
							内	仕上げナデ（一方）、回転ナデ	
55	蓋	14.30	3.80	―	―	右	外	回転ケズリ（天井部全部）、回転ナデ	坏として使用、54とセット 第６主体部
							内	ユビオサエ、回転ナデ	
56	蓋	14.30	4.40	―	―	右	外	回転ケズリ（天井部全部）、回転ナデ	第６主体部
							内	回転ナデ	
57	蓋	14.45	4.90	―	―	左	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	第６主体部
							内	仕上げナデ、回転ナデ	
58	坏	13.40	4.30	―	―	左	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	第６主体部
							内	仕上げナデ（二方）、回転ナデ	
59	坏	12.70	4.90	―	―	右	外	回転ケズリ(1/2)、回転ナデ	第６主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
60	提瓶		残 22.40	―	21.40		外	口縁部－回転ナデ、腹面－カキ目、背面－回転ケズリ	第６主体部
							内	観察不能	

第５表　出土土器観察表(4)

番号	器種	口径	器高	底径	腹径	ロクロ回転	調整		備考
61	蓋	14.45	4.00	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	確認調査出土 第６主体部
							内	仕上げナデ、回転ナデ、同心円叩き目残	
62	蓋	14.40	4.30	―	―	右	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	自然釉付着、確認調査出土 第６主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
63	蓋	15.05	5.30	―	―	左	外	回転ケズリ(2/3)、回転ナデ	確認調査出土 第６主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
64	蓋	14.55	4.40	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	天井部外面に火だすき痕 確認調査出土 第６主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
65	蓋	19.45	5.25	―	―	左	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	赤色顔料による「―」記号有り 確認調査出土 第６主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
66	坏	12.50	4.10	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	確認調査出土 第６主体部
							内	回転ナデ	
67	坏	12.30	4.70	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	確認調査出土 第６主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
68	坏	12.30	4.60	―	―	右	外	回転ケズリ(3/4)、回転ナデ	確認調査出土 第６主体部
							内	回転ナデ、同心円叩き目残	
69	直口壺	10.30	16.00	―	19.90	―	外	口縁部～肩部回転ナデ、腹部カキ目、底部平行叩き	蓋の重ね焼き痕が見られる 確認調査出土 第６主体部
							内	口縁部～体部回転ナデ、底部同心円叩き目	
70	甕	―	61.70	―	61.60	―	外	体部～格子風叩き、底部は磨滅のため調整不明	頸部以上は欠失 第４・５主体部の西側
							内	体部～底部同心円叩き目	
71	蓋	(14.9)	5.75	―	―	右	外	つまみ部回転ナデ，回転ケズリ，回転ナデ	墳丘上層
							内	回転ナデ	
72	高坏	10.30	9.65	8.30	―	右	外	坏部回転ナデ，回転ケズリ、脚部回転ナデ	脚部に４孔、１ヶ所に円孔貫く 「‖」ヘラ記号、無蓋 第６主体部横
							内	坏部回転ナデ，同心円叩き目、脚部回転ナデ	
73	甑	―	(5.80)	―	(9.70)	―	外	肩部～腹部回転ナデ、底部ヘラケズリ	墳丘上層
							内	回転ナデ	
74	甑	―	―	―	(9.16)	―	外	回転ナデ	墳丘上層
							内	回転ナデ	
75	椀	(14.9)	(7.80)	―	―	―	外	回転ナデ	墳丘上層
							内	回転ナデ	
76	直口壺	(14.8)	(3.75)	―	―	―	外	回転ナデ	墳丘上層
							内	回転ナデ	
77	甕	(11.0)	(4.90)	―	―	―	外	回転ナデ	墳丘上層
							内	回転ナデ	
78	甕	(20.1)	(30.5)	―	(33.7)	―	外	口縁部回転ナデ、腹部平行叩き、肩部カキ目	墳丘上層
							内	口縁部回転ナデ、腹部同心円叩き	
79	甕	(35.4)	(1.44)	―	―	―	外	回転ナデ	墳丘上層
							内	回転ナデ	

第６表　第１主体部出土　管玉計測表

番　号	全　長 (mm)	直　径(mm)		孔　径(mm)		重　量 (g)	色　調
		上	下	上	下		
J- 1	26.6	11.6	11.0	2.4	1.2	6.884	暗緑色
J- 2	29.1	9.3	9.6	3.3	1.3	5.125	〃

第７表　第１主体部出土　切子玉計測表

番　号	全　長 (mm)	厚　さ(mm)			断面形状	孔　径(mm)		重　量 (g)
		上	最大部	下		上	下	
J- 3	14.8	7.1	11.3	5.8	六角形	3.9	1.4	2.358
J- 4	14.4	7.5	11.3	6.9	六角形	3.3	3.4	2.327
J- 5	18.5	7.4	13.2	7.5	六角形	3.8	3.7	4.151
J- 6	15.8	9.5	14.5	8.4	六角形	3.8	1.5	3.899
J- 7	18.1	9.1	14.9	7.9	六角形	4.6	1.7	4.882
J- 8	20.1	8.3	15.9	8.5	六角形	4.3	2.3	5.766
J- 9	23.4	9.9	18.0	9.8	八角形	3.5	1.8	9.889
J-10	18.4	8.0	13.9	8.5	七角形	3.7	1.5	4.529
J-11	16.5	7.8	15.2	8.1	六角形	3.6	1.1	4.529
J-12	16.4	9.0	14.1	8.6	六角形	3.8	1.2	3.889
J-13	17.4	8.6	12.3	7.7	六角形	3.7	1.5	3.378
J-14	15.5	8.9	13.1	7.6	六角形	5.2	1.3	3.071

第８表　第１主体部出土　小玉計測表

番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調	番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調
J-15	8.1	7.5	1.7	0.768	群青色	J-23	7.6	6.0	1.8	0.489	淡青色
J-16	6.6	5.9	1.9	0.331	〃	J-24	8.3	5.5	3.6	0.389	群青色
J-17	6.8	5.4	2.0	0.591	濃藍色	J-25	9.2	6.5	1.7	0.660	青色
J-18	8.0	5.1	2.3	0.435	青色	J-26	8.6	5.7	1.7	0.544	淡青色
J-19	9.0	6.3	1.9	0.686	群青色	J-27	6.7	5.4	1.7	0.351	群青色
J-20	8.4	7.0	1.6	0.735	青色	J-28	6.8	6.0	1.5	0.407	淡青色
J-21	7.4	5.6	1.9	0.459	濃藍色	J-29	7.0	3.4	2.4	0.247	群青色
J-22	8.8	5.6	2.2	0.536	青色						

第９表　第１主体部出土　粟玉計測表

番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調	番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調
J-30	6.3	3.4	1.1	0.179	群青色	J-40	5.0	2.9	1.8	0.080	濃藍色
J-31	5.6	3.6	1.8	0.135	濃藍色	J-41	4.9	3.3	1.5	0.090	濃藍色
J-32	5.4	3.8	1.6	0.141	〃	J-42	4.4	2.9	1.3	0.067	〃
J-33	5.6	3.8	1.8	0.133	〃	J-43	5.6	2.5	1.7	0.060	〃
J-34	5.0	3.3	1.3	0.096	〃	J-44	4.4	2.1	1.7	0.048	〃
J-35	4.7	3.4	1.1	0.100	〃	J-45	4.5	3.0	1.3	0.064	〃
J-36	5.2	3.0	1.9	0.088	〃	J-46	3.9	3.7	1.2	0.070	〃
J-37	5.1	3.4	2.1	0.107	〃	J-47	3.7	3.0	1.3	0.053	〃
J-38	5.3	2.8	1.8	0.093	〃	J-48	?	3.3	1.0	0.057	濃青色
J-39	4.8	2.7	1.1	0.077	〃						

第10表　第２主体部出土　勾玉計測表

番　号	全　長 (mm)	厚　さ (mm)	孔　径(mm) 上	孔　径(mm) 下	重　量 (g)	色　　調
J-49	28.4	7.8	3.1	1.4	5.395	半透明乳白色～黄褐色

第11表　第２主体部出土　小玉計測表

番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調	番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調
J-50	7.3	6.4	2.1	0.509	群青色	J- 81	7.1	5.9	1.5	0.494	青色
J-51	7.9	6.1	1.6	0.516	青色	J- 82	7.9	5.7	1.6	0.539	群青色
J-52	6.8	4.7	1.9	0.263	緑青色	J- 83	7.6	4.6	1.7	0.421	青色
J-53	8.3	5.6	2.4	0.534	群青色	J- 84	7.5	4.8	1.8	0.420	群青色
J-54	7.5	4.4	1.6	0.367	群青色	J- 85	6.5	4.4	1.5	0.289	青色
J-55	7.5	5.5	2.1	0.434	濃藍色	J- 86	7.7	5.7	1.6	0.505	濃藍色
J-56	7.6	3.7	1.8	0.282	群青色	J- 87	8.3	5.0	1.8	0.472	群青色
J-57	7.8	6.8	1.6	0.543	青色	J- 88	6.7	6.9	1.4	0.502	〃
J-58	7.7	6.1	2.4	0.523	濃青色	J- 89	8.3	6.1	1.8	0.572	濃青色
J-59	7.3	4.7	2.0	0.350	青色	J- 90	6.8	5.0	1.4	0.344	群青色
J-60	8.7	4.4	2.3	0.378	濃藍色	J- 91	7.1	4.7	1.5	0.348	濃藍色
J-61	8.6	5.8	2.0	0.551	群青色	J- 92	8.0	5.6	1.6	0.520	〃
J-62	7.8	3.9	1.9	0.335	濃青色	J- 93	7.7	5.1	2.0	0.437	群青色
J-63	6.6	5.1	1.7	0.277	緑青色	J- 94	7.3	4.9	1.8	0.401	群青色
J-64	7.2	5.1	1.8	0.397	濃青色	J- 95	7.8	7.1	1.4	0.639	〃
J-65	7.6	6.0	1.9	0.425	群青色	J- 96	8.6	6.3	2.8	0.552	〃
J-66	7.3	5.4	1.8	0.406	青色	J- 97	7.4	5.0	1.9	0.393	〃
J-67	8.6	6.3	2.2	0.581	群青色	J- 98	7.2	7.6	1.8	0.638	濃青色
J-68	8.3	6.2	2.0	0.543	〃	J- 99	7.7	6.0	1.7	0.471	濃藍色
J-69	8.1	5.5	2.2	0.535	〃	J-100	8.0	4.9	1.8	0.457	青色
J-70	8.8	5.0	1.8	0.554	〃	J-101	8.1	6.4	1.7	0.574	群青色
J-71	8.0	4.6	1.9	0.428	〃	J-102	7.8	5.7	1.6	0.510	〃
J-72	9.4	6.4	1.8	0.696	濃藍色	J-103	7.6	4.7	1.7	0.390	青色
J-73	7.6	5.4	1.5	0.479	群青色	J-104	6.0	4.5	1.4	0.233	群青色
J-74	8.3	5.6	1.7	0.478	〃	J-105	7.7	5.6	1.5	0.485	〃
J-75	7.8	6.4	1.9	0.482	〃	J-106	7.4	6.1	1.6	0.480	〃
J-76	7.1	6.0	1.5	0.479	濃青色	J-107	7.2	5.5	1.7	0.437	青色
J-77	7.0	6.0	1.5	0.419	〃	J-108	7.7	5.8	2.0	0.485	濃藍色
J-78	8.2	5.8	1.6	0.532	群青色	J-109	8.0	5.2	1.9	0.457	青色
J-79	8.2	4.2	1.9	0.347	濃藍色	J-110	7.5	6.1	1.2	0.511	群青色
J-80	7.8	5.6	2.4	0.437	群青色	J-111	8.0	5.9	1.7	0.547	濃青色

第12表　第２主体部出土　粟玉計測表

番　号	直径(㎜)	厚さ(㎜)	孔径(㎜)	重量(g)	色　調	番　号	直径(㎜)	厚さ(㎜)	孔径(㎜)	重量(g)	色　調
J-112	5.0	5.4	1.2	0.213	薄青緑	J-144	4.0	3.1	1.5	0.072	青色
J-113	5.6	4.3	1.5	0.179	淡灰青	J-145	4.7	2.8	1.2	0.061	〃
J-114	4.8	3.2	1.5	0.089	群青色	J-146	4.3	2.7	1.2	0.070	薄青緑
J-115	4.7	3.0	1.2	0.089	〃	J-147	4.2	2.7	1.3	0.069	青色
J-116	4.5	2.6	1.4	0.072	淡青色	J-148	4.3	2.6	1.5	0.067	〃
J-117	4.3	3.0	1.1	0.085	青色	J-149	4.2	2.5	1.5	0.051	〃
J-118	4.4	2.5	1.4	0.064	淡青色	J-150	4.1	2.2	1.5	0.048	〃
J-119	4.3	2.5	1.2	0.064	〃	J-151	3.9	2.7	1.3	0.053	〃
J-120	4.5	3.4	1.5	0.096	薄青緑	J-152	4.0	3.1	1.0	0.075	群青色
J-121	5.1	3.3	1.4	0.121	群青色	J-153	4.5	2.4	1.4	0.058	青色
J-122	4.9	3.7	1.4	0.123	〃	J-154	4.3	2.4	1.2	0.067	〃
J-123	4.7	3.1	1.2	0.098	〃	J-155	3.8	3.0	1.3	0.053	〃
J-124	5.1	3.1	1.5	0.110	青色	J-156	4.3	2.3	2.1	0.058	薄青緑
J-125	4.7	3.3	1.1	0.099	群青色	J-157	4.3	3.2	1.6	0.072	〃
J-126	4.5	3.8	1.0	0.112	〃	J-158	4.4	2.6	1.1	0.073	薄浅葱
J-127	4.9	3.7	1.2	0.110	〃	J-159	3.3	3.3	1.2	0.052	淡灰青
J-128	4.8	2.9	1.2	0.106	〃	J-160	3.9	2.8	1.2	0.056	薄浅葱
J-129	4.8	2.8	1.4	0.096	〃	J-161	3.9	2.7	1.6	0.043	薄青緑
J-130	5.1	2.6	1.4	0.092	〃	J-162	4.0	2.8	1.6	0.062	〃
J-131	5.0	3.2	1.1	0.100	濃青色	J-163	3.8	2.4	1.2	0.051	〃
J-132	4.8	3.2	1.1	0.120	〃	J-164	3.9	2.3	1.3	0.047	〃
J-133	4.9	3.1	1.4	0.099	群青色	J-165	3.9	2.6	1.1	0.052	群青色
J-134	4.4	3.4	0.9	0.103	〃	J-166	3.7	3.0	1.2	0.059	青色
J-135	4.8	3.4	1.5	0.102	青色	J-167	3.4	2.0	1.1	0.030	〃
J-136	4.5	3.0	0.9	0.088	群青色	J-168	3.6	2.2	1.2	0.039	群青色
J-137	4.8	2.8	1.4	0.079	〃	J-169	3.6	2.3	1.6	0.042	青色
J-138	4.7	2.6	1.5	0.063	〃	J-170	2.9	2.3	1.3	0.027	淡青色
J-139	4.7	2.8	1.2	0.086	青色	J-171	3.3	2.5	1.2	0.032	薄青緑
J-140	4.4	2.8	1.5	0.068	〃	J-172	3.1	2.6	1.0	0.034	黄色
J-141	4.2	2.6	1.1	0.058	〃	J-173	2.8	2.9	1.0	0.027	〃
J-142	4.0	2.5	1.2	0.055	群青色	J-174	3.0	1.8	0.8	0.020	〃
J-143	4.2	3.1	1.3	0.066	淡灰青						

第13表　第３主体部出土　管玉計測表

番　号	全　長 (mm)	直　径(mm)		孔　径(mm)		重　量 (g)	色　調
		上	下	上	下		
J-175	18.8	6.9	6.8	2.3	1.0	1.800	暗緑色
J-176	18.4	8.0	7.9	2.8	1.5	2.238	〃
J-177	19.9	6.8	7.5	3.2	1.0	1.915	〃
J-178	17.7	7.2	7.2	2.3	1.3	1.769	〃
J-179	17.4	7.0	7.1	2.8	1.1	1.668	〃
J-180	21.7	8.0	8.1	3.3	1.5	2.710	〃
J-181	22.3	7.2	6.9	2.4	0.9	2.089	〃
J-182	19.7	6.8	7.1	2.3	1.0	1.970	〃
J-183	20.0	7.7	8.0	2.6	1.2	2.328	〃
J-184	28.1	9.2	8.1	3.7	0.8	4.021	〃
J-185	22.8	6.5	6.8	2.8	0.9	2.087	〃
J-186	12.4	7.2	7.0	3.9	3.9	0.795	淡青緑色
J-187	18.8	7.1	7.0	2.0	1.8	0.982	淡明緑色

第14表　第３主体部出土　小玉計測表

番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調	番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調
J-188	9.1	5.8	1.8	0.614	群青色	J-191	8.7	6.8	1.9	0.727	群青色
J-189	9.1	6.7	2.1	0.735	濃青色	J-192	8.1	6.1	2.1	0.576	〃
J-190	9.0	6.8	2.0	0.651	群青色	J-193	(6.2)	6.1	1.7	(0.315)	青色

第15表　第３主体部出土　粟玉計測表

番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調	番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調
J-194	5.8	4.8	1.4	0.254	薄青緑	J-198	3.8	5.3	1.0	0.108	黄色
J-195	6.2	3.8	2.0	0.180	〃	J-199	(4.7)	2.8	(1.5)	(0.046)	淡青色
J-196	5.1	4.0	2.2	0.142	〃	J-200	3.6	2.2	1.2	0.037	〃
J-197	5.6	3.0	1.9	0.109	群青色	J-201	3.8	3.3	1.0	0.051	〃

付載　　大池７号墳出土ガラスの分析

―第２主体部出土の青～青紺色ガラス―

奈良国立文化財研究所　肥塚隆保

はじめに

古代のガラスは、これまでの調査で弥生時代、古墳時代、飛鳥・奈良時代には材質が大きく変遷することが明らかになってきた。

古墳時代のガラスはカリガラスやソーダ石灰ガラスなどアルカリ珪酸塩ガラスに代表されるものである。しかし、６世紀の後半頃から、材質の変化が再び起こっている。つまり弥生時代の後半頃に一旦途絶えた鉛珪酸塩ガラスが再び出現し、かわって従来から流通していたカリガラスが途絶える時期でもある。以上の意味からして、この時期のガラス遺物の材質を詳しく調べることにより、当時におけるガラス遺物の流通をより詳細にできるものである。

ここでは第２主体部出土のガラスについて分析結果と若干得られた知見について報告する。

分析の方法

ガラス遺物の分布には、微小領域エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析法を利用した。ガラス遺物はその表面が風化して従来の化学組成を示さないので、遺物の形状を損なわない程度の微小な領域の風化層を超音波研磨装置により除去した後、測定した（表－１）。

測定元素はNa～Uまでの元素で、複数の標準試料をもちいてFP法により定量した。なお、この定量値は検出された元素を酸化物に計算して規格化したものである。また、検出限界濃度は各元素によって異なるが、金属元素でほぼ20～50ppm である。

蛍光Ｘ線測定条件

Ｘ線管：Mo（モリブデン）	励起電圧：20Kv/50Kvp	電流：4.5/0.3mA
検出器：Si-Li半導体検出器	計数時間：500～2000秒	測定条件：真空中

分析試料

今回、分析の対象としたのは、第２主体部出土の青～青紺色ガラス小玉18点（J50～ J67）である。肉眼的な色調は、ほぼ同様で青ないし青紺色透明である。風化の程度はほぼ同程度で表面はやや半透明状を呈する。参考のため表面部分のＸ線回折を試みたが、いずれも非晶質物質で結晶物質は存在しない。また、内部の新鮮な部分に比べていずれも風化部分は SiO_2 含有量が高く、Na_2O 成分は著しく減少していた。

結果と考察

今回測定した試料はいずれも Na_2O を融剤とするソーダ石灰ガラスに分類されるものであり、J50から J67に関しては K_2O-SiO_2 系カリガラスは検出しなかった。しかし他遺跡の例から考慮すると全点数の測定をまたなければ結論づけることはできない。

今回のガラス小玉の主な成分の含有量は、58.6-66.4wt% SiO_2：3.2-10.7wt% Al_2O_3：14.1-20.0wt% Na_2O：2.1-4.4wt% K_2O：0.2-6.9wt% MgO：4.8-7.0wt% CaO である。

以上の結果は、Al_2O_3 含有量が多いソーダ石灰ガラスと、Al_2O_3 含有量の少ないソーダ石灰ガラスが存在することを示している。従来のデータでは、Al_2O_3 含有量の少ないソーダ石灰ガラスは、Al_2O_3 含有量が多いソーダ石灰ガラスに比べて、CaO 含有量が多い傾向が認められる。今回の各試料についてこれらの関係を散布図にプロットしたものが図-1である。この図で示されたように明らかに2点の試料は他のグループとは異なっている。

古代のソーダ石灰ガラスは、大別すると Al_2O_3 含有量の少ない Na_2O-CaO-SiO_2 と Al_2O_3 含有量の多い Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2 系がある。日本では、例外的な数点を除けば、この2つの異なるタイプのソーダ石灰ガラスは3世紀後半頃には流通していたものである。

Al_2O_3 含有量の少ない Na2O-CaO-SiO2 系は、地中海周辺諸国や西アジアで発達した“西方のガラス”であり、Al_2O_3 含有量の多い Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2 系は、西方のガラスになくアジアで発達したガラスであると言われており、その起源はインドあたりであろうと推定されている。Na_2O-CaO-SiO_2 系ガラスの製法がいつごろアジアに伝わったかは、現在のところ明らかでないので、今回検出した Al_2O_3 含有量の少ない Na_2O-CaO-SiO_2 系ガラスが西方で製造されたものかどうかについてはわからない。これは、この時期には中国などでもソーダ石灰ガラスが製造された可能性があるからである。

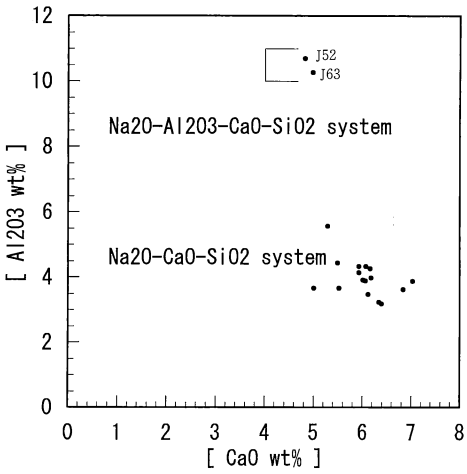


図1　各試料に含有する CaO と Al_2O_3

いっぽう、古代ガラスの着色剤は単純に言えば、金属イオンによっておこなわれている。今回の試料はいずれも青～青紺色透明であり、Co0 イオンによる着色であると推定したが2点の Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2 系ガラスからは Co0 含有量は検出限界以下で、Na_2O-CaO-SiO_2 系にみられる Co0 イオンによる着色法（今回の試料からは、ほぼ0.1～0.04wt%程度検出している）とは異なっていることを示している。興味あることは、Fe_2O_3 含有量はいずれのタイプも多いが（ほぼ1.4～2.2wt%）、Cu0 含有量は高アルミナ含有タイプのものが多く、何等かのかたち

で着色に関与しているものと考えられる。(図－2)。また、従来の調査で、6世紀中～後半に流通したCoイオンによる青紺色Na_2O-CaO-SiO_2系ガラス小玉に含有するMnO量が多いタイプのものが存在することが明らかになってきたが今回の試料は、MnO量が少ない（今回の試料はいずれも0.35wt％以下）タイプのものであることが判明した。

今回の各試料について、微量成分の検討も加えた。今回は、Rb_2O_3、Sr_2O、ZrO_2、について調べた。特にSr_2OとZrO_2についてはNa_2O-CaO-SiO_2系ガラス小玉とNa_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系ガラス小玉で顕著な差が認められた。Na_2O-CaO-SiO_2系ガラスはCo0の含有量を反映してSr_2O含有量がNa_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系ガラスに比べて多く含有している。いっぽう、ZrO_2含有量は、Na_2O-CaO-SiO_2系ガラスに比してNa_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系ガラスのほうが数倍含有することが明らかになり（図－3)、ガラス原料自身がまったく異なっているものと考えられた。一般的には玄武岩などの塩基性岩より花崗岩などの酸性岩のほうがZrO_2含有量は高く、これらの岩石に起源をもつ物質がNa_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系ガラスの原料に関与していたのかも知れないが、今後詳しく調査する必要もある。

その他の酸化物について特徴的なことは、今回のNa_2O-CaO-SiO_2系ガラスに含有するTiO_2含有量は0.12～0.27wt％であるのに対して、Na_2O-Al_2O3-CaO-SiO_2系ガラス2点はそれぞれ0.35、0.36wt％とやや多く含有すること、さらにMgO含有量は1.0wt％と少ない。いっぽう、いずれのガラス小玉からも微量のPbOが検出された。Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系ガラス2点はそれぞれ0.10wt％であるのに対して、Na_2O-CaO-SiO_2系ガラスに含有するPbOは0.06～0.52wt％と大きくばらついている。

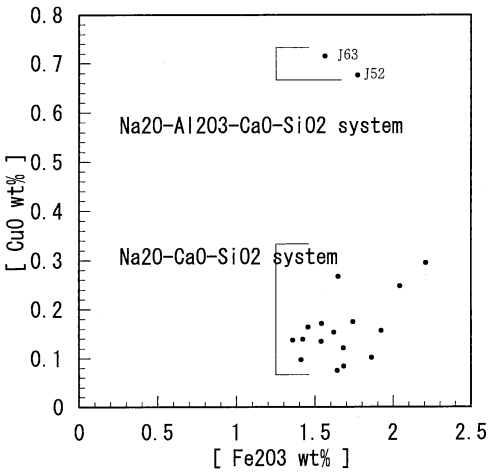


図2　各試料に含有するFe_2O_3とCuO

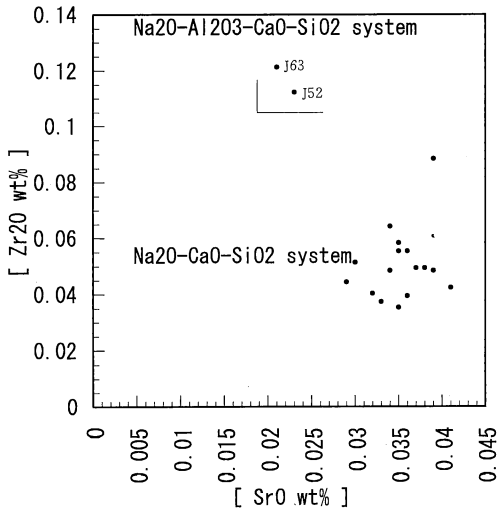


図3　各試料に含有するSrOとZrO_2

Na_2O-CaO-SiO_2 系ガラスについて、PbO と各金属元素との相関を調べた結果、CuO と最も相関関係を有することが明らかになった。（図－４）。ただし、Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2 系ガラス２点は図－４で示された相関からまったくはずれる。

なお、ガラスの諸物性（密度、屈折率、平均線膨張係数、縦断性率）については、アッペンの加成性因子をもちいて理論計算によりもとめたもので一覧表に掲げておく（表－１）。

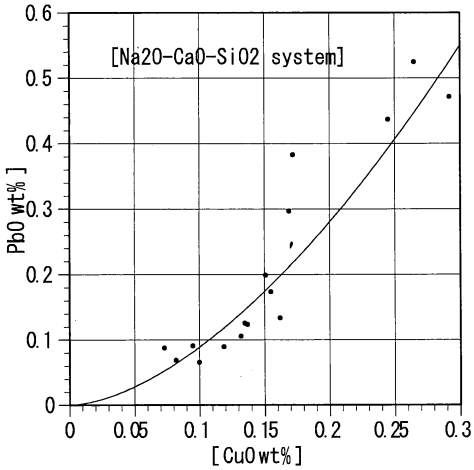


図４　Na_2O-CaO-SiO_2 系ガラスに含有する CuO と PbO の関係

表－１　各ガラス小玉の諸物性について

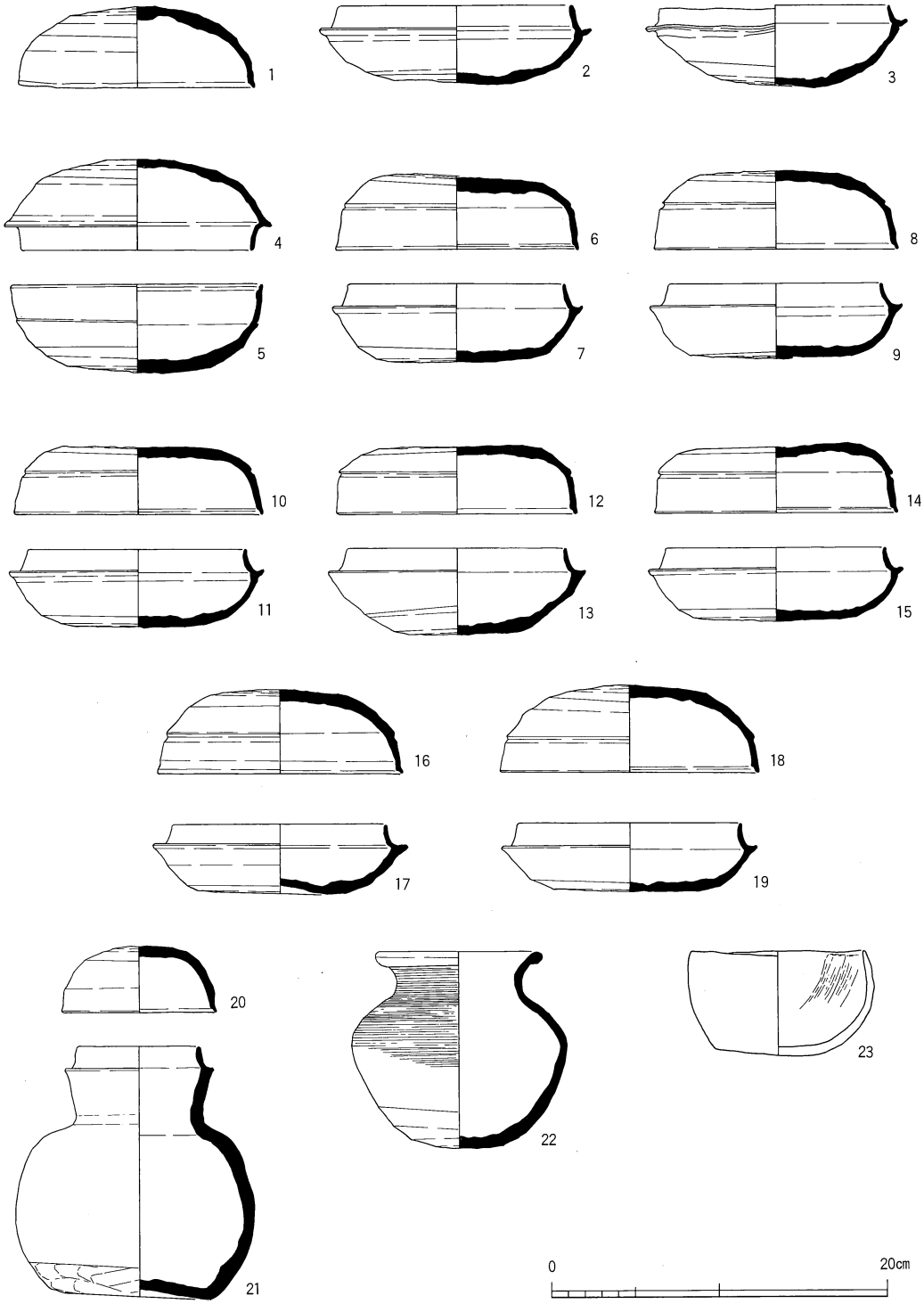
試料	密度	屈折率	平均線膨張係数 (10^{-7}/℃)	縦断性率 (103kg/mm^2)
Ｊ－５０	２．４２	１．５１２	１２０．０	６．８８
Ｊ－５１	２．４２	１．５０５	１０６．５	６．９０
Ｊ－５２	２．４６	１．４９６	１１６．９	６．９０
Ｊ－５３	２．４５	１．５１０	１１８．５	６．９３
Ｊ－５４	２．４３	１．５０６	１１９．０	６．８７
Ｊ－５５	２．４５	１．４９３	１２２．０	６．７４
Ｊ－５６	２．３９	１．５０６	１１１．３	６．９３
Ｊ－５７	２．４３	１．５０８	１２２．８	６．８４
Ｊ－５８	２．４１	１．５１１	１１６．０	６．９５
Ｊ－５９	２．４３	１．５１０	１１６．６	６．９２
Ｊ－６０	２．４３	１．４９８	１１７．０	６．８２
Ｊ－６１	２．４１	１．５１０	１１５．９	６．８９
Ｊ－６２	２．４２	１．５１１	１１８．６	６．８８
Ｊ－６３	２．４２	１．４９１	１０１．３	６．９６
Ｊ－６４	２．４４	１．５０９	１１７．７	６．８８
Ｊ－６５	４．２０	１．５０７	１０１．１	６．９８
Ｊ－６６	２．４６	１．５１７	１２１．５	６．９１
Ｊ－６７	２．４３	１．５０９	１１６．７	６．８９

表－2　大池7号墳第2主体部出土小玉分析データ

※（－）は検出限界以下を示す　　（重量％）

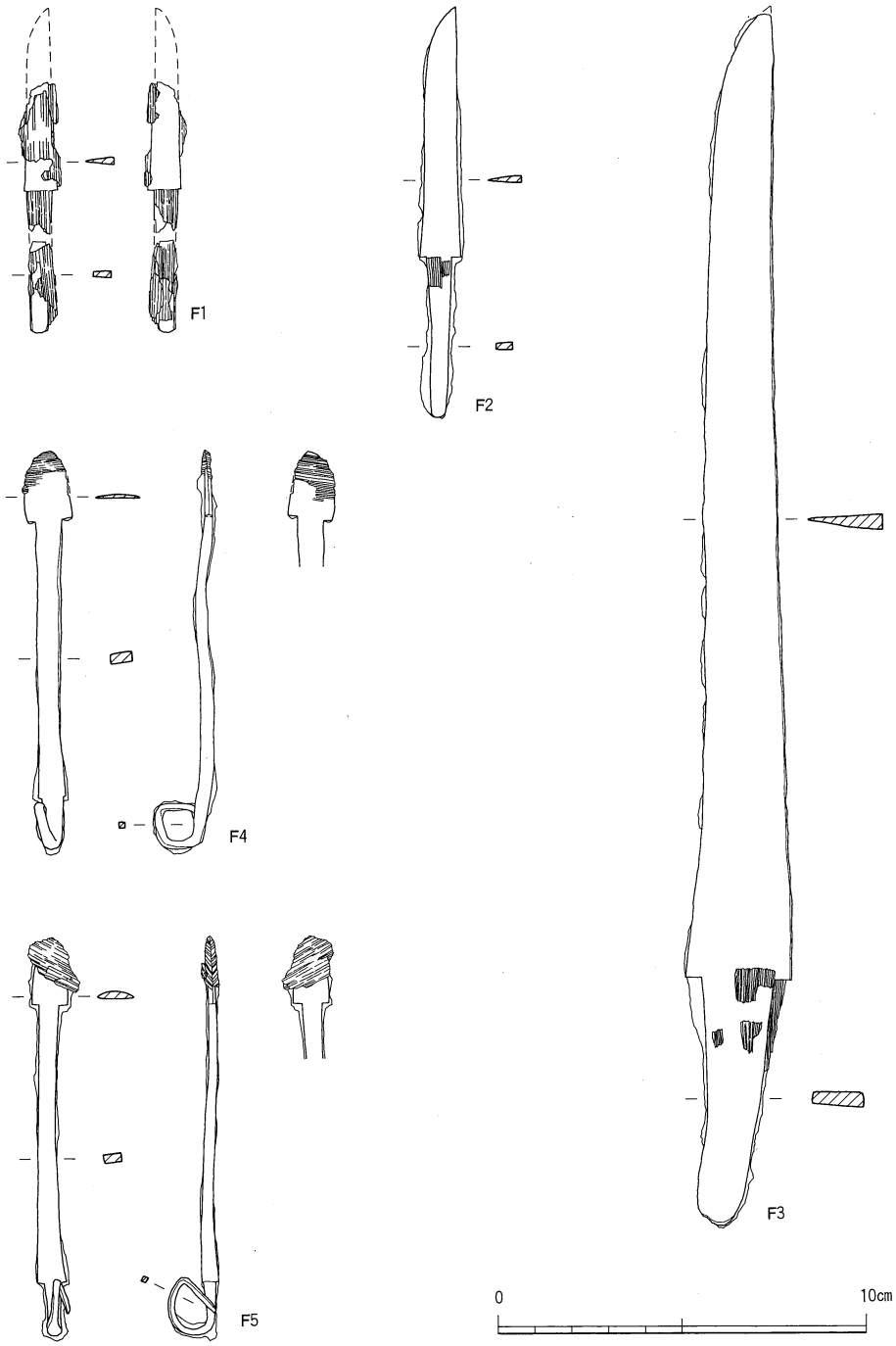
No.	SiO_2	Al_2O_3	Na_2O	K_2O	MgO	CaO	TiO_2	Fe_2O_3	CuO	MnO	CoO	PbO
J-50	62.5	3.2	17.6	4.1	4.2	6.3	0.16	1.42	0.14	0.15	0.005	0.12
J-51	66.4	3.6	16.0	2.8	4.0	5.0	0.24	1.64	0.07	0.06	0.002	0.09
J-52	59.0	10.7	17.8	3.5	1.1	4.8	0.35	1.77	0.68	0.23	——	0.10
J-53	60.6	4.3	18.0	2.9	5.6	5.9	0.14	1.92	0.16	0.16	0.048	0.17
J-54	63.2	3.9	19.2	2.1	2.9	6.0	0.20	1.62	0.15	0.32	0.043	0.20
J-55	63.6	4.4	20.0	2.5	0.2	5.5	0.19	2.21	0.29	0.33	0.155	0.47
J-56	64.6	3.6	16.2	3.1	3.3	6.8	0.15	1.54	0.13	0.35	0.017	0.10
J-57	62.4	3.4	18.8	3.7	3.3	6.1	0.13	1.68	0.08	0.27	0.007	0.07
J-58	61.6	3.8	15.9	4.4	4.9	7.0	0.17	1.68	0.12	0.22	0.040	0.09
J-59	62.2	4.2	17.4	3.3	4.4	6.2	0.22	1.86	0.10	0.08	0.005	0.06
J-60	64.2	4.0	18.3	2.8	1.2	6.2	0.20	2.04	0.25	0.28	0.130	0.44
J-61	63.4	3.9	17.1	3.7	3.9	6.1	0.12	1.46	0.16	0.07	0.058	0.13
J-62	62.7	3.2	17.2	4.1	4.0	6.4	0.18	1.54	0.17	0.13	0.029	0.30
J-63	63.1	10.2	14.1	3.6	0.9	5.0	0.36	1.56	0.71	0.23	——	0.10
J-64	62.2	4.1	17.4	3.7	3.8	5.9	0.25	1.65	0.27	0.09	0.048	0.52
J-65	66.3	3.6	14.5	2.4	5.7	5.5	0.13	1.36	0.14	0.21	0.021	0.12
J-66	58.6	5.5	18.7	3.0	6.9	5.3	0.11	1.41	0.10	0.15	0.016	0.09
J-67	62.3	4.3	16.7	4.2	3.6	6.1	0.27	1.74	0.17	0.08	0.047	0.38

図版1

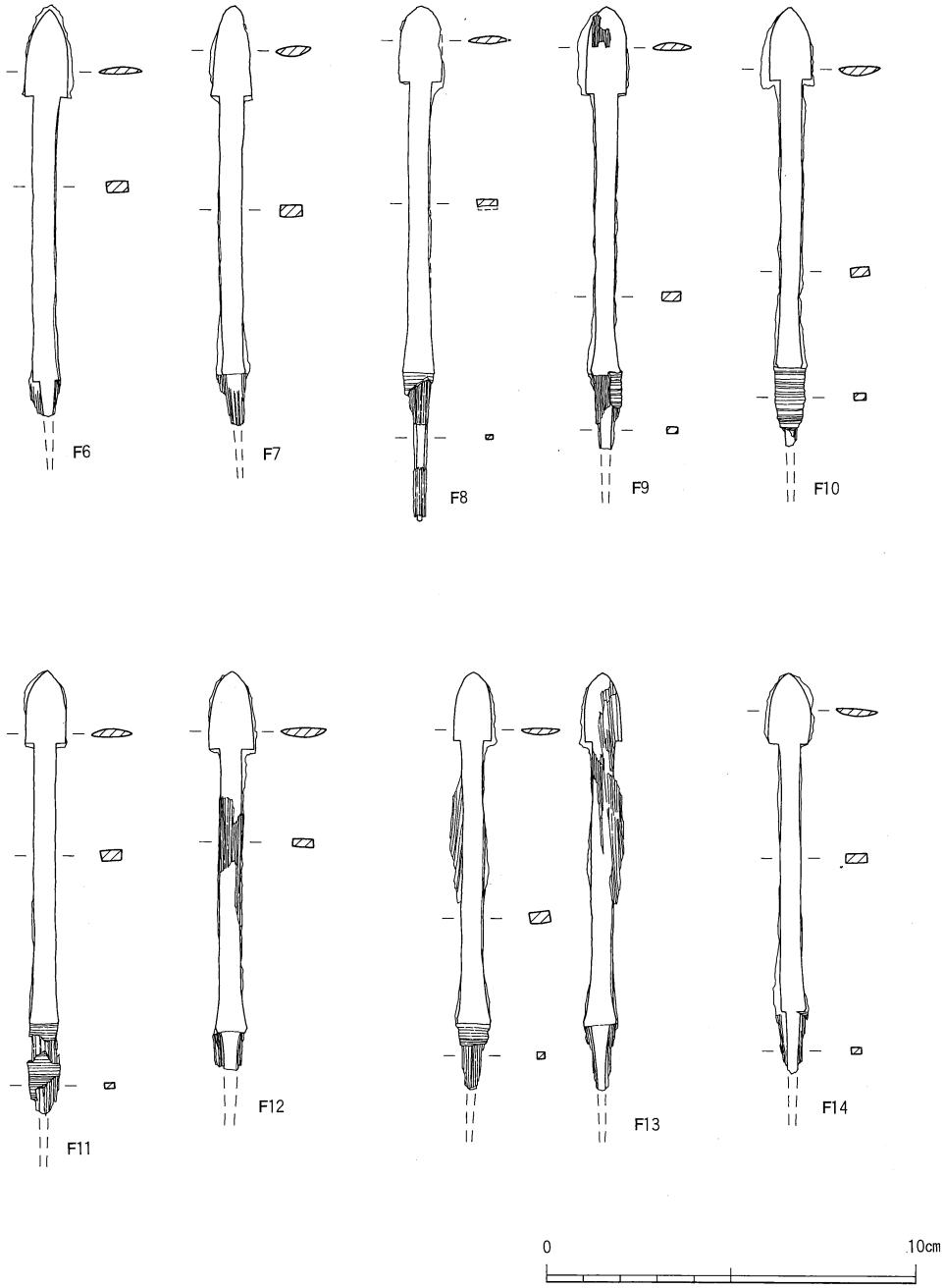


第1主体部出土土器

図版2

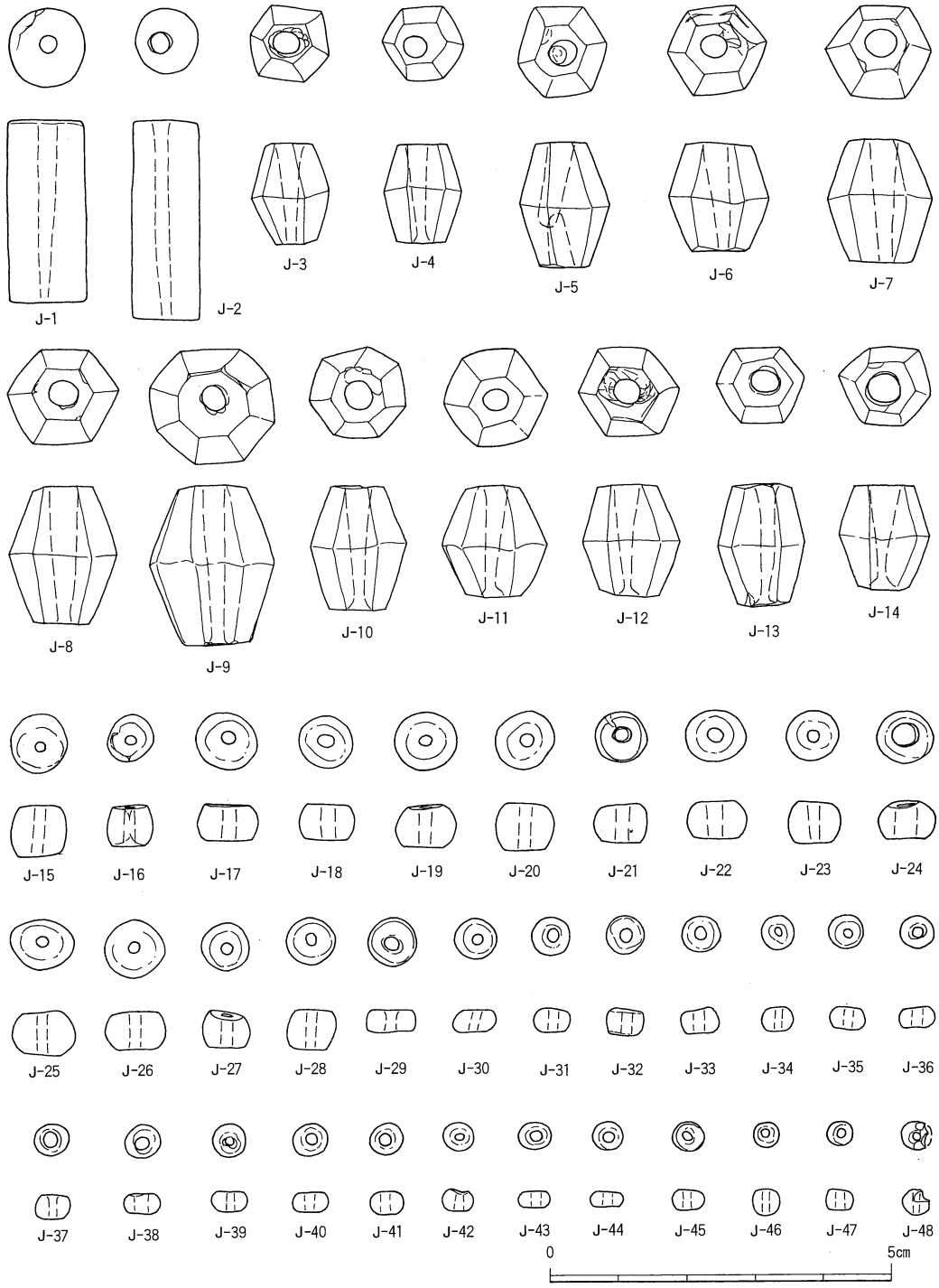


第１主体部出土金属器(1)

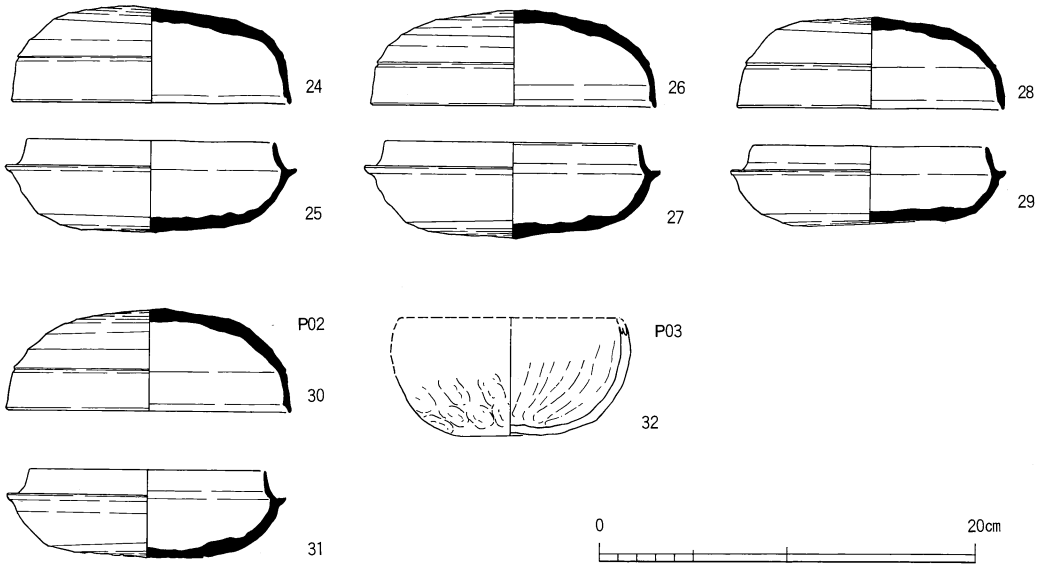


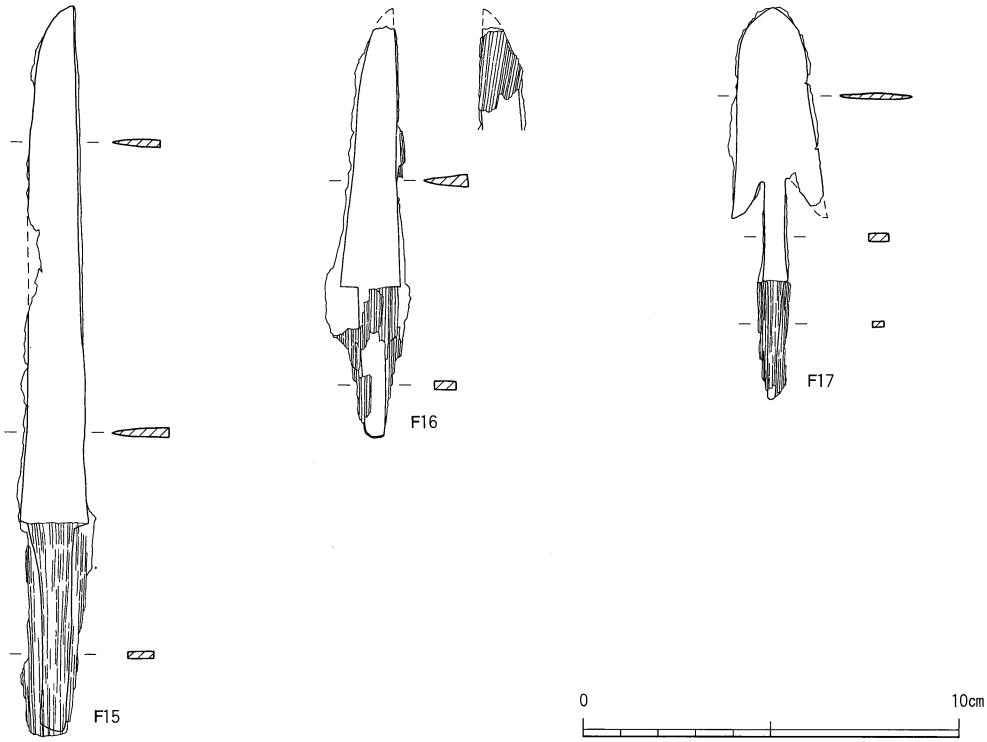
第１主体部出土金属器(2)

図版4



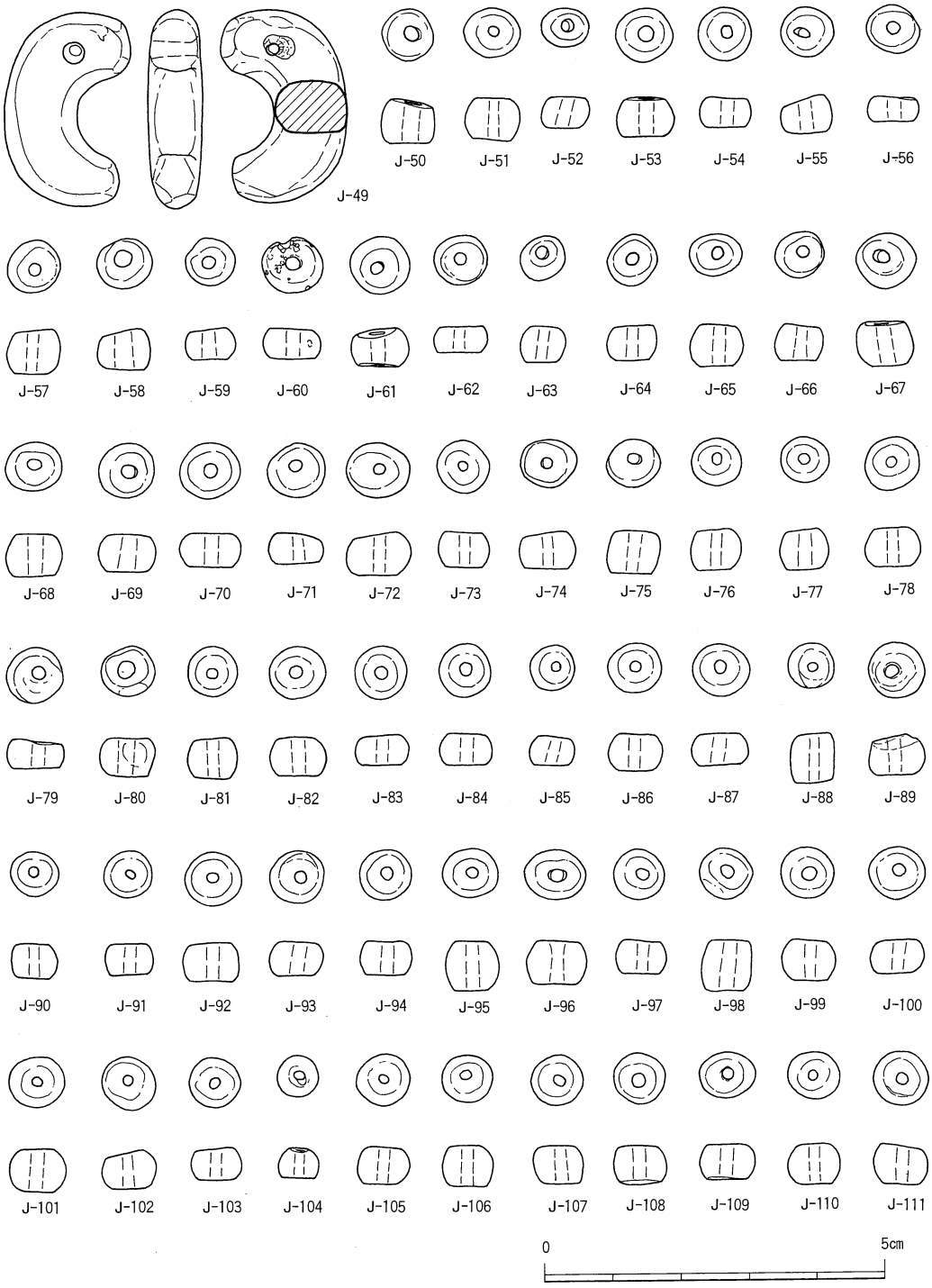
第1主体部出土玉類



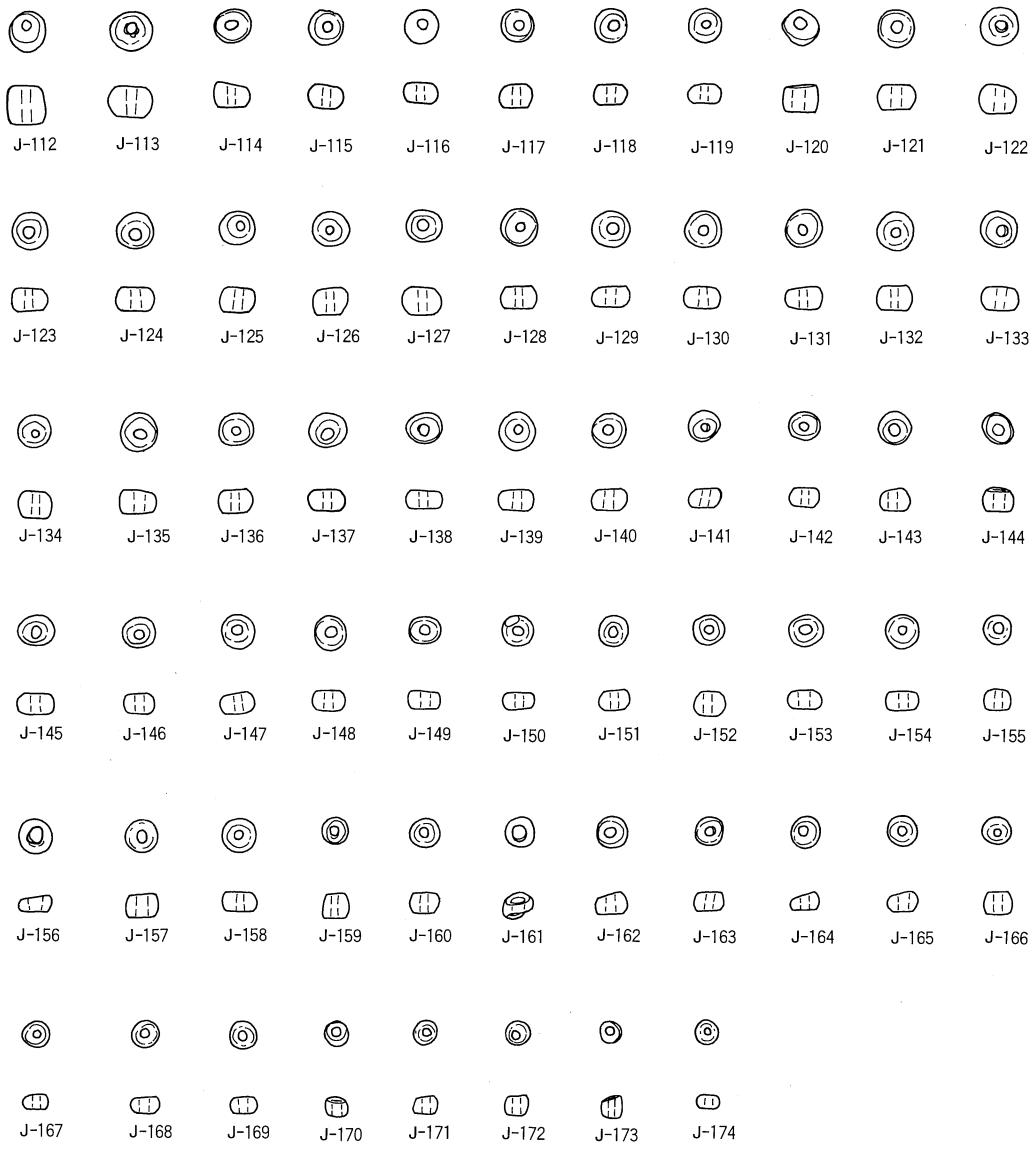


上・第２主体部出土土器　下・第２主体部出土金属器

図版6

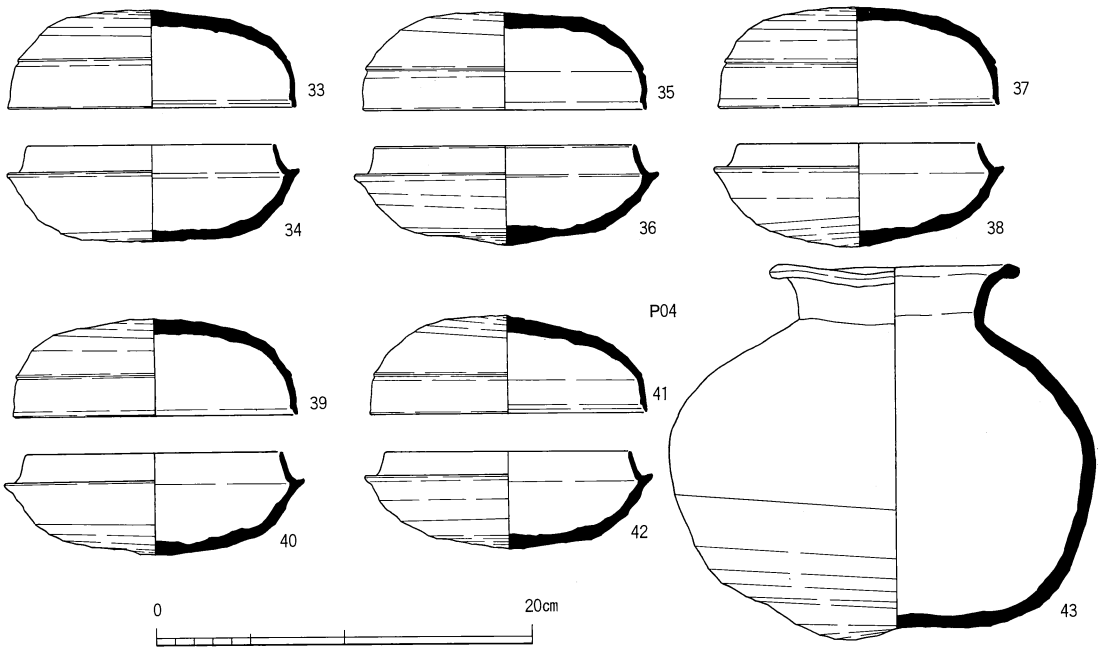


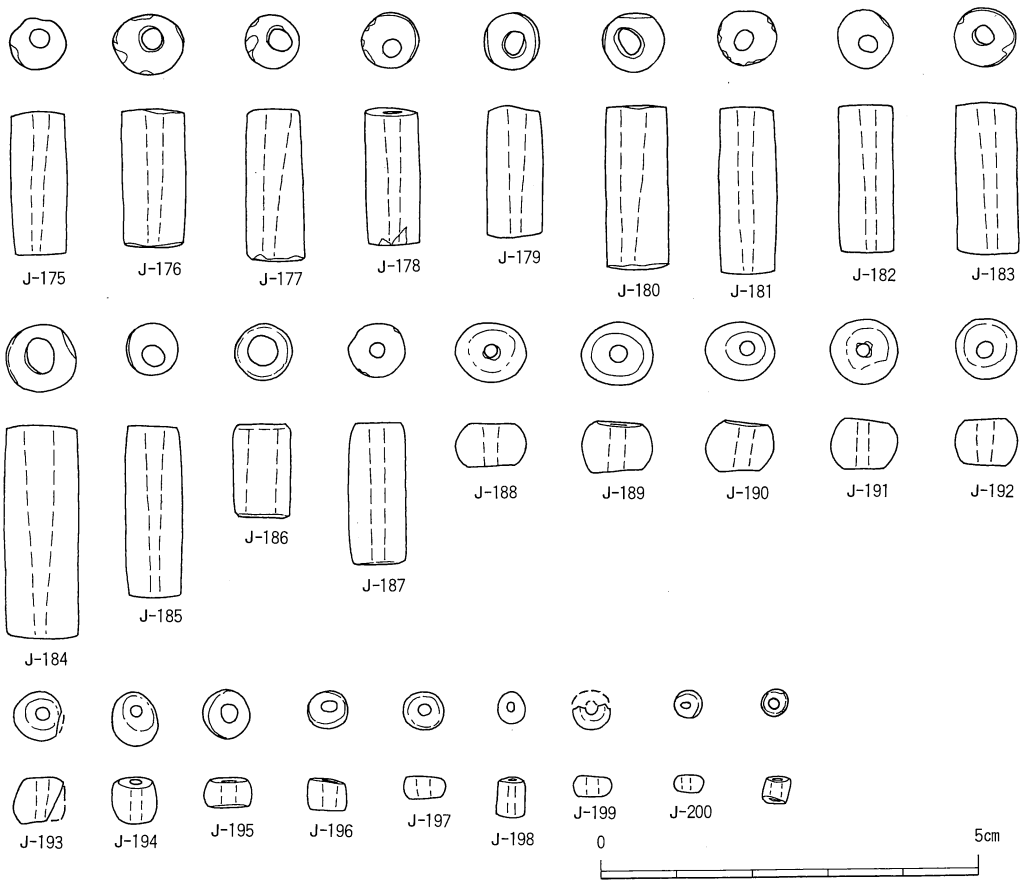
第2主体部出土玉類(1)


J-112
J-113
J-114
J-115
J-116
J-117
J-118
J-119
J-120
J-121
J-122
J-123
J-124
J-125
J-126
J-127
J-128
J-129
J-130
J-131
J-132
J-133
J-134
J-135
J-136
J-137
J-138
J-139
J-140
J-141
J-142
J-143
J-144
J-145
J-146
J-147
J-148
J-149
J-150
J-151
J-152
J-153
J-154
J-155
J-156
J-157
J-158
J-159
J-160
J-161
J-162
J-163
J-164
J-165
J-166
J-167
J-168
J-169
J-170
J-171
J-172
J-173
J-174
0
5cm

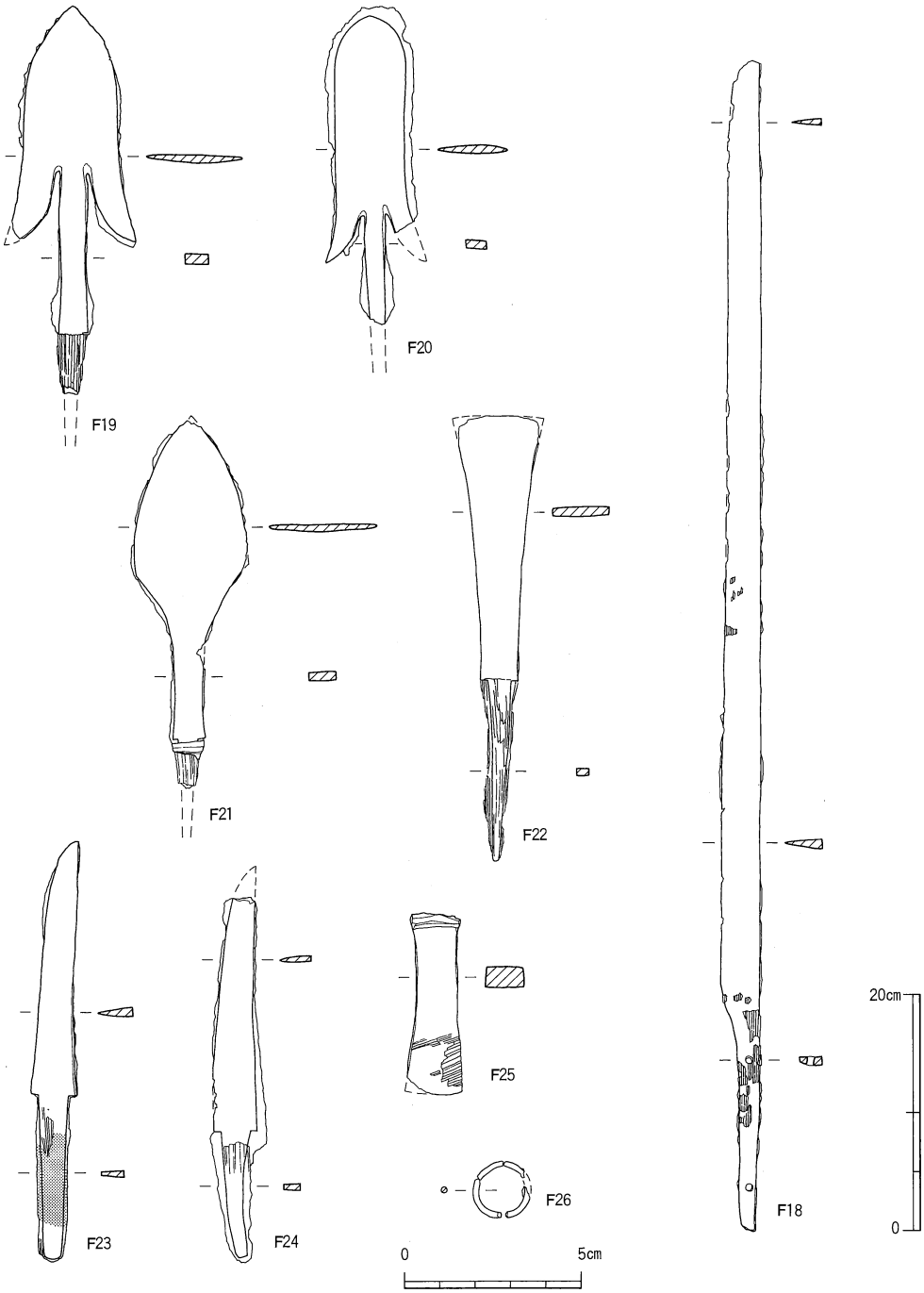
第2主体部出土玉類(2)

図版8



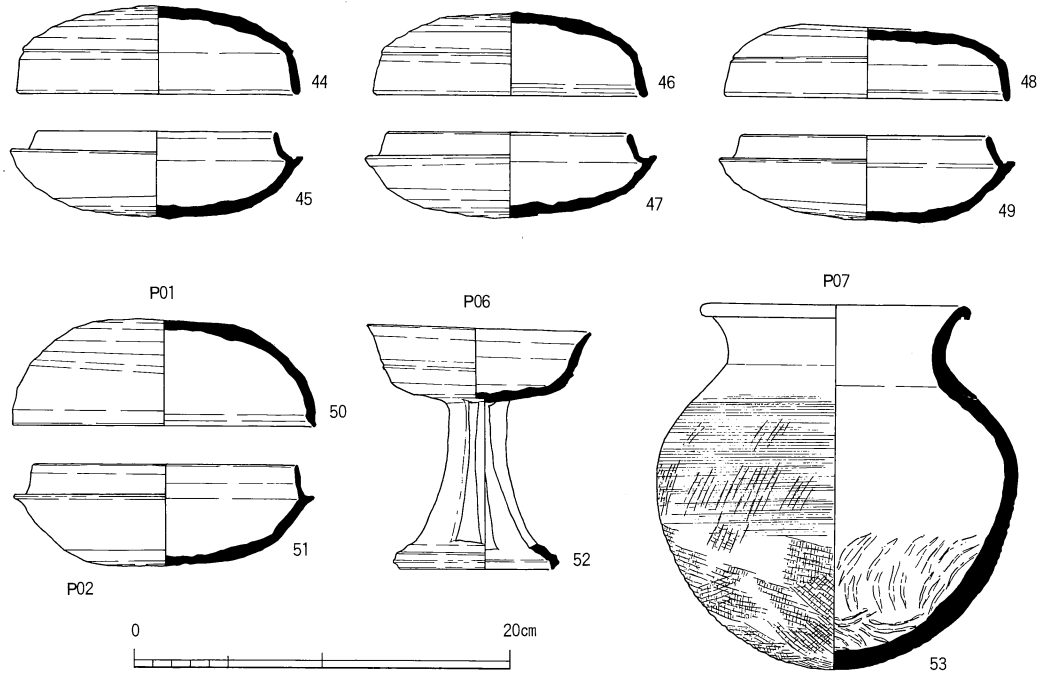


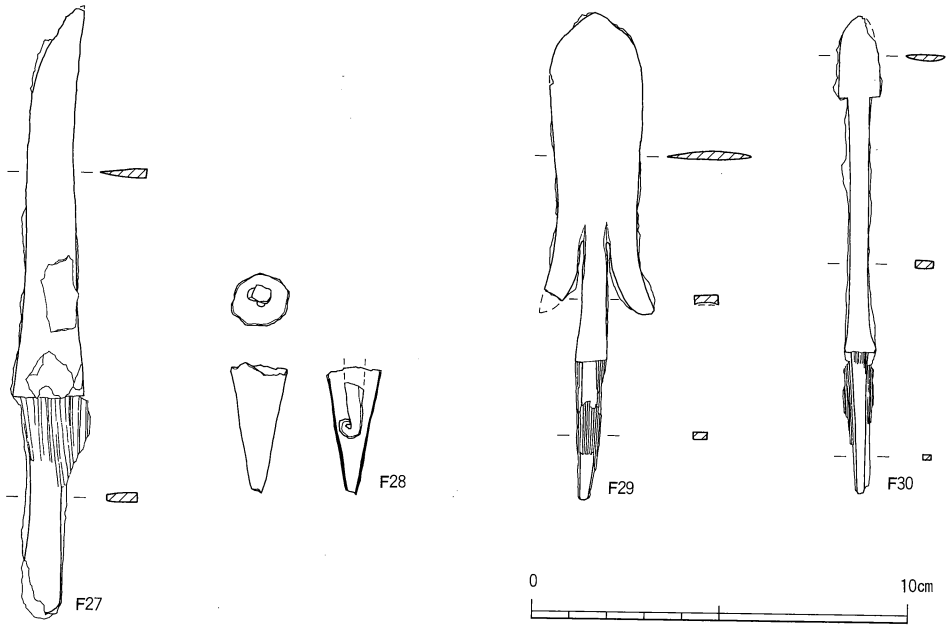
上・第3主体部出土土器　下・第3主体部出土玉類



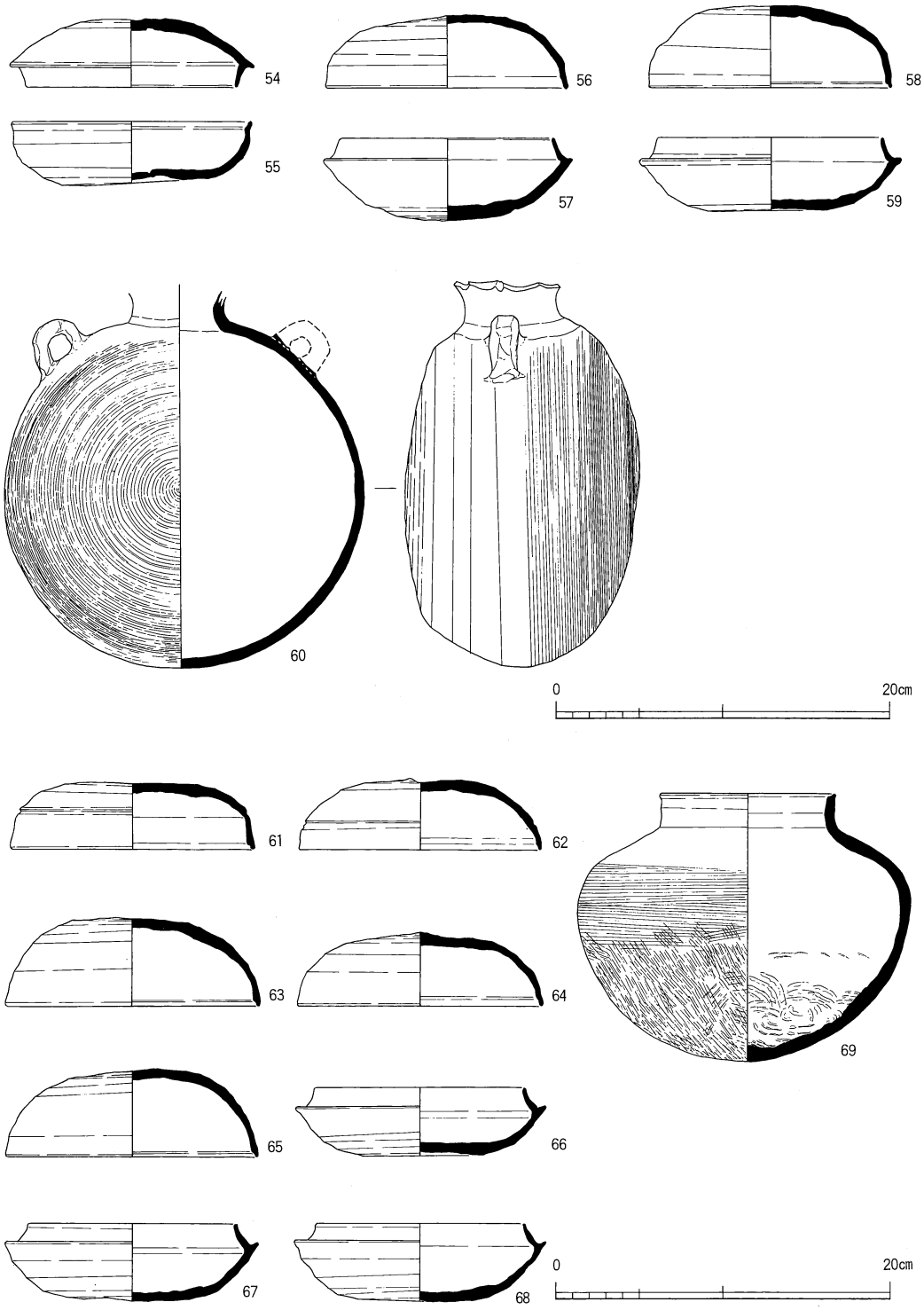
第3主体部出土金属器

図版10



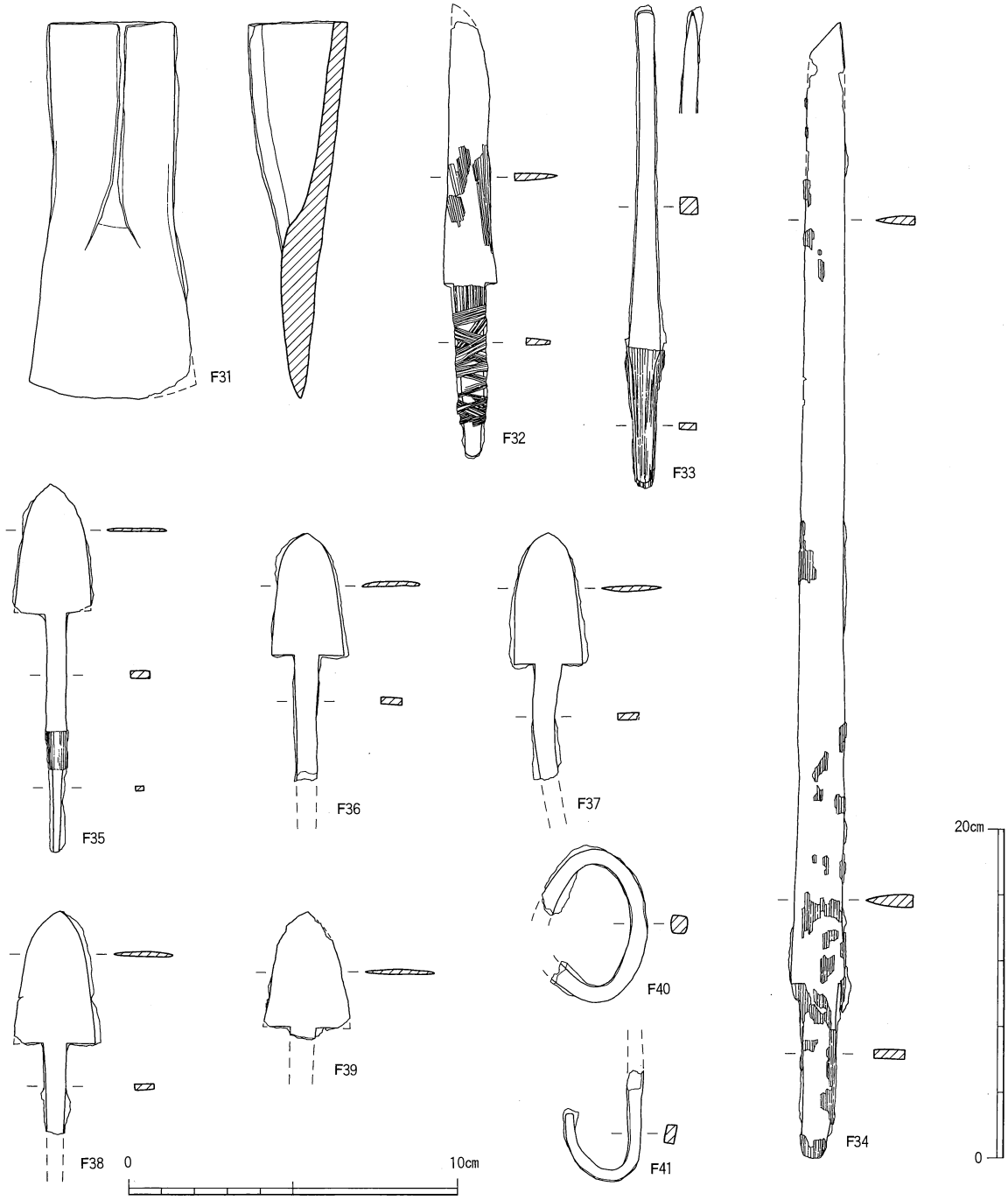


上・第4主体部出土土器 下・第4・第5主体部出土金属器

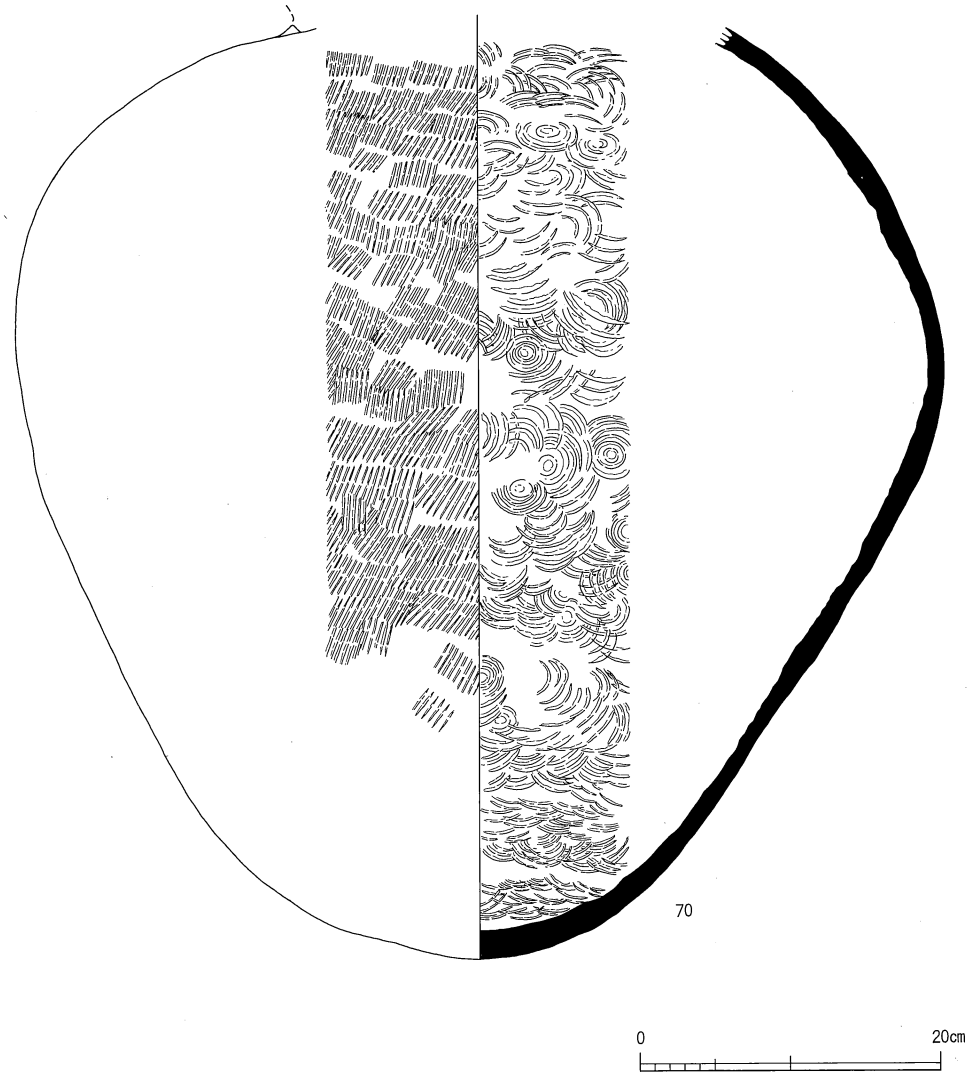


第6主体部出土土器

図版12

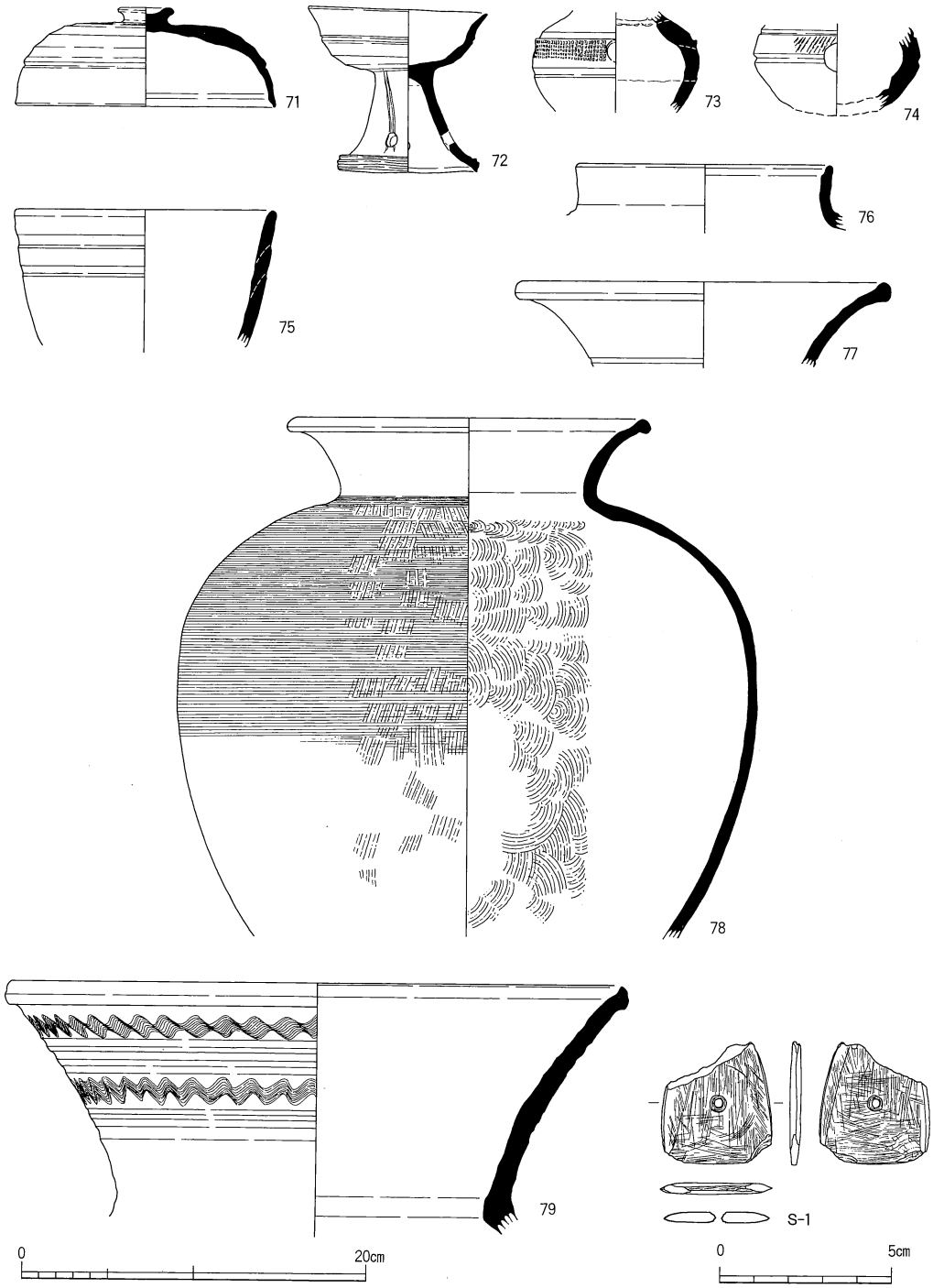


第6主体部出土金属器



第４主体部西側出土の甕

図版14



墳丘上面出土の遺物

図版15

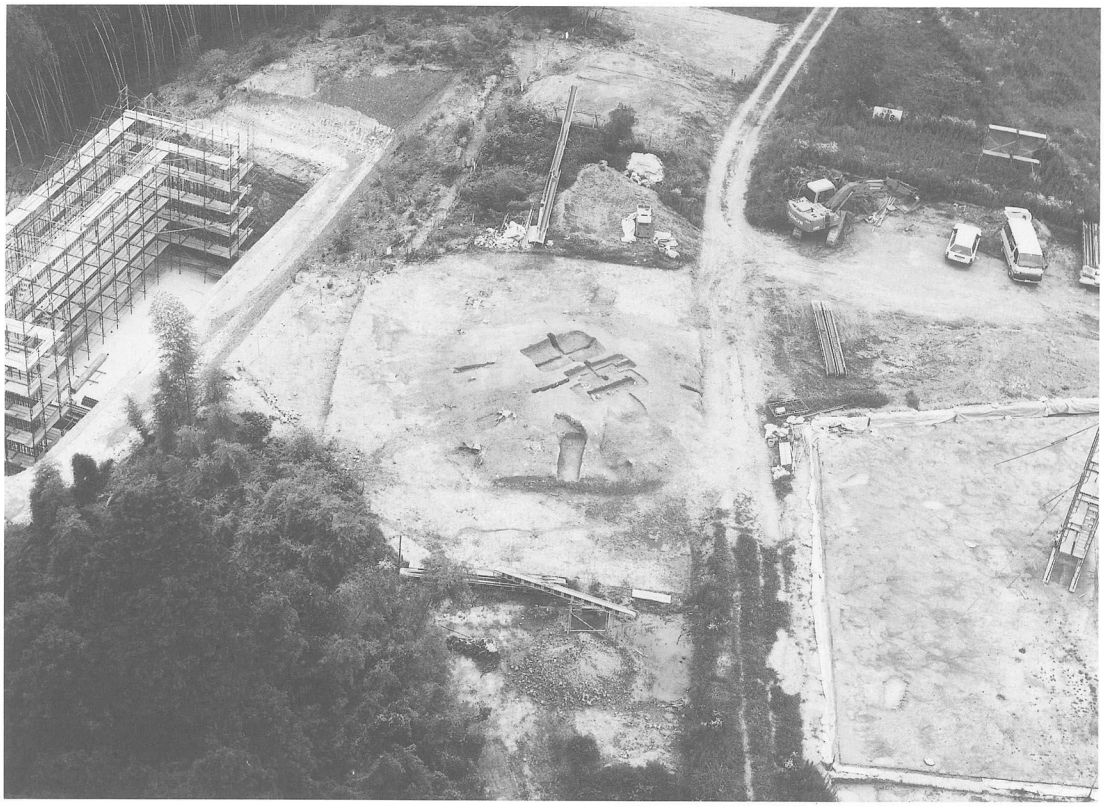
大池７号墳の位置（国土地理院撮影）

図版16　遠景

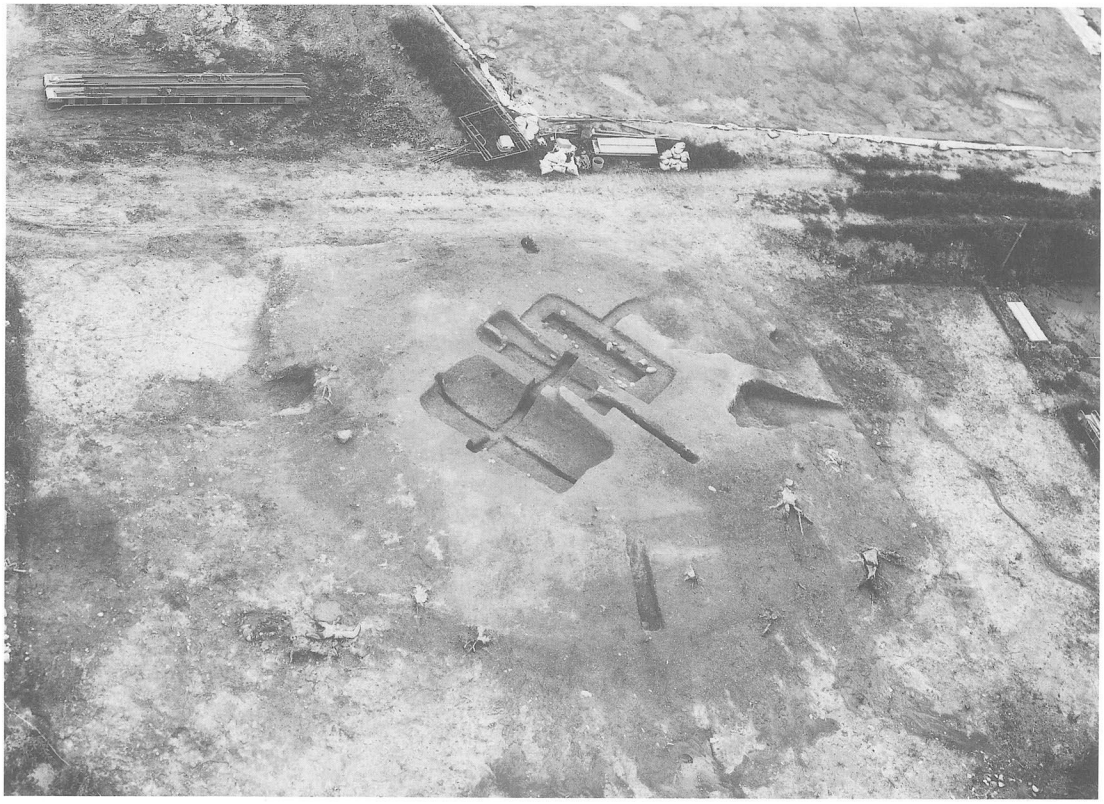
遺跡の遠景（北西から）

遺跡の遠景（南西から）

図版17　遠景



航空写真（北東から）



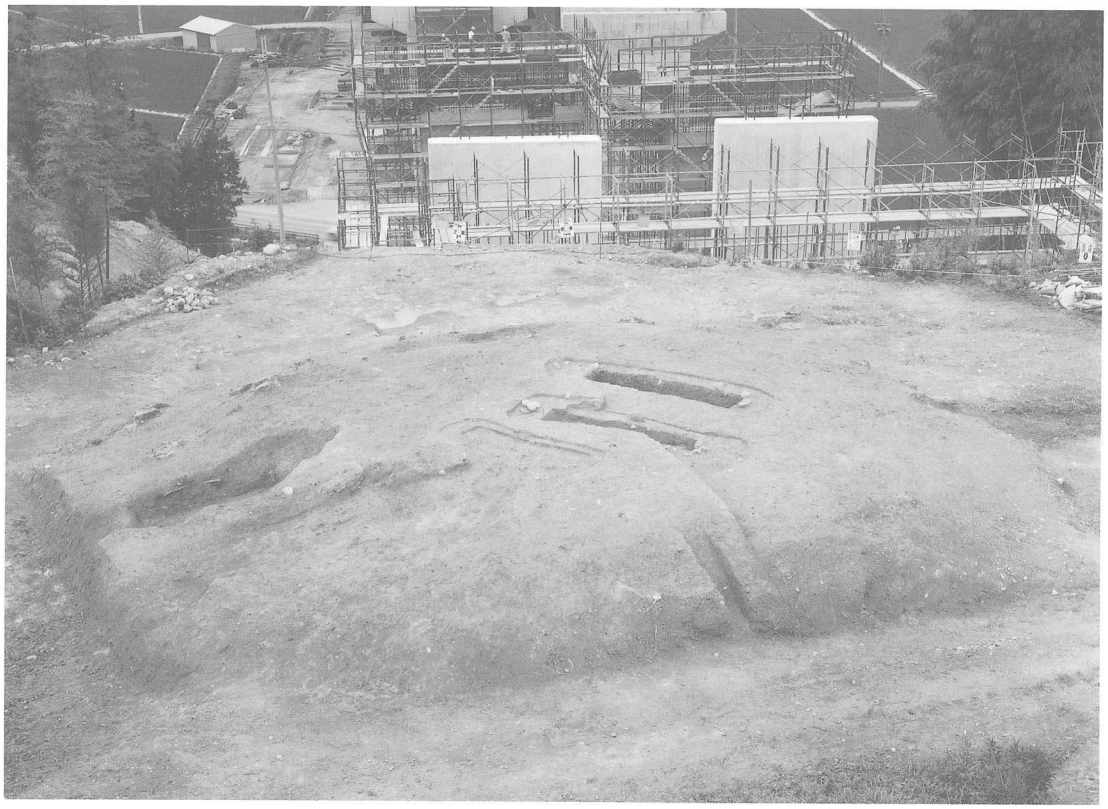
第１～第３主体部（南東から）

図版18　全景

大池７号墳調査前（西から）

第６主体部検出時（西から）

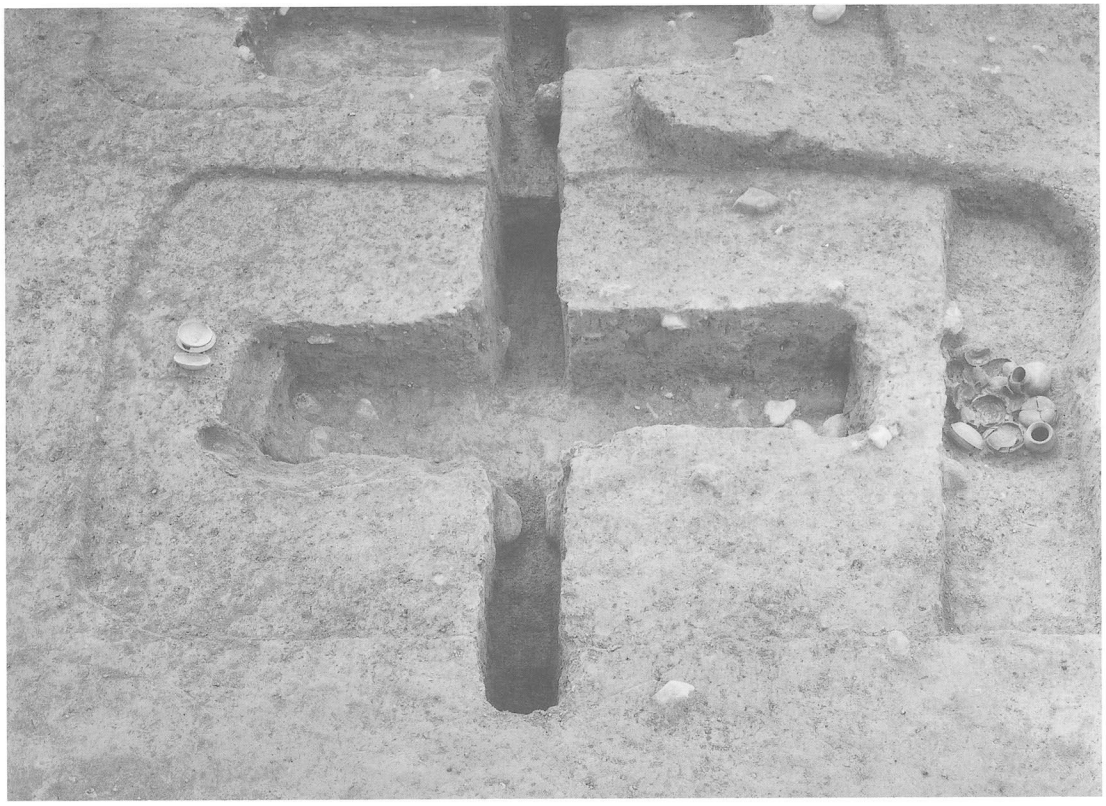
図版19　全景



第１・第２主体部検出時（北西から）

墳丘断ち割り状況（北西から）

図版20　第一主体部

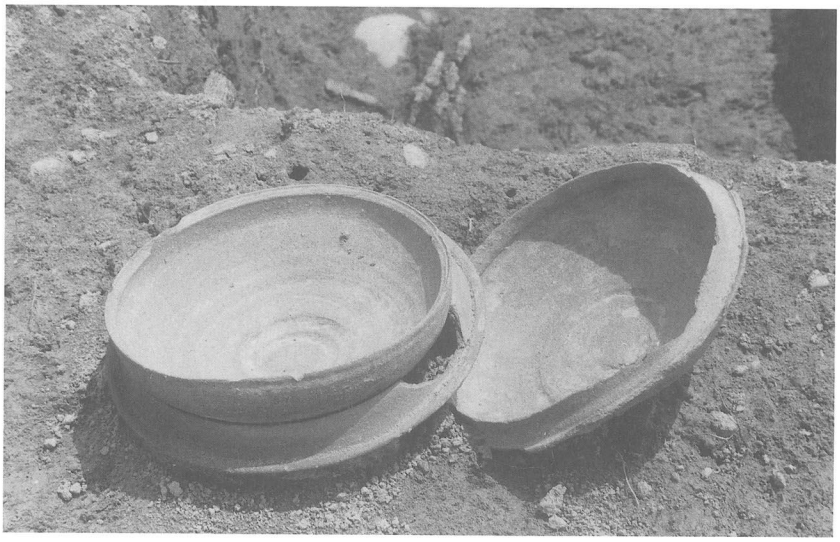


第１主体部（南から）

第１主体部棺内（西から）

棺外東木口部土器出土状況（西から）

棺外東木口部土器出土状況（南から）



棺外西木口部土器出土状況（西から）

図版22　第一主体部

第１主体部棺内東半（南から）

第１主体部棺内西半（南から）

棺内東木口部遺物出土状況（西から）

棺内東木口部玉類出土状況（西から）

図版24 第一主体部

Ｆ３出土状況（南から）

Ｆ５～14出土状況（南から）

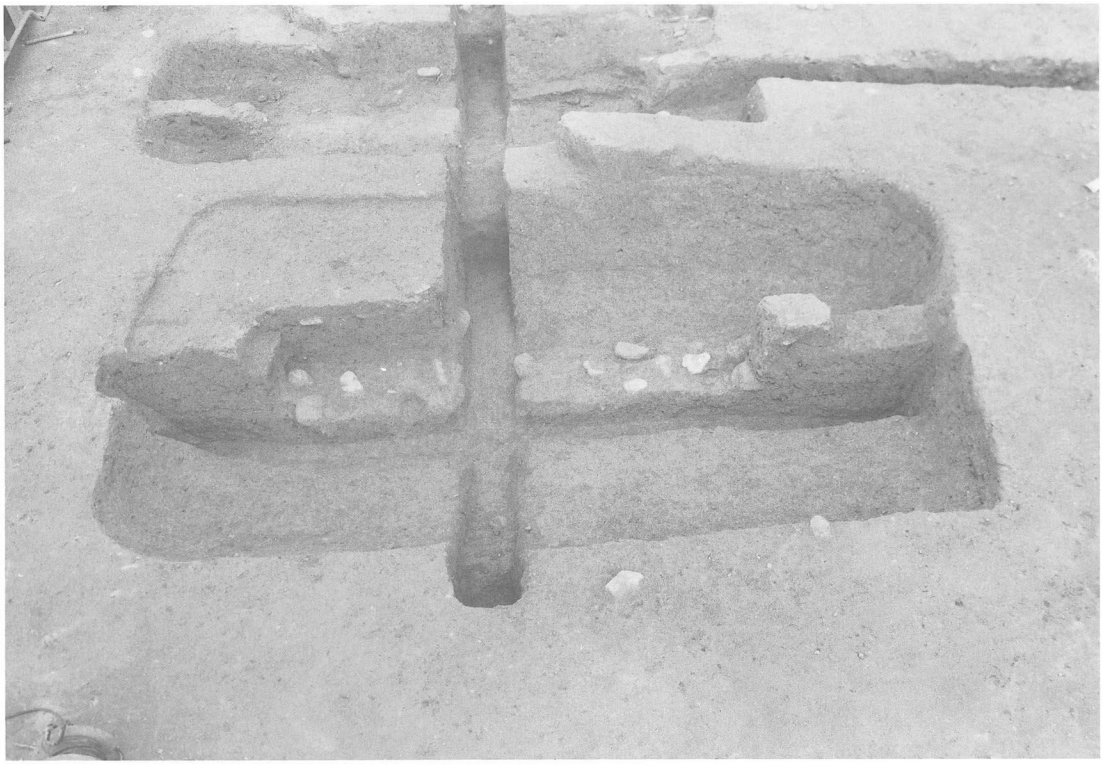
Ｆ２出土状況（南から）

Ｆ４出土状況（南から）

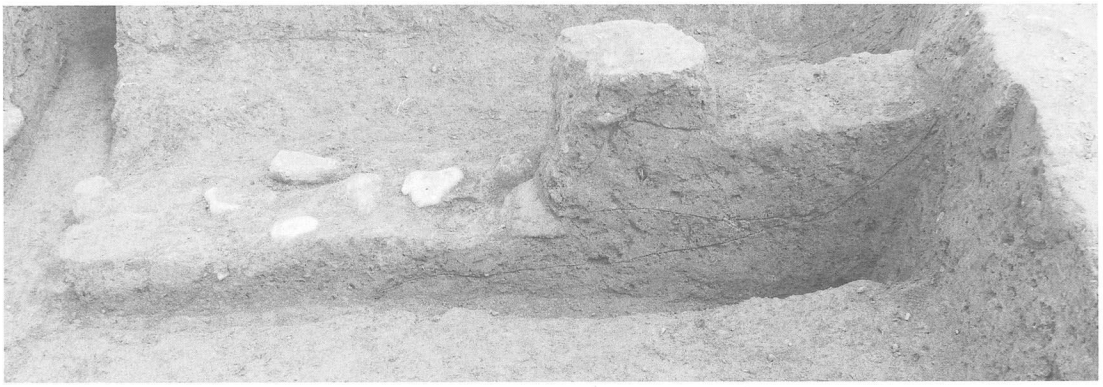
棺内土層堆積状況（東から）

墓壙内土層堆積状況（東から）

図版26　第一主体部



第１主体部断ち割り状況（南から）

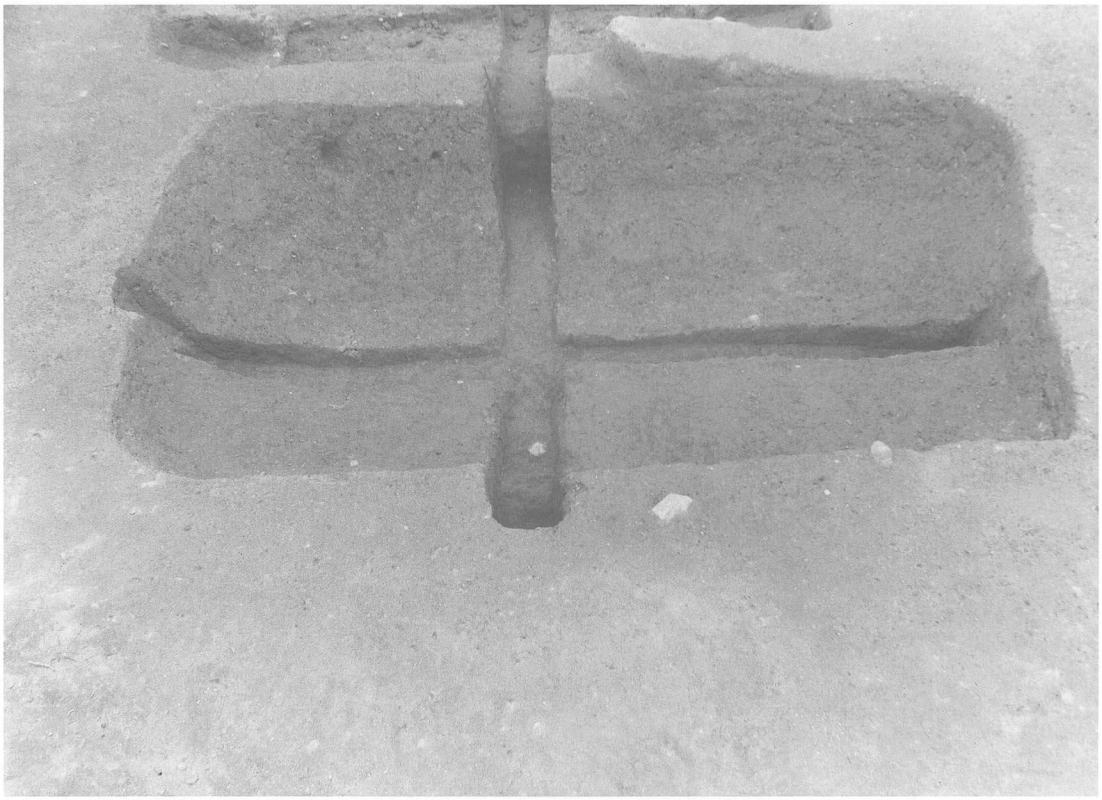


縦断ち割り・東側（南から）

縦断ち割り・西側（南から）

図版27　第一主体部

手前から第３・第２・第１主体部（北から）



第１主体部墓壙（南から）

図版28　第二主体部

第２主体部（南から）

第２主体部（西から）

棺外東木口部土器出土状況（上・西から，中・北から，下・東から）

F 16出土状況（南から）

F 15出土状況（南から）

墓壙内土層堆積状況（東から）

第２主体部断ち割り状況（北から）

第２主体部断ち割り状況（東から）

図版32　第三主体部

第３主体部（北から）

第３主体部（西から）

棺外土器出土状況（北から）

棺外土器出土状況（東から）

図版34　第三主体部

棺内鉄刀と
棺外土器出土状況（東から）

棺外東木口部土器出土状況（南から）

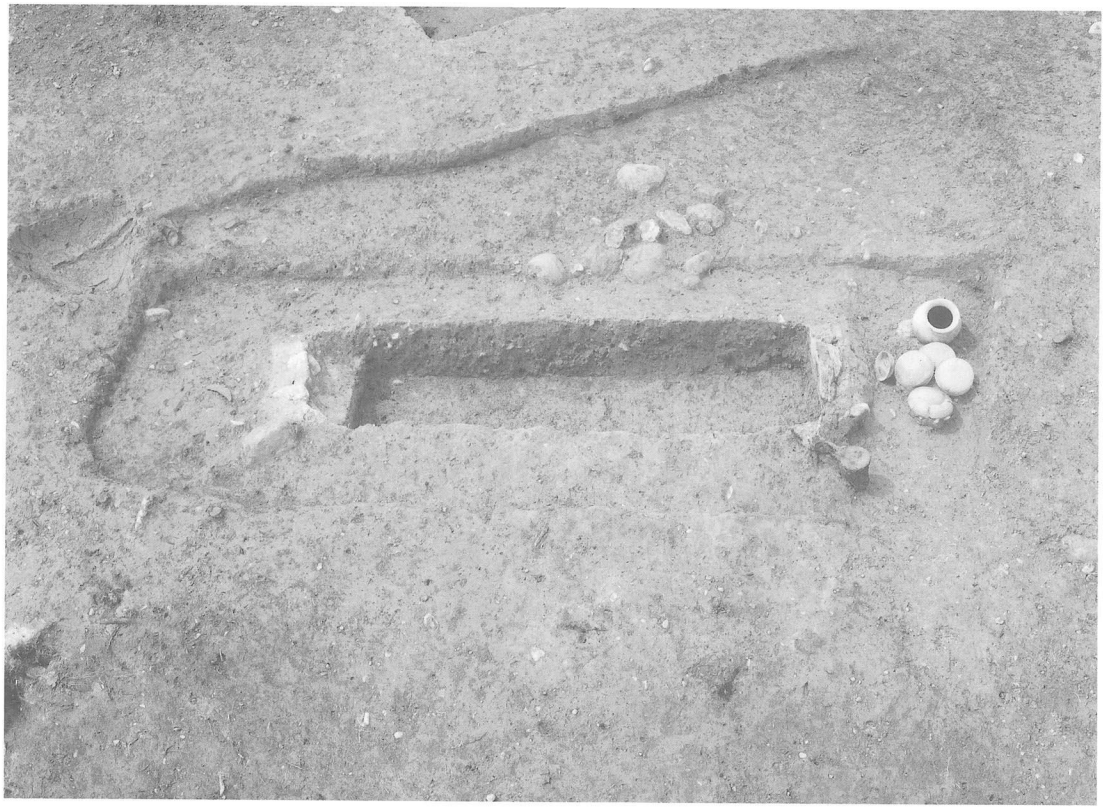
棺内鉄器出土状況
（西から）

鉄刀（F18）出土状況（北から）

棺内玉類出土状況（西から）

調査風景

図版37　第四主体部



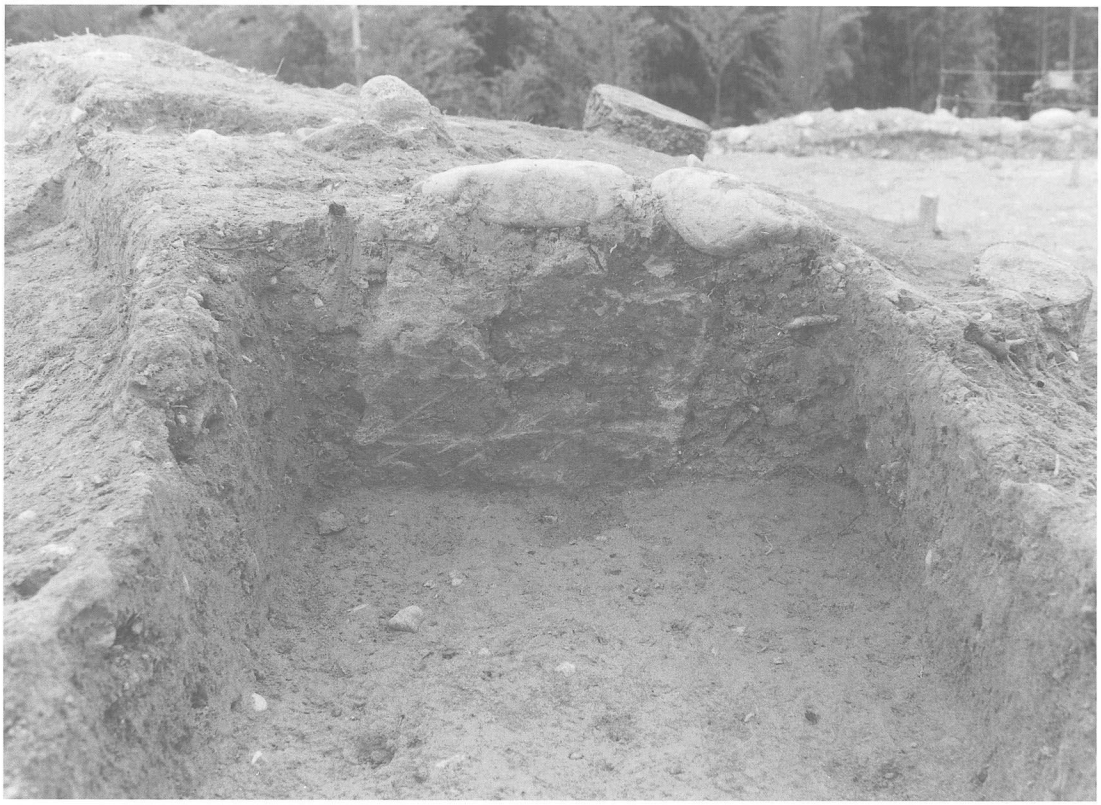
第４主体部（南から）

第４主体部と甕（西から）

図版38　第四主体部

棺外東木口部土器出土状況（南西から）

棺外東木口部土器出土状況（西から）



東側木口部分（西から）

西側木口部分（東から）

図版40　第四主体部

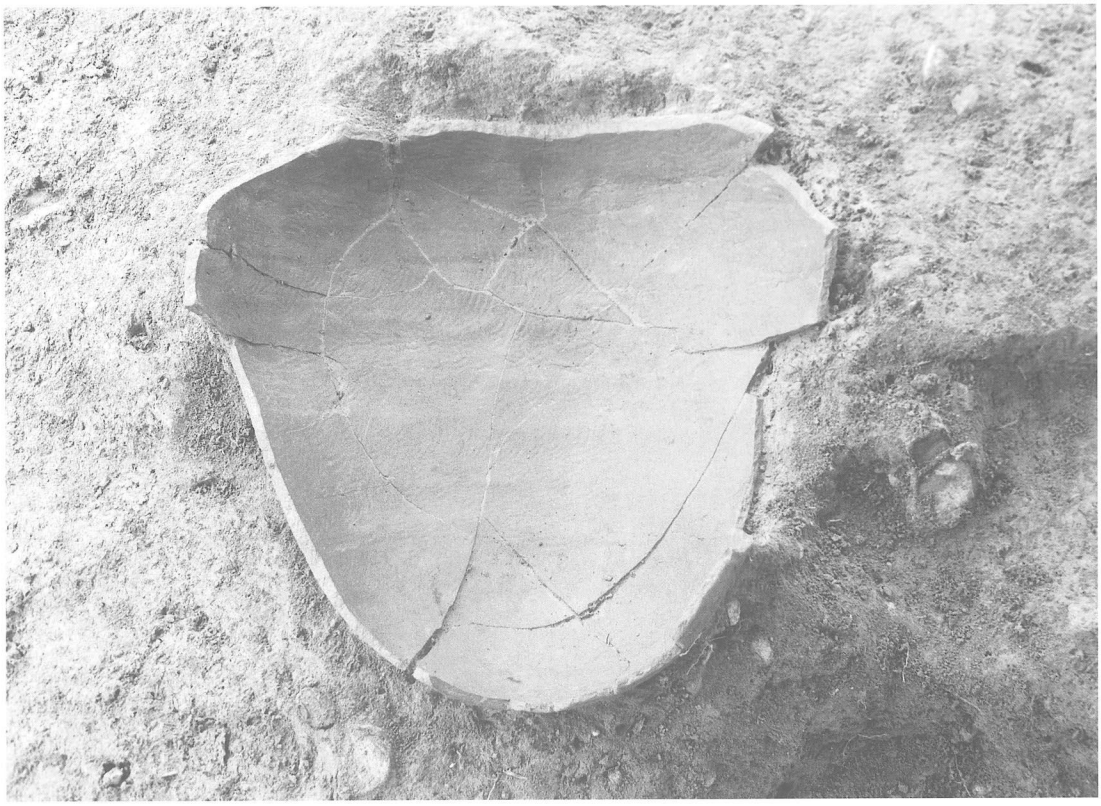
棺内掘り下げ状況（東から）

棺内土層堆積状況（東から）

縦断ち割り・東側（南から）

縦断ち割り・西側（南から）

第４主体部西側甕出土状況（北から）



甕出土状況（東から）

図版43　第五主体部

第５主体部（南から）

第５主体部（西から）

第５主体部棺内（東から）

Ｆ29・30出土状況（北から）

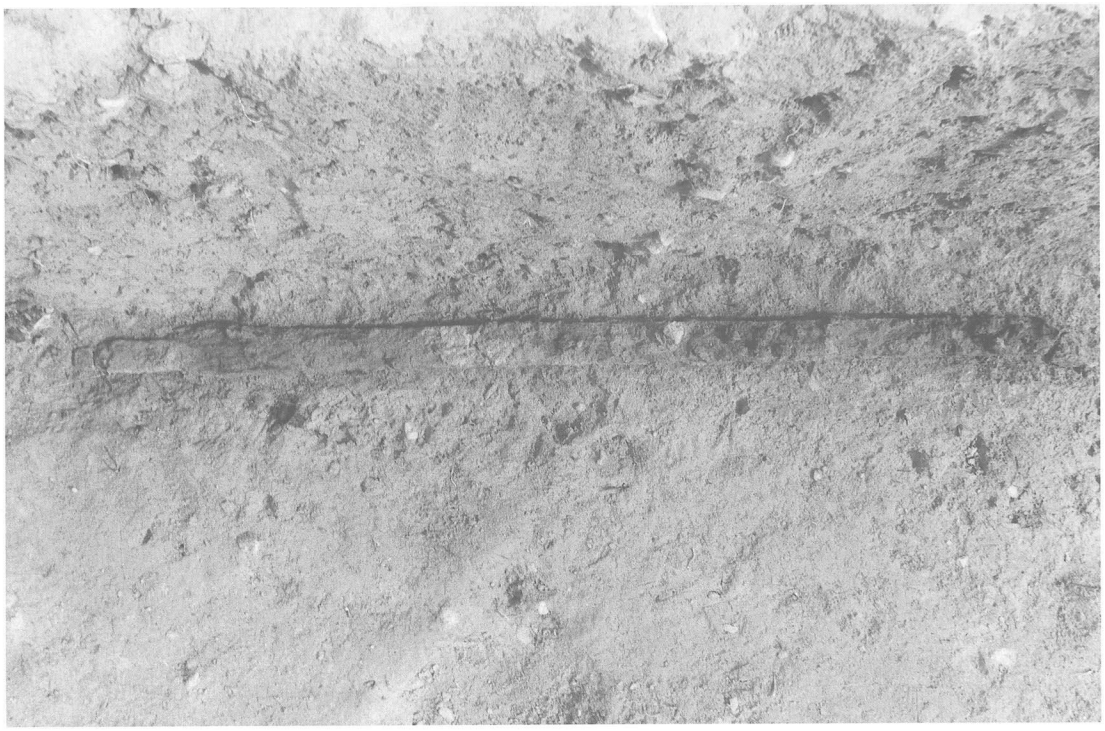
第6主体部（北から）

第6主体部（西から）

図版46　第六主体部

第６主体部棺内（東から）

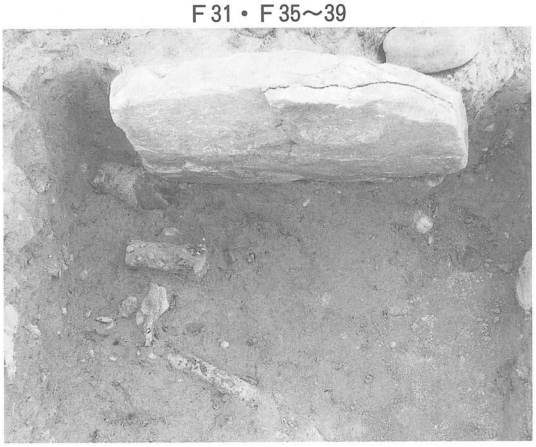
棺内東側鉄器出土状況（北から）

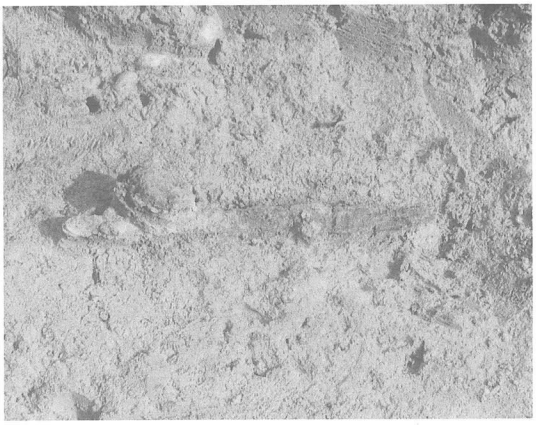


鉄刀（F 34）出土状況（北から）

F 31・F 35～39

F 32





F 33

棺内西木口

図版48　第六主体部

棺外東木口部土器出土状況（北から）

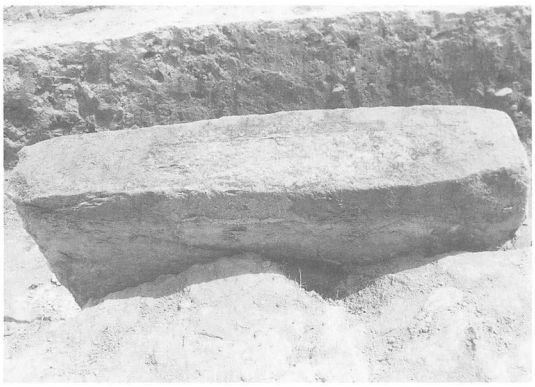
土器出土状況アップ（東から）

縦断ち割り・東側（北から）

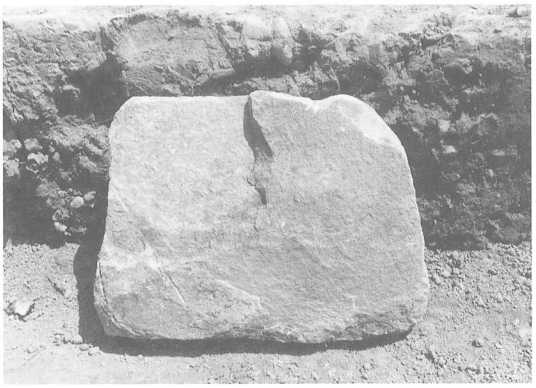
東側木口部粘土（南から）

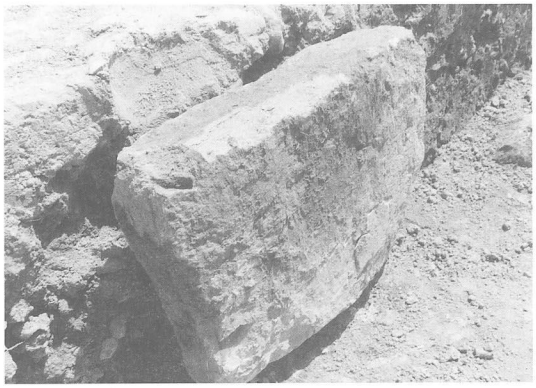
図版50　第六主体部

墓壙断ち割り状況（東から）



東側木口石

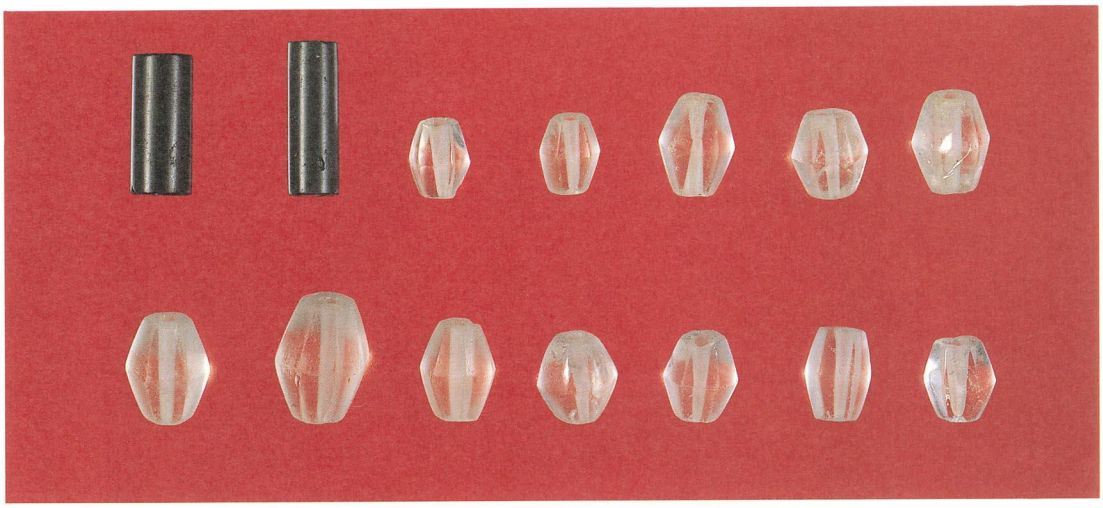


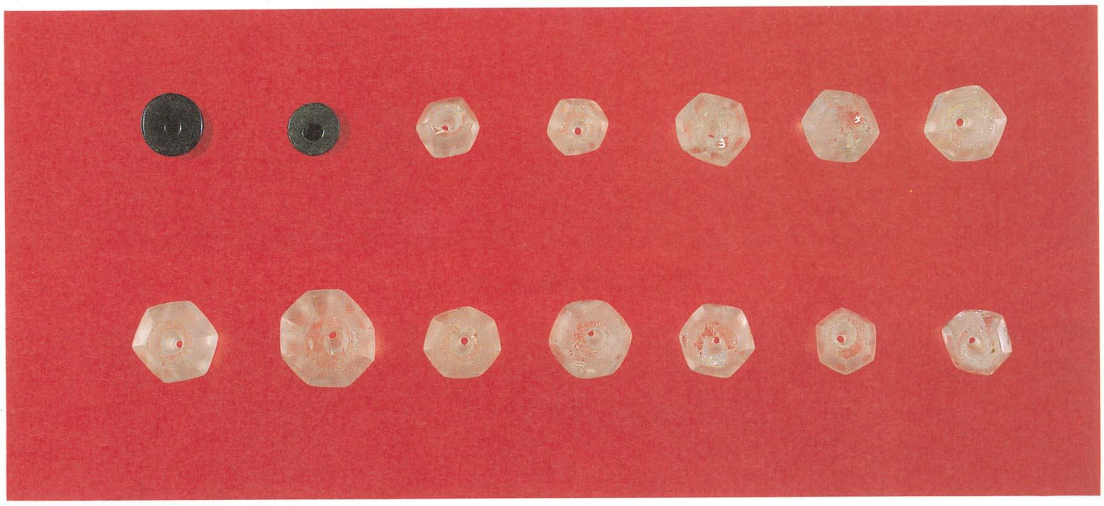


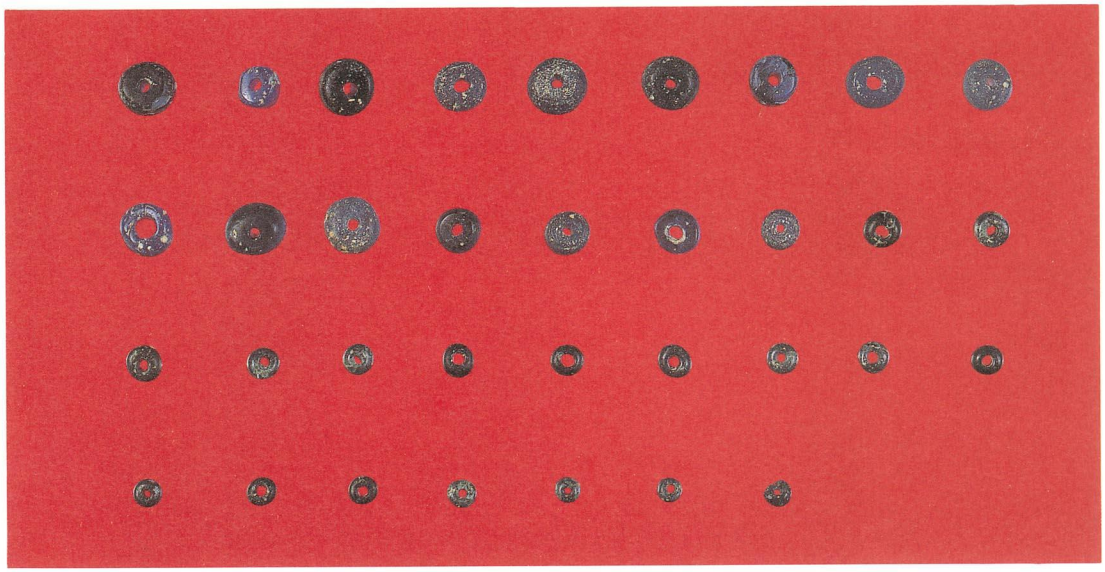
西側木口石

墳丘断ち割り東側（南から）

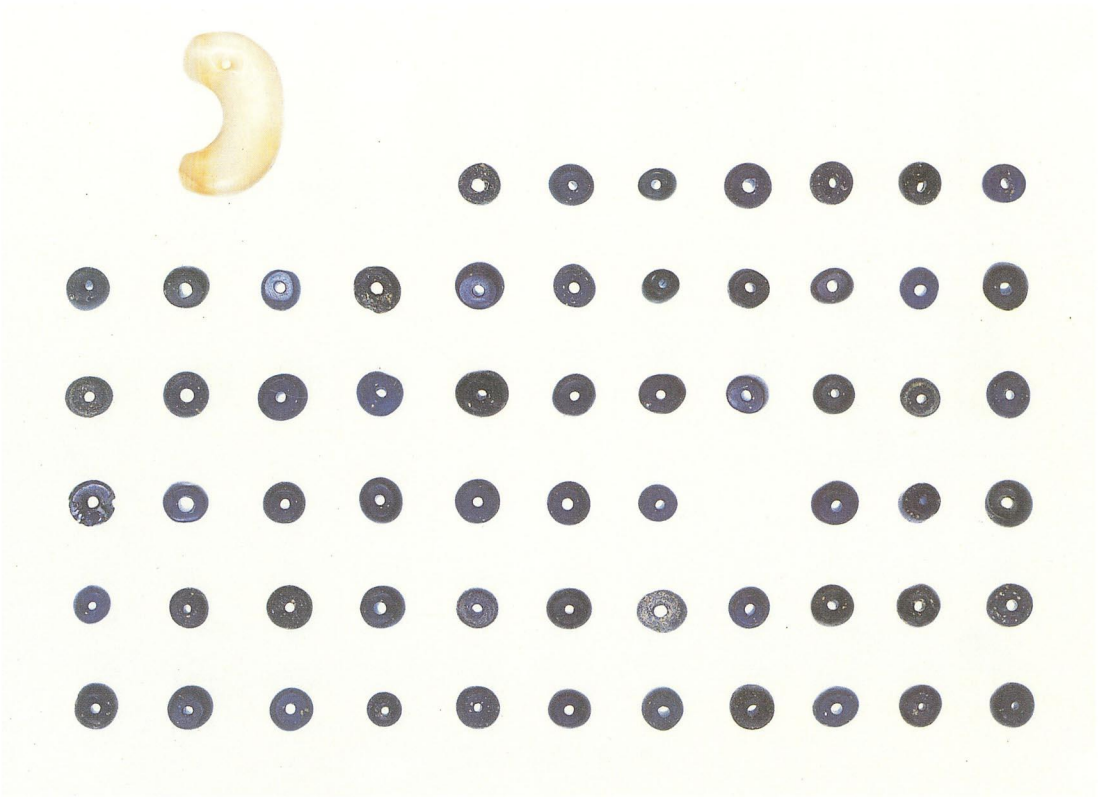
墳丘断ち割り西側（南から）

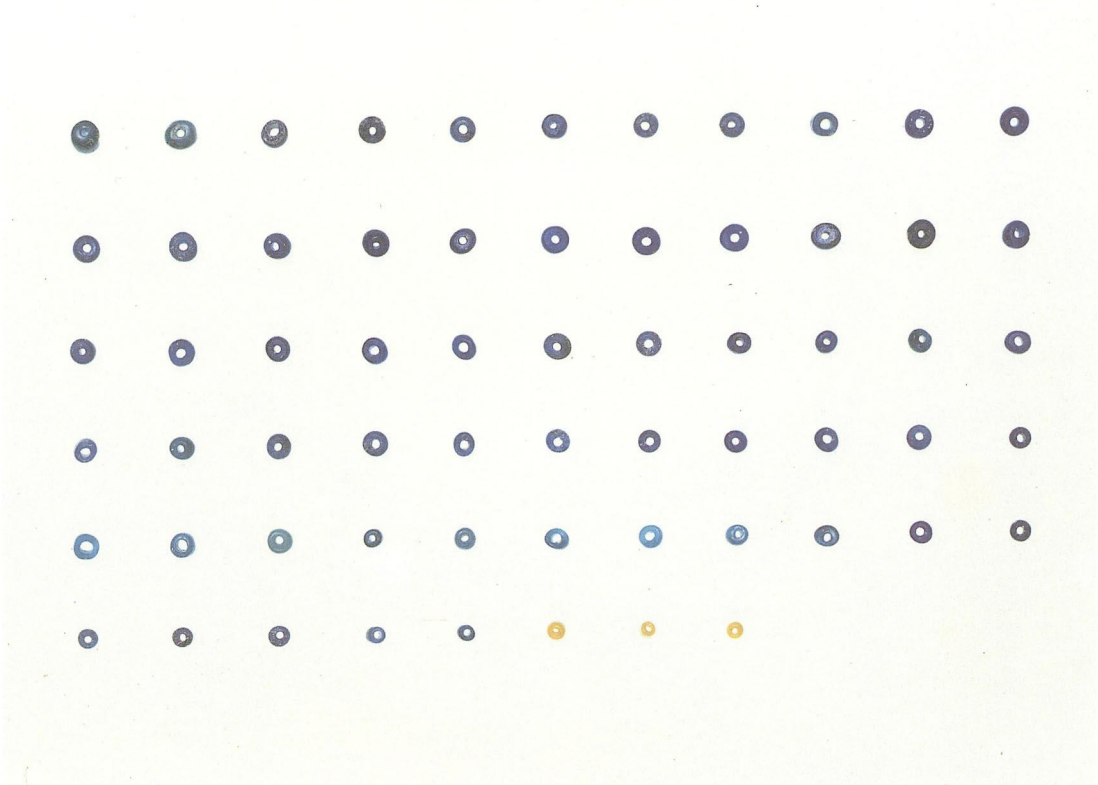




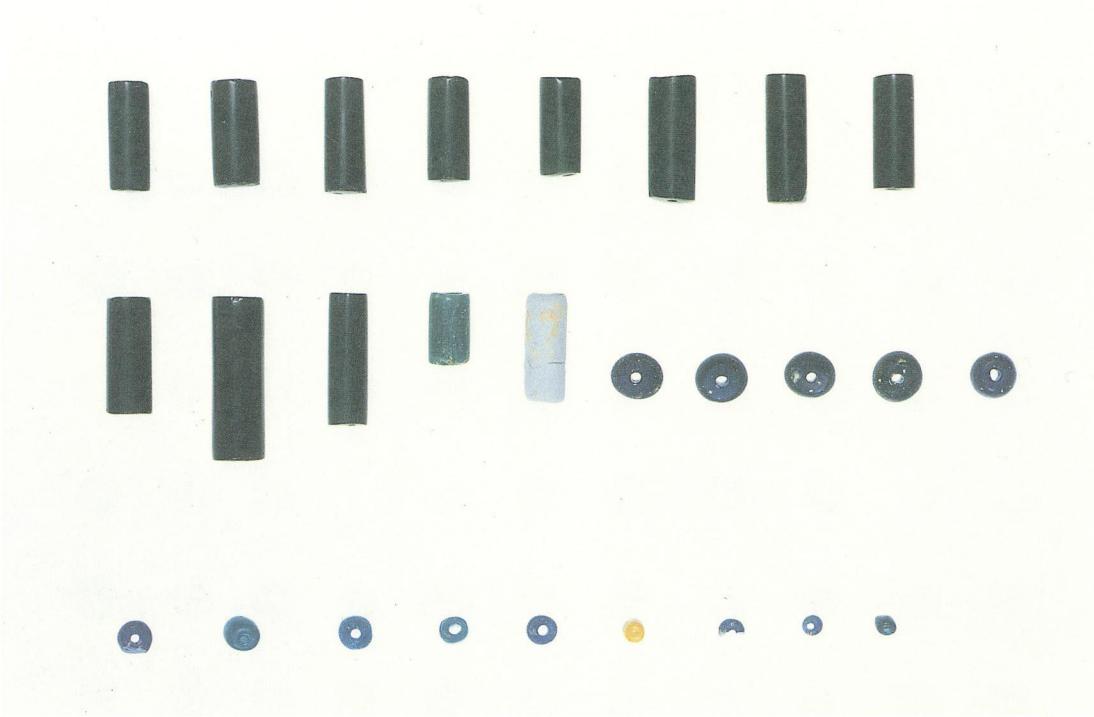


第１主体部出土玉類





第2主体部出土玉類

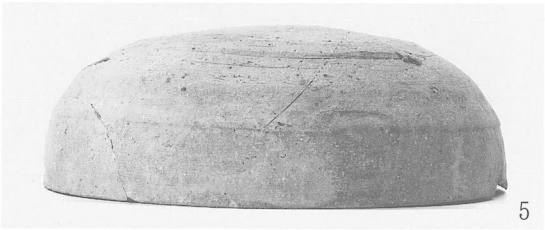


第３主体部出土玉類

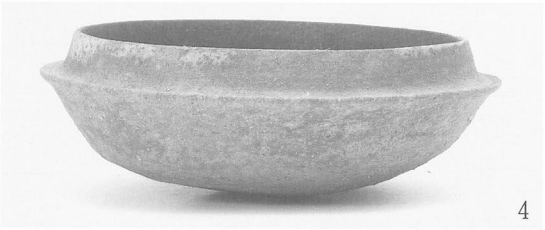
第１・２・３主体部玉類復原

1

2


5

3


4

5・4

6

6・7

7

8

8・9

9

第１主体部出土土器(1)

10

11

10・11

12

13

12・13

14

15

14・15

第１主体部出土土器(2)

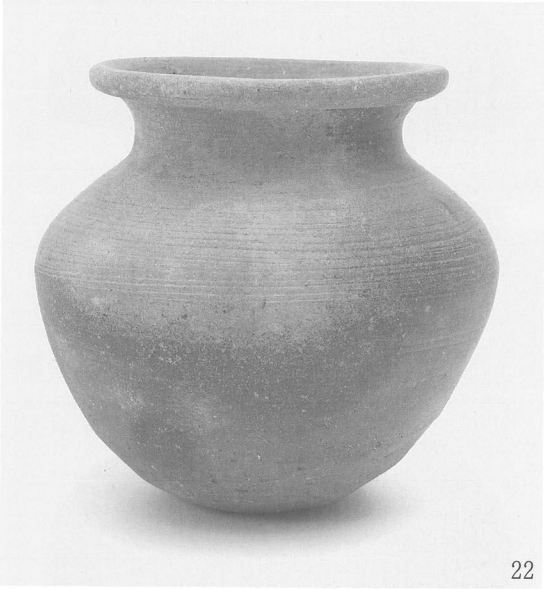
16

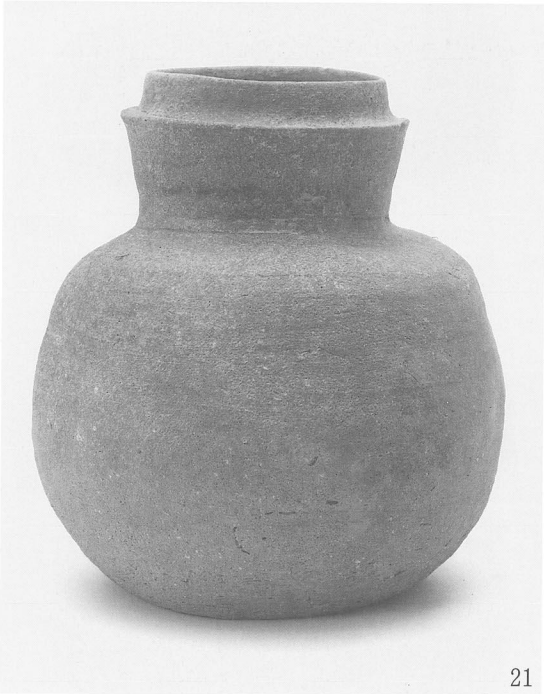
18

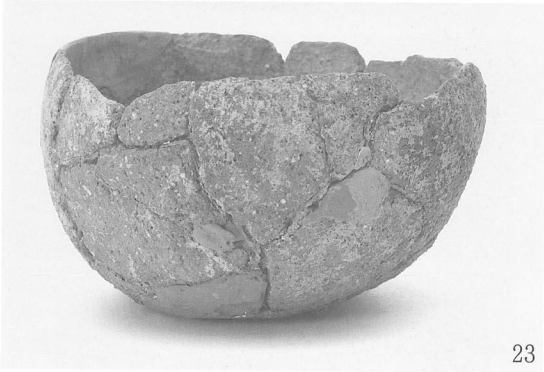
17

19

20


22

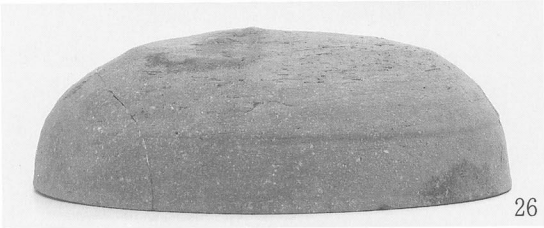

21


23

第１主体部出土土器(3)

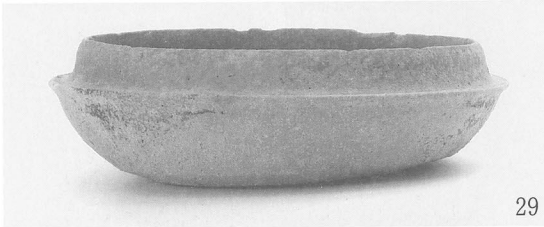
24

25


26

27

28


29

31

24・25

26・27

28・29

30

32

第2主体部出土土器

33

34

33・34

35

36

35・36

37

38

37・38

第３主体部出土土器(1)

39

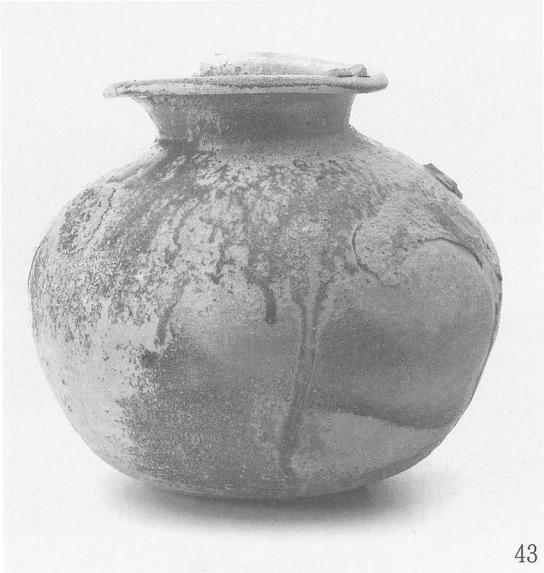
40

39•40

41

42

41•42

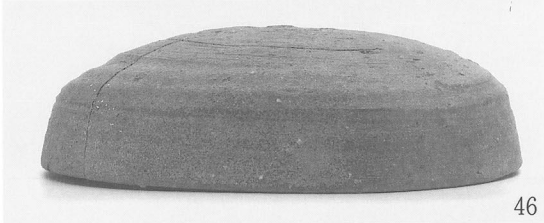

43

第３主体部出土土器(2)

44

45

44・45


46

47

46・47

48

49

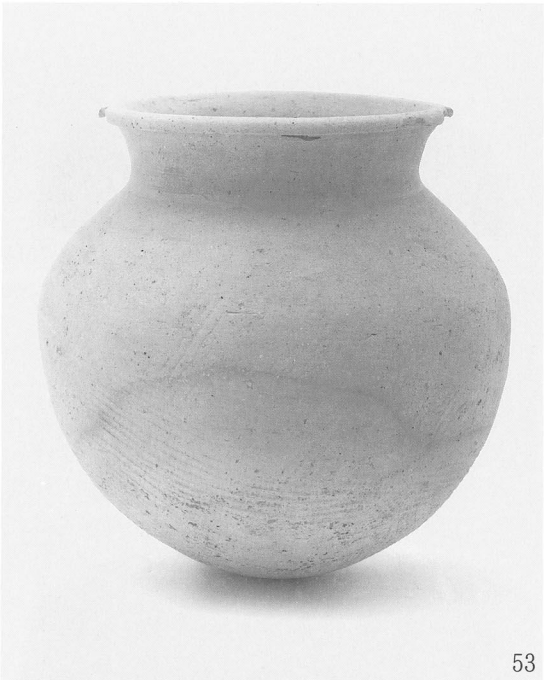
48・49

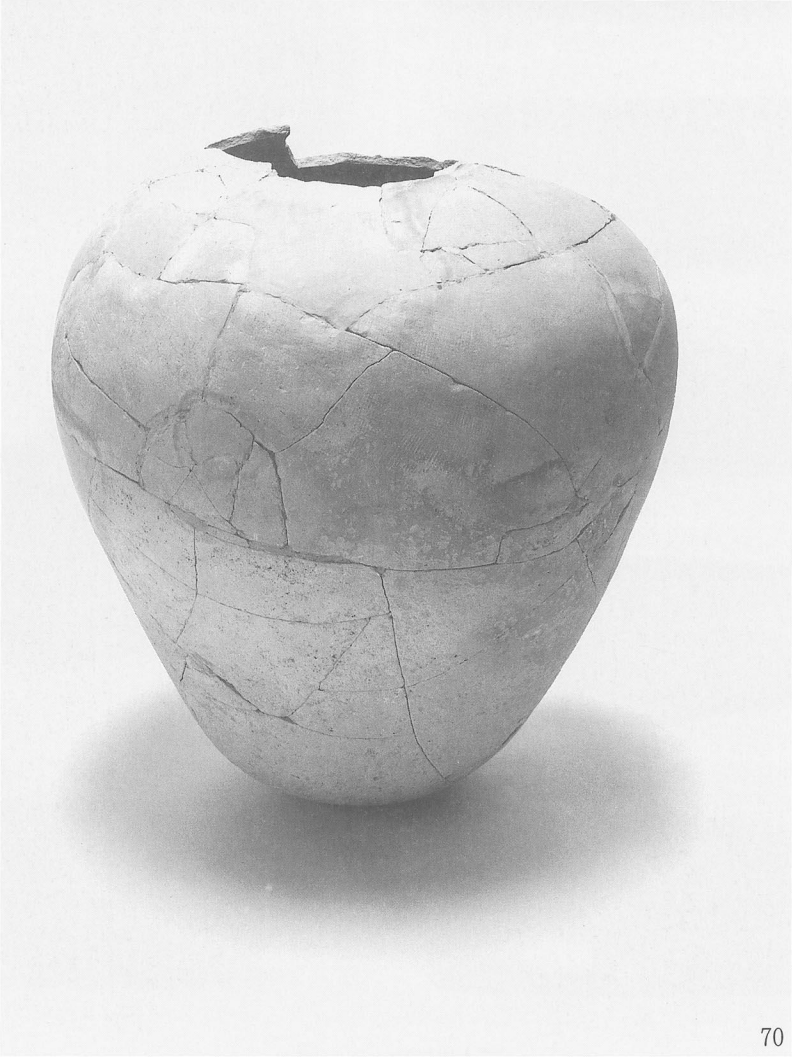
50

51

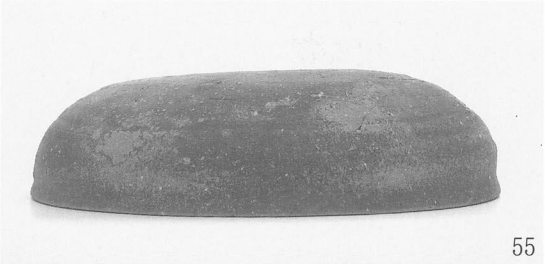
第4主体部出土土器(1)

52


53


70

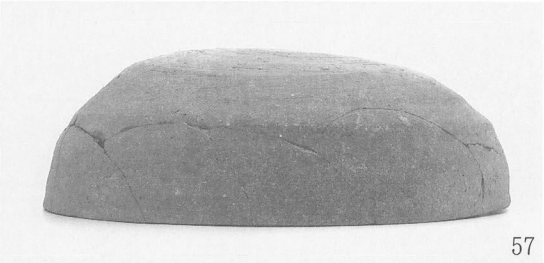
第4主体部出土土器(2)


55

54

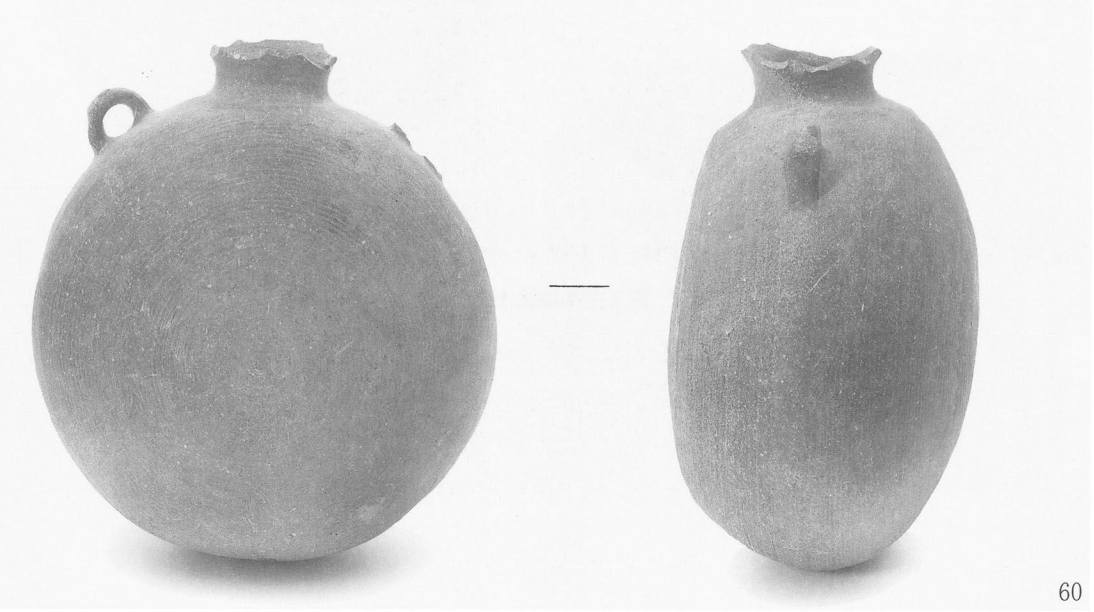
54•55

56


57

58

59


60

第 6 主体部出土土器(1)

図版64

61

62

63

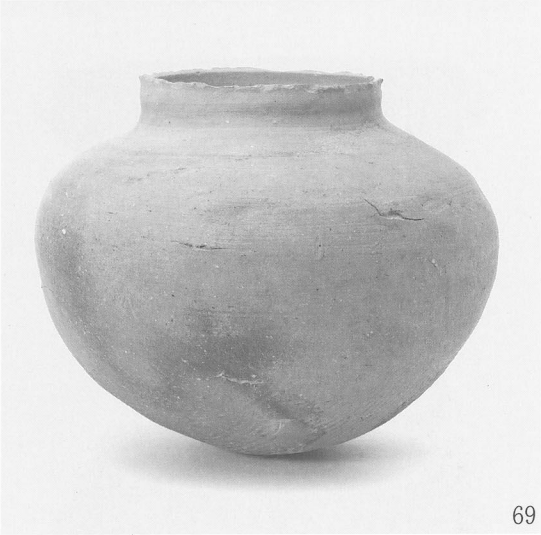
64

65

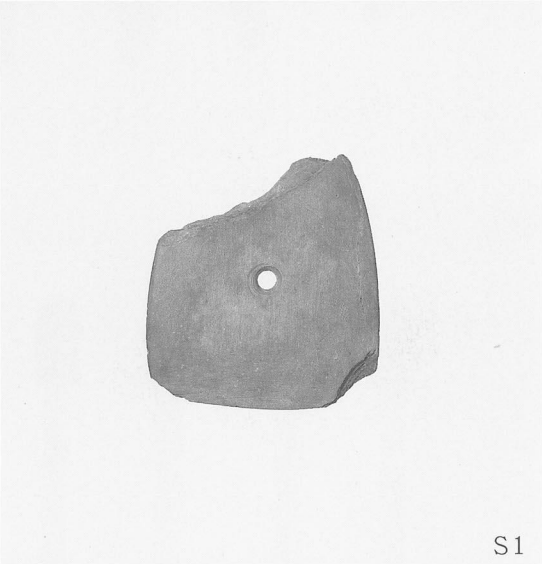
66

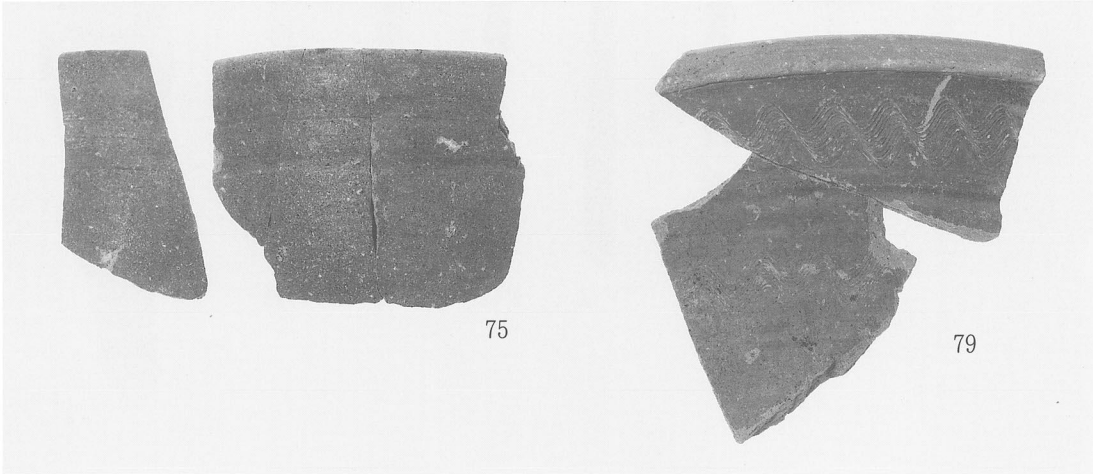
67

68

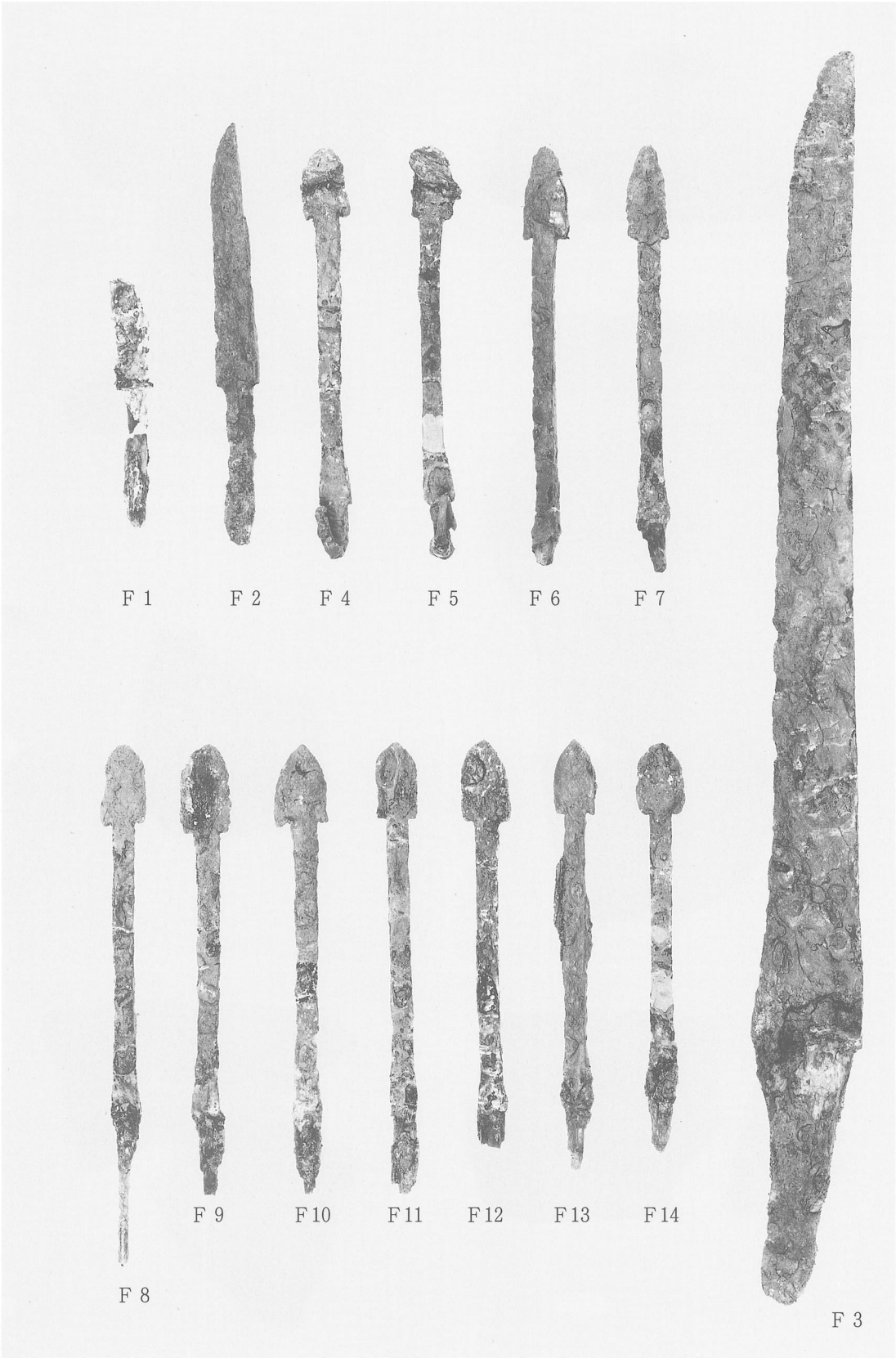

69

第6主体部出土土器(2)

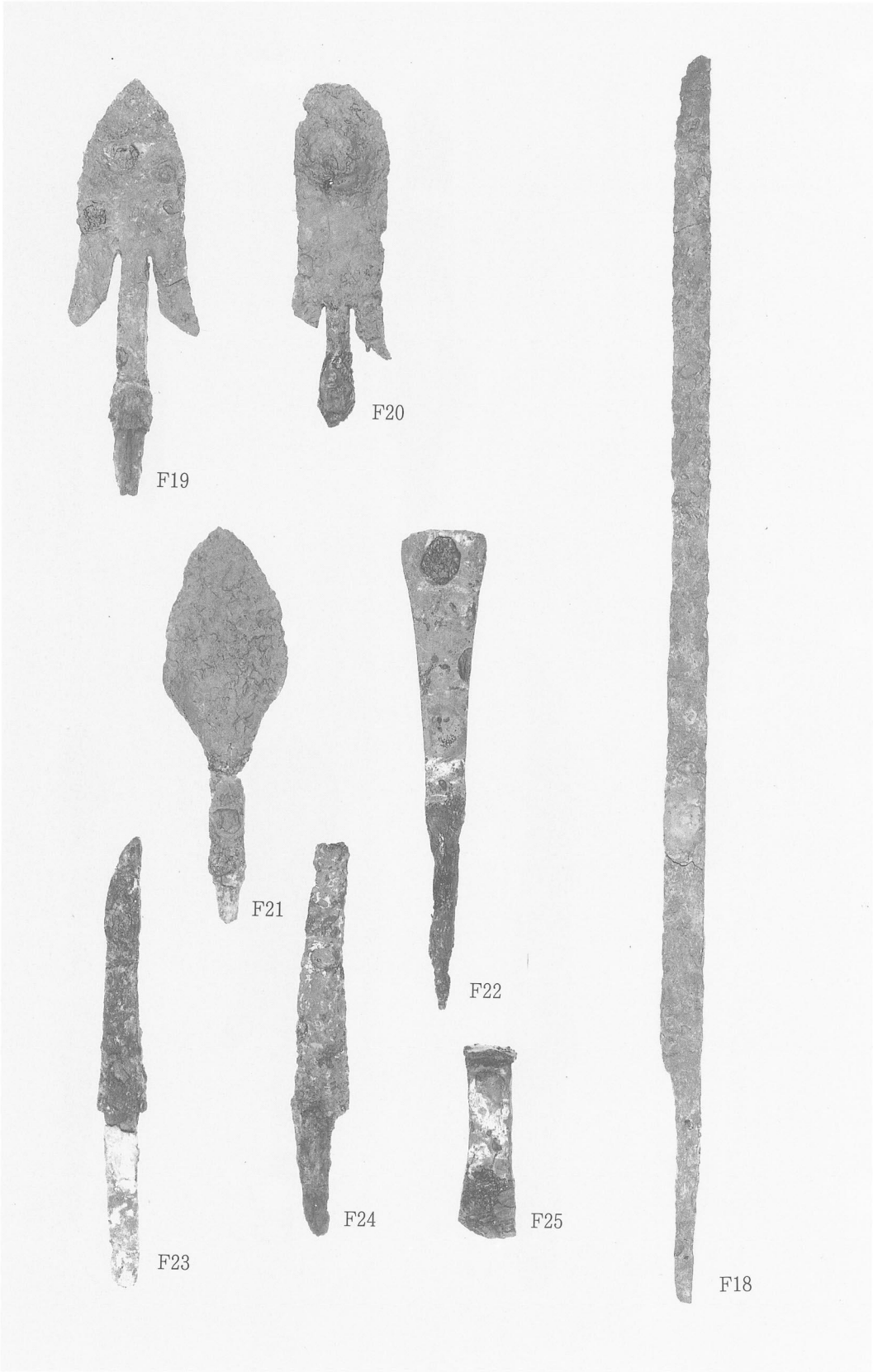




墳丘上面出土の遺物

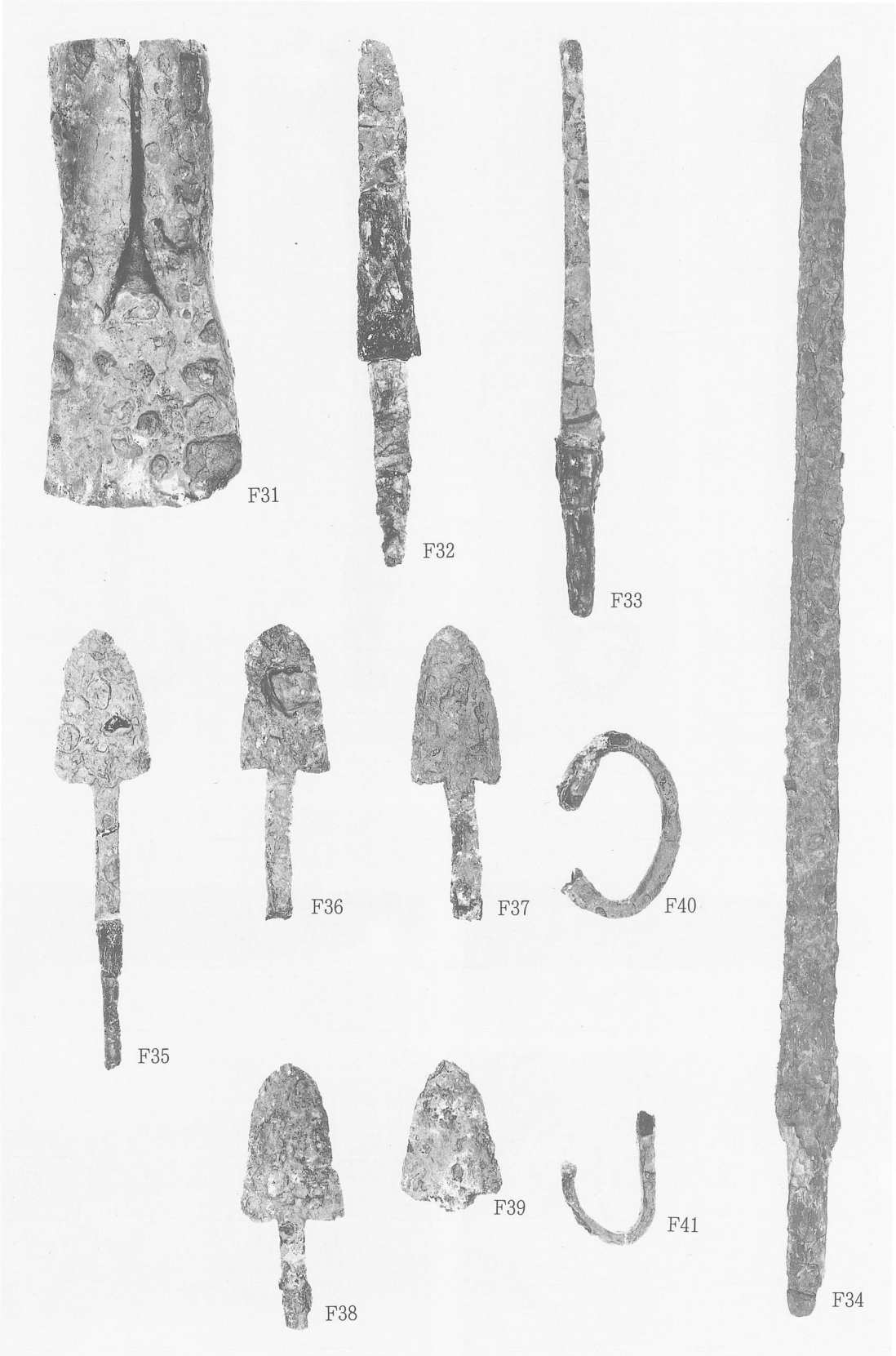


第１主体部出土金属器



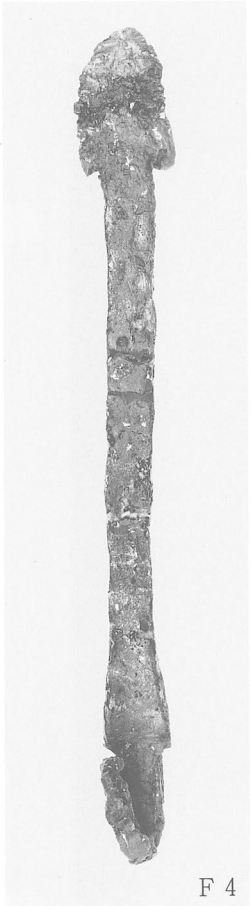
第3主体部出土金属器

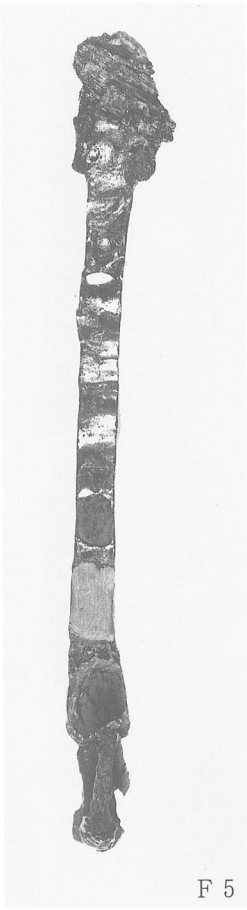
第2・4・5主体部出土金属器

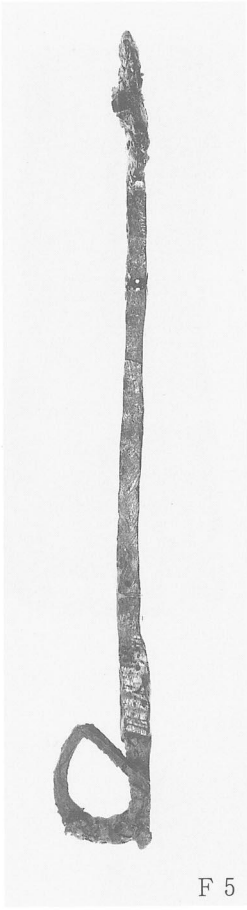


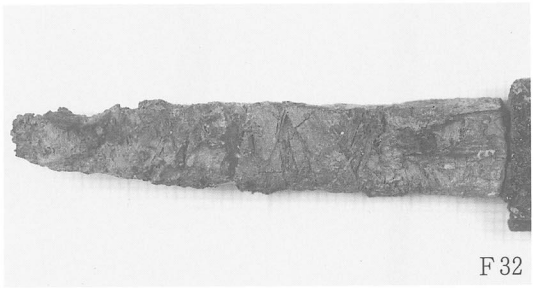
第6主体部金属器

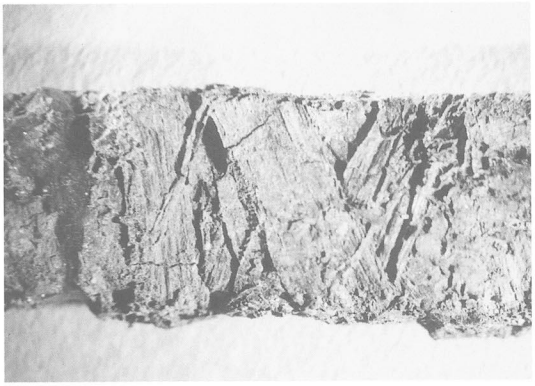
図版70











出土金属器拡大（F 4 ・ 5 ・23・32）

編集後記

この報告書の刊行年度にあたる平成６年度は１月17日に発生した「阪神大震災」で、兵庫県内各地に多大な被害を受けました。

倒壊した住宅やビル、巨大な高速道路をまのあたりにして言葉を失いました。まして、死亡者数５千５百余名という数字はあまりに重すぎ、20万人とも言われる人々が、住む家を失い避難所での生活を強いられている現実は、受け入れるにはあまりに大きすぎるものです。

「豊かな生活」を求めて我々は家を建て、高速道路を造り、地下鉄を通し、都市をつくりあげてきました。しかし、このような便利さ・快適さを追求した先には本当の意味での「豊かな生活」があるのでしょうか。そして、この努力さえも自然の前にはあまりにも無力でした。

考えてみれば、人間の歴史は災害の歴史でもありました。我々が行っている発掘調査でみつかる「過去」の生活面は災害の連続です。洪水で押し流されて廃棄された村、２ｍも火山灰に埋もれて壊滅した村などが検出されます。これらは「いま」もまた歴史の連続性の中に存在していることの認識を新たにさせました。

そして、「いま」は「未来」に続いてゆくこと、これも確かなことであります。

「未来」の人々は「過去」の我々の生活面をみて、何かを受け取ってくれるのでしょうか。

今回の震災で整理作業にも少なからぬ影響が生じました。このような困難な状況下で報告書作成に携わった嘱託員の努力に感謝します。

（ＫＡＺ）

三木市

兵庫県文化財調査報告　第137冊

大池（おおいけ）7号墳

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XI

平成7年3月発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652　神戸市兵庫区荒田町2丁目1－5
TEL (078) 531-7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒650　神戸市中央区下山手通5丁目10－1
TEL (078) 341-7711

印　刷　株式会社リョーイン
〒652　神戸市兵庫区和田崎町1丁目1－1